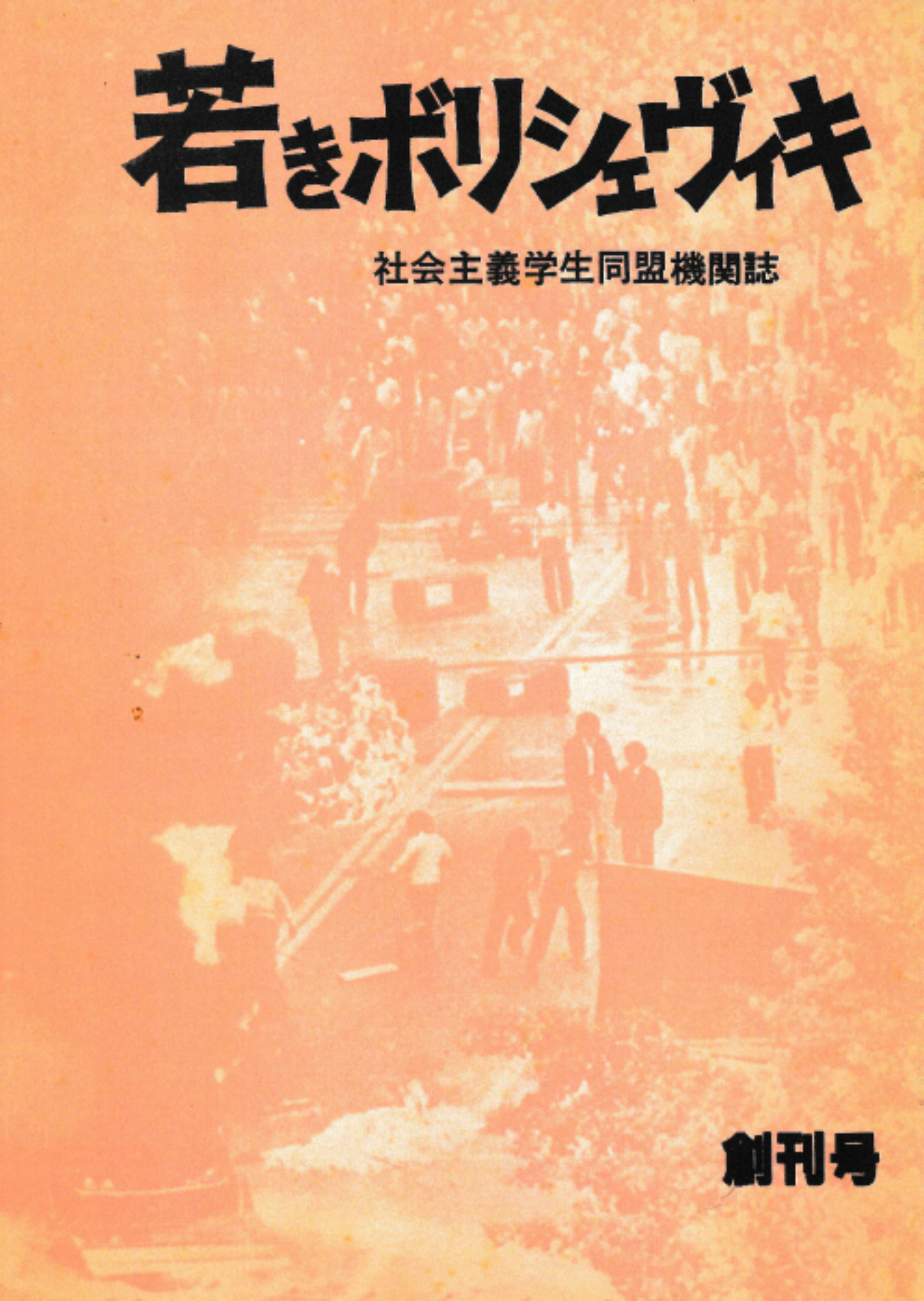
若きボリシェヴィキ

社会主義学生同盟機関誌



創刊号

「若きボリシェヴィキ」発刊にあたって

社会主義学生同盟は、六月二十一日、全国八十余名の先進的学友の結集で再建された。

七〇年夏の共青同―社学同統合による社学同の組織的解消以来実に十年目の再建であった。

この十年間、日本学生運動は「冬の時代」を強いられてきた。しかし、この十年間、全世界の被抑圧民族人民は着実に帝国主義を追いつめ、今や死の苦悶に追いこんでいる。そして、光州蜂起による八〇年代の幕あけは、帝国主義を追撃する嵐の時代の到来を、われわれに告げ知らせている。

再建された社学同は「時代の申し子」たるべく、激動の八〇年代の先頭にたって闘う決意である。

今日、日本学生運動は、ようやくにして、新たな高揚を迎えようとしている。われわれは、二次ブント―社学同の敗北を対象化し、日本学生運動の革命的伝統を復権するために、そして、不抜の社学同を再建するために奮闘する。

本機関誌は、文字通り「若きボリシェヴィキ」たらんとして苦闘するわれわれの武器である。未だ幾多の不充分性を有したわれわれは、この武器をとぎすましながら、前進していくであろう。社学同のみならず、すべての先進的学友の闘いの指針として、本誌が役立っていくことを願ってやまない。

なお、本誌名「若きボリシェヴィキ」は、二次ブント―社学同にあって、理論的綱領的闘いの原点となった、荒同志の手による早大支部機関誌に冠せられていたものであることを付け加えておきたい。

目　　次

「若きボリシェヴィキ」発刊にあたって …… 1
社学同再建宣言 …… 2
社学同再建集会基調報告 …… 4
東外大サークル棟闘争総括 …… 15
日大闘争の革命的爆発に向けて …… 25
東海大闘争の前進をかちとれ …… 37

学習

「ドイツ・イデオロギー」ノート …… 45
韓国学生運動史 …… 59

社学同再建宣言

一九八〇年六月二十一日

本集会に結集した全ての同志諸君、戦闘的学友諸君！

本日ここに、われわれは、社会主義学生同盟の再建を高らかに宣言する。

われわれは、栄誉ある日本学生運動の革命的伝統を自らの手で復権させ、新たなる高揚を切り拓くために、そして、自身がその闘いの担い手たるべく本集会に結集した。われわれは、本集会の成功をもって、七〇年安保闘争以来強いられてきた日本学生運動の「冬の時代」に、今こそ歴史的ピリオドを打つのだ。。

全ての同志、学友諸君！

本社学同再建に、全国二百万学友が注目し、心からの期待を寄せていることを肝に銘じ、これに満身の力をふりしぼり応えきろうではないか。

想起しよう、社学同の歴史を。日本学生運動の歴史の中で、社学同は、「情況の脇腹」と呼ばれた学生の先駆性、先覚性を余すところなく発揮させ、その最先頭で闘った。

五八年、裏切者日本共産党から決然と訣別し、革命的学生運動の戦端を拓いたのは、他ならぬ社学同であった。われわれは、国会に突入し、安保粉砕・日帝打倒を叫び、若い命を捧げた樺美智子同志の革命的情熱を断乎として継承する。

六七年十・八羽田闘争において、社学同はいち早くゲバ棒を手にし、兇暴な機動隊のぶ厚い壁を突破し、三派全学連の最先頭で闘った。われわれは、ここで示された社学同の「組織された暴力とプロレタリア国際主義」を必ずや開花させる。防衛庁突入、東大安田決戦でいかんなく発揮された、その戦闘的なブント魂をわれわれは身をもって体現する。

七〇年安保決戦以降、確かに社学同は分裂に伴い再編され、消滅した。しかしながら学友諸君、七〇年代の苦節は無駄ではなかった。三里塚・狭山闘争などを通じ、より深部での人民大衆との結合をかちとってきた。最もラディカルな革命の原動力である被差別大衆、被抑圧民族・人民との連帯の内実を深化させ、真に人民の最良の息子たるべく刻苦奮闘してきたのだ。その成果は、今やはっきりと結実しつつある。

三・二六管制塔占拠闘争を見よ！　開港阻止決戦の最先頭で、わが同志は、一切を投げうって闘い抜き、管制塔を占拠し、開港を撃破する歴史的偉業をなしとげたではないか。これこそがわれわれの誇るべき闘いであり、獲得すべき戦闘精神であり、そして再建社学同の原点である。われわれは、この魂をもって灰燼の中から甦る不死鳥の如き再生を、今ここに実現する。

社学同再建準備のさなか、折しも玄海灘を隔てた韓国の学友たちが、決死の闘いに起ち上がった。兇悪な軍事独裁に対し、ついに銃を手にし、武装蜂起を敢行したのだ。彼らは、流血と硝煙の光州でこう叫んだ。「最後の一人、最後の一刻まで闘おう！」

この言葉どおり、彼らは無数の友の屍を乗り越えて徹底抗戦し、最後の瞬間まで白旗をかかげることをしなかった。われわれは、韓国学友のこの英雄的な闘いにとことん学び、続くのでなければならない。わが社学同こそが、真に韓国学友の血叫びに応えぬこうではないか。

全ての同志、学友諸君！

現代世界は激動している。第三世界人民の怒濤のような武装解放闘争が全世界をおおい、帝国主義者共に死の苦悶を与えている。絶望にかられた帝国主義者どもは、侵略反革命戦争の道をひた走っている。世界は、まさに「戦争と革命の時代」に突入した。

われわれは、この激動の中に身を置き、闘えることを至上の喜びとしよう。この歴史のるつぼの真只中に社学同を再建できることを最大の光栄と考え、このるつぼの中でこそ鉄火の社学同と不屈の革命的共産主義者は打ちきたえられることを確信しようではないか。

歴史は、われわれに要求している。断末魔の帝国主義に死を与えよと。学生こそ、その先鋒に起てと。

われわれは、喜んでこの比類なく重く、偉大な任務をひき受けよう。帝国主義者への弔鐘に代って、プロレタリア世界革命の曙鐘を乱打するのだ。

結集した全ての同志諸君！　学友諸君！　今こそ日本学生運動の革命的伝統を復権し、全国学生を日帝打倒闘争の最前線へと牽引せよ。

われわれは、断じて二度目の茶番を演じるわけではない。われわれは、第三次ブント建設の苦闘の上にある。われわれは、レーニン・ボルシェヴィズムの息子として、今甦るのだ。

社学同は再建された。われわれの眼前には、次の言葉が残されている。

「闘いか死か、血みどろの闘いか無か、問題は厳としてこう提起されている」（J・サンド）

韓国学生決起に連帯し、日本学生運動の革命的伝統を復権せよ！

社学同再建集会基調報告

すべての学友諸君！　同志諸君！

本年五月、韓国光州（クアンジュ）で爆発した民衆蜂起は、現代世界がどのような世界であり、八〇年代がどのような時代であるかを一点の曇もなくさし示している。

そう、まさに帝国主義とそのカイライどもの悪虐非道な人民への抑圧が極限にまで煮つまった世界であり、これを打ち破る人民の闘いが全世界でまきおこる時代、戦争と革命の時代である。社学同の再建は、この時代の要請に応えるためにこそなされるのである。

六〇年、七〇年と二度の敗北を余儀なくされた社学同を八〇年代において再建し、日本学生運動の革命的伝統を復権すること、これこそわれわれの任務であり、そのための戦闘宣言として本集会はかちとられなければならない。

〈総　括〉

1　五八年社学同結成の歴史的意義

社学同は、一九五八年五月、反戦学同の発展として結成された。

日共中央による学生運動の改良主義へのネジ曲げに抗し、学生運動を政治闘争、革命運動の担い手へと高め、同時に民族主義路線に純化した日共との分派―別党・共産同結成をも射程に含めた闘いであった。そして事実、六〇年安保闘争において共産同に指導され、社学同に牽引された全学連は、巨万の学生を結集して、六・一五を頂点とする国会突入闘争をやりぬいたのである。この闘いは、日共の「対米従属反対・議会主義平和革命路線」に対して、日帝自立論にもとづき自国帝国主義打倒によってプロレタリア世界革命の一翼を担うという方向の下、「帝国主義の侵略と抑圧の安保改定粉砕！

岸内閣打倒！」のスローガンで反帝実力闘争として闘いぬかれた。

この激闘を闘ったブント・社学同の理論的支柱が学生運動先駆性論である。そこでは、戦後学生運動が「層」として闘われるようになったという認識のもとに、学生運動が革命運動において積極的役割を果すべきであると提起されている。

この六〇年にいたる過程の学生運動は、全学連という組織のワクの中で、自治会＝サービス機関論に代表される日共の「身のまわりの要求路線」と先駆性論による反戦闘争、政治闘争路線の路線闘争であり、執行部をめぐってのヘゲモニー闘争であった。これは六〇年以後は組織的にも分裂し、前者は民青全学連として「諸要求貫徹路線」へと、後者は曲折を経ながらも革命的左翼、新左翼運動として六〇年代後半の反戦闘争、全共闘運動の高揚を切りひらいていくのである。

従ってわれわれは、先駆性論における「学生が闘えば労働者はたちあがる」「学生運動の先駆性によって労働者階級に正しい闘いの方向を示す」といった内容的限界について踏まえておくと同時に、先駆性論が学生運動の階級闘争における役割を評価し、それを政治闘争、革命運動へと高めあげるという目的意識に貫かれていることを確認しなければならない。そして、それが今日のわれわれ革命的左翼の発生史的根拠となっていることを踏まえ、その歴史的意義を確認するのでなければならない。

2　七〇年社学同―共青同統合の総括

われわれはここで、第二次共産同―社学同のもとでの闘いと、七〇年社学同・共青同の統合による新たな共青同の建設、社学同の消滅について総括しなければならない。

その前提として、六六年十月、統一委とマル戦の合体による二次ブントの成立それ自体が孕んでいた限界について簡単に確認しておく必要がある。

それは第一に、政治過程論・三期論に示される「六〇年安保闘争は平和と民主主義だった。これからは反帝だ」といった主張に代表される限界である。六〇年安保を主体的に担いぬいた一次ブントの党としての意義と限界を切開していくという内容の欠落であり、六〇年安保が「結果としてそうなった」ということから、主体のかかわりをナデ切ってゆく結果解釈主義であり、一次ブントの敗北の根拠が主体的に克服されていないということである。

第二に、一次ブント崩壊以降、関西、東京、独立派、マル戦派等等として散在した諸派の運動的利害からの連合、統一という性格である。つまり、①六四年の原潜闘争、六五年日韓闘争の高揚と新たな大衆の政治的高揚が生み出されていたこと。②ブント各派は、各各特定の学園や地域においてしかヘゲモニーを有していず、全国政治闘争の場において、民青・中核派・解放派などに闘争のヘゲモニーを奪われていたこと。③それまで安保全学連の旗を独占していた革共同の分裂により、中核派との全学連再建の動きがつくり出されていたこと。これらの外的状況に規定されて、民青・中核派・解放派に対抗するための全国的政治闘争の枠組が必要とされていたのであり、この共通の大衆運動主義的利害にもとづいて、第二次ブント結成がはかられたのである。従って、二次ブントは形態上、中央委―政治局―学対・労対―社学同全国委として中央指導体制をつくりつつも、結局、各指導メンバーが、各々の自治会、地域、戦線の個別利害を代表するものとしてしかなく、革命党としての全党的な政治組織指導の実現を媒介に、党の戦略的闘いをつくり出していくのではなく、各々の大衆運動の利害の調整をもって協調的な「運動の統一」をはかっていく以外なかったということである。

ここで問題とされなければならないのは、「連合したからあやま

っていた」などというのではなく、「連合党」の限界を自覚し、真に中央集権的前衛党へと二次ブントを高めていくという闘いが文字通り第一級の主体的課題として認識されず、また実現されないまま六七～九年の激闘を闘いぬき、六九年七・六赤軍分派、二次ブント崩壊へと到ってしまったということである。そしてここに「党の革命」第三次ブント建設と、そのもとでの社学同・共青同統合の歴史的要因が存在していたということも同時に確認しておかなければならない。

ともあれ、こういった限界を有しながらも社学同は、六〇年代後期階級闘争の要請に最もよく応えること、最も戦闘的に闘うことを党派性としながら六七年十・八羽田闘争を突破口とした激闘を担いぬいたのである。

六七年十・八羽田闘争は、ベトナム侵略反革命戦争の激化の中で、日米共同反革命強化のための佐藤首相訪ベトを阻止すべく全力で闘いぬかれた。この闘いにおいてはじめて角材をもって武装し機動隊を撃破して壮絶な死闘がくり広げられた。そしてこの闘いは十・八ショックとして多くの青年学生の魂をとらえた。社学同は「国際主義と組織された暴力」としてこの闘いを総括し、以後の闘いの方向を規定したのである。

六八年、佐世保・王子・三里塚闘争を経て六八年十・二一防衛庁突入が闘いぬかれた。「丸太かかえて社学同」のエピソードを残すこの闘いは、日帝の軍事外交との対決という戦略的方向の下、二次ブント―社学同最大の政治闘争として、二〇〇〇の結集で打ちぬかれた。しかし同時に、二次ブント―社学同の運動組織的構造の根底的弱さをさらけ出すものでもあった。つまり、二〇〇〇の動員のうち中大が一〇〇〇、明大が四〇〇で全体の大半を占めていた。この中大・明大の動員は学内主流派のヘゲモニーの下に、自治会・文連・サークル・学館などの学内諸機関を通じての大衆結集であり、当日は「社学同」のヘルメットで参加したが、内実はベトナム反戦への即自的決起でしかなく、社学同として政治組織的同質性を獲得したものではなかった。

当時の結集は社学同としての結集ではなく自治会やその他の学内諸機関としての結集であり、党の戦略的部隊としての社学同は極めて小さなものでしかなかったのである。そして社学同は運動指導部としてのみ主要に機能するという限界を有していたのである。

しかし、二次ブントは自らの政治組織的限界を主体的に切開することができず、六九年四・二八霞ヵ関・首都制圧の闘いが機動隊の壁に阻まれて敗北した後、六九年佐藤訪米による七〇年安保決戦が目前に迫る中で、一方における赤軍派の「これでも負けた。次は何か」式の「前段階武装蜂起」「三〇〇〇人の抜刀隊による国会占拠」に象徴される闘争戦術の左翼的展開の中に現状突破を指向する部分を生み出した。また他方で、叛旗派の「市民社会深部からの叛乱」という自治会主義的大衆運動の肥大化を指向する部分も生まれ、六九年七・六赤軍分派を契機とする組織分裂を生み出したのである。

しかし、言うまでもなく、二次ブント―社学同の孕んでいた限界の克服は、先に述べた政治的組織的限界の主体的切開を通じてなされる以外なく、まさにそうしたものとして、中央集権党建設・全国単一党建設をかかげた「党の革命」第三次ブント建設が開始されるのである。

理論戦線9号、「社学同の組織総括と飛躍の課題」では「社学同三月大会及び合宿は①世界革命戦争とソビエト・コミューン運動を軸にして規約前文を改正した。そして確かに世界ブロ独の提起によって共産同―社学同の党的飛躍の方向は明らかにされた。だが問題なのは、この飛躍を組織的にかちとることであったのであり、共産同―社学同の従来の党組織の党＝形態を維持したままでは、この課

題に答えることはできなかった」「しかし問題なのは革命の軍隊の質であり、その軍隊を指導しうる党の質、党と軍に導かれる統一戦線の質であること」

「恒常的武装闘争から内戦―世界革命戦争を組織しうるところの計画としての党建設は全国政治新聞と職業革命家と固く結合して党直轄の軍団を組織することを中軸とした、中央集権党の建設でなければならない。」というように綱領的内容の深化と、中央集権党の確立、そのもとでの軍団建設として提起され、そのためには社学同という形態では駄目だということが展開されている。

さらに、同号久保井論文では「『世界革命戦略』に支えられた『革命党』に直結した『政治軍事組織』の建設はとりもなおさず六七年十・八以来『国際主義と組織された暴力』に立脚して全ての闘いの先頭にたってきた『社学同―赤ヘル部隊』の再編を不可避としたのである。まさにそれは『社学同―赤ヘル部隊』の自己自身の内部に形成された矛盾をときほぐし解放すること。①社学同の擬似前衛的性格と②『大衆政治組織』としての性格の矛盾を『社学同』そのものを『新共青』へと飛躍させ、より一層強固で厳密な中央集権的な規約・規律によって組織し直すこと。そしてこの『新共青』こそ共産主義の突撃隊―プロレタリアートの共産主義による組織化・階級形成をおし進めると同時に、世界革命戦争＝内戦・恒武闘争を担う基本的単位であり、直轄の『正規軍』である」というように、社学同を新共青＝正規軍として再編しなければならないと提起されている。

われわれはここで、中央集権的全国単一党建設と恒武闘争の遂行といった「党の革命」の核心的内容について、二次ブントの分散性や自治会運動主義を止揚する正しい方向として確認しなければならない。そして、このことを通じてのみ七〇年代から今日に到る戦旗・共産同の闘いが可能であったことを確認しておく必要がある。

ともあれ、この方向に沿って七〇年夏、共青同―社学同の統合がなされ、「正規軍」としての反帝戦線結成大会が行われる。こうして社学同は組織として消滅するのである。

しかし同時に総括しておかねばならないのは、「正規軍」という規定を与えることによって、また形態を改編することによってそれが内容的にもそうなると考える理論主義の陥穽である。それは同時に「正規軍」と規定することによって現実の階級闘争の中で必要とされる様々な個別的課題や大衆運動を「正規軍」的でないからだめだとばかり切り捨ててしまう最大限綱領主義的誤りにもおちこんでいったのである。つまり、二次ブントの分散性の直接的裏返しとして、物質的根拠を有しないまま、観念的な「あるべき党の姿」へと純化していこうとする傾向であり、二次ブントの限界の真の止揚とは言えないものであった。

『共産主義』15号「恒武闘争(論)の総括と新しい方向」において提起されているごとく、「リアルな政治暴露を重視しつつも、オルグそのものは政治暴露をはかっていくのではなく、恒武闘争の三つの命題(帝国主義軍隊解体、正規軍創出、ソビエト型組織建設)をもってのオルグとして、結局叛軍行動委がソビエト型組織であることを説明することによって闘争への参加を要請する→結局大衆運動の展開そのものにおいてかかる意味付与を認めるものしか闘争に結集させえないという、極めて狭量な政治の枠の中に我々はおち込んでいたのである。」「正規軍としてのＡＩＦ(注・反帝戦線)建設を恒武闘争論における正規軍建設の具体化として提起した結果、地区党活動の主要な内容がそれに、つまり空語的な建軍活動に不断におとし込められていくことになってしまった……」「だから総括は、ＡＩＦという名の正規軍への一本づりとしてしか地区党活動が機能しえなかったということと同時に、しかもそれらが何ら現実的＝実践的根拠をもたない、ただの位置付けとしての正規軍建設にしかなり

えなかった、という点に求められていかねばならない。だから結局のところ、ただの位置付けとしての正規軍でしかないのなら、またその具体的方策も現在的には我々は持ち合わせていないのだから、むしろただの大衆的政治闘争機関へと改編していった方がよいし、またそうすべきだと思うのである」といった総括をわれわれは内容的に踏まえ継承していくのでなければならない。

従って、われわれは、現在からとらえ返すならば、「帝国主義の侵略反革命を蜂起・内戦へ！」という戦略的総路線の下、三つの原則（①血債の思想・猛省精神で闘う、②革命党・革命勢力による闘い、③武闘路線・全人民的政治闘争路線をもって、組合主義・自治会主義を排して闘う）と、四つの規範（①鮮明な政治目的の下に闘う、②全人民の政治的動員をかちとる、③大衆＜党と革命勢力＞が政治経験を通じ学び、その中で革命的積極性を発揮しえる方向で闘う、④組織として闘い、個人主義を排し、全体としての勝利をめざす）といった方向のもとで、様々な創意と工夫をこらした闘いを追求し、そして同時に、われわれ一人ひとりが蜂起の担い手としての内実、政治思想内容（武徳の思想）を獲得すべく刻苦奮闘するということ以外に勝利の道はありえないし、また三・二六管制塔占拠闘争の勝利もそうした方向においてかちとられたということを確認しておくのでなければならない。

3　反帝戦線、筑波共闘、学共闘の闘いから社学同基建へ

われわれは、米帝のニクソン・グァムドクトリンによる「戦争のアジア人化」にもとづく七二年沖縄返還に対し、沖縄の日米共同反革命前線基地化阻止、沖縄の反革命統合粉砕、自衛隊沖縄派兵阻止をかかげ、反帝戦線として総力で五・一三神田遊撃戦を組織し、一三〇余名の逮捕、八三名の重罪起訴をもかえりみず闘いぬいた。

そして七三年六月、「総評青婦協路線」純ブロ主義をかかげてのアダチ分派の発生によって、われわれの学生はひとケタに減少したわけだが、七三年十・二一筑波体制粉砕共闘会議結成を出発点としつつ全人民的政治闘争と武装闘争の旗を守りぬく学生戦線の再建をめざしていったのである。

七四年七・七猛省集会における血債の思想の戦取、戦旗派再生の新たな戦闘宣言を突破口とする七四年狭山九月決戦、七五年ベトナム民族解放革命戦争勝利に追いつめられた日米帝の安保―日「韓」体制の戦争体制への再編に対し、天皇訪米阻止全国火炎ビン決起を頂点とする激闘の三ヵ月、七六年十一・一〇天皇在位五〇年式典粉砕全国火炎ビン決起を闘いぬき、七七年鉄塔決戦を闘い抜いたのである。そしてこうした全人民的政治闘争、武装闘争の貫徹をふまえて、七七年八・六学生共闘会議結成をかちとったのである。これは、アダチ分派発生によって余儀なくされた学生戦線の後退の中で、七三年当時、筑波法案―筑波大開校を通じた教育の帝国主義的再編に対する闘いを闘い抜き、さらに七四～七年全人民的政治闘争―武装闘争を担いぬくことを通じ、学生の政治闘争機関への飛躍を実現してきたという成果にふまえ、さらなる学生政治闘争機関としての前進をめざすものとしてかちとられたのである。

そして、学生共闘会議の下で、七八年三月歴史的な開港阻止決戦の勝利、管制塔占拠闘争を頂点とする、横堀要塞戦から五月再開港阻止決戦までの激闘を闘いぬいたのである。同時にこの開港阻止決戦から現在までの過程で、大衆から孤立した活動家集団のタコツボ化を克服しつつ、各学園への支部建設を大衆運動との結合、基盤の拡大をなしつつ実現してきたのである。

社学同は、まさにこういった歴史の継承と発展をめざして再建されたのであり、そこにはどのような懐古趣味も立ち入る余地はない。われわれ社学同の再建は、第一に二次ブントの党的限界の克服としての第三次ブント―戦旗・共産同建設と結合しつつ、二次ブント―社学同の自治会主義を真に止揚し、日本学生運動の革命性の全面開花をかちとるためである。そして第二に、反帝戦線、筑波共闘、学共闘の下で進められてきた、全人民的政治闘争、武装闘争を継承し、戦争と革命の八〇年代においてさらに発展させ、六〇年、七〇年をこえる戦闘的で荒々しい学生運動の爆発をかちとるためである。

すべての同志諸君！　学友諸君！

六〇年安保闘争と、七〇年安保決戦へ到る六〇年代後期階級闘争の中で、戦闘的学生運動の代名詞とも言われ、栄光をほしいままにしてきた社学同は、しかし重要な局面で二度も組織的敗北をなめさせられた。一度は六〇年安保闘争の敗北の中で、そして二度目は七〇年安保決戦を目前にした二次ブントの党的分裂の中で……。

社学同を六〇年、七〇年のアダ花に終わらせるのか否か、これはすべてわれわれの双肩にかかっている。社学同を八〇年代学生運動の最も戦闘的な担い手とすべく、まなじりを決して闘いぬこうではないか！

〈情　勢〉

1　光州民衆蜂起と安保―日「韓」体制

五月二十一～二十七日、一週間にわたって全世界を震憾させた光州民衆蜂起は、全斗煥の手先戒厳軍の残虐な総攻撃によって、二時間にわたる徹底抗戦にもかかわらず「鎮圧」された。

しかし、この「鎮圧」によって全斗煥達は真の勝利を収めただろうか。断じて否である！

「最後の一人、最後の一刻まであの恨み多い全斗煥と戦おう！」（五・二一宣言）を合言葉に、二〇〇〇人とも言われる犠牲を恐れることなく、勇敢に戦車にたち向かっていった光州民衆の英雄的な決死の闘いは韓国民衆の一人ひとりの胸に焼きつき、必ずや光州蜂起を数倍する人民蜂起の怒濤となって全斗煥達の頭上に津波のように押し寄せるだろう。

「あの流された血は沈黙しないで、民主化を叫び、残党の没落を予言するであろう」（T・K生　光州緊急レポート）

昨年十月、釜山・馬山蜂起の爆発によって常に民衆決起の前に体制的危機にさらされ続けてきた朴反革命カイライ政権は、朴自身の射殺という事態をもって崩壊した。しかし、この朴政権の崩壊自体、側近による射殺という形態にもかかわらず、独裁の打倒と民主化を求める韓国民衆の戦争的決起によってかちとられたことは明らかであり、それ以後、今日に至る韓国情勢は、朴なき朴体制を護持せんとする全斗煥をはじめとする維新残党と韓国民衆の死闘とのせめぎあいとして展開されてきたことを確認しなければならない。

本年二月、ソウル大等において学内民主化として開始された闘いは、一気に全国の大学へと拡大した。四月に入ると東原炭鉱や、東国製鋼において労働者の実力決起が戒厳令を打ち破ってかちとられる。これと結合しつつ、五月には学内民主化から、全斗煥打倒、戒厳令撤廃をかかげた闘争が連日闘われ、五月十四日、ついに全国三四大学、約六万人が一斉に街頭に進出、投石・火炎ビンで機動隊に抵抗し、翌十五日にはソウル五万人をはじめ全国で十万人が街頭デモを貫徹したのだ。これに恐怖した全斗煥による学生代表、金大中氏など民主人士の大量逮捕、そして戒厳令の全土拡大という、いわゆる五・一七クーデターに抗して光州蜂起は爆発したのである。

光州市民七〇万のうち三〇万人が決起したと言われ、幼い子供から老人まで武器をとり、武器を持てない者は、ガソリンやパンや食糧を差し入れ、文字通り全人民が蜂起に参加したのである。この光

州蜂起こそ、八〇年代の革命的左翼と人民の進むべき道をさし示している。敵から武器を奪い、全人民が武装し、闘いの正義性において最後まで屈することなく果敢に闘いぬかれたこの蜂起にこそ、われわれは学び一歩でも近づき、この蜂起に応える闘いを、安保―日「韓」体制打倒としてやりきらねばならない。

日本帝国主義は、全斗煥の悪虐非道な戒厳軍による蜂起鎮圧に対し、まっ先にこれを支持し、全斗煥体制を護持することを宣言した。また、米帝も「共産主義による転覆活動や侵略から国家を守ることは人権尊重や民主主義を確立する大前提」として、全斗煥を正当化している。

このことは、七五年ベトナム・インドシナ解放によるアジアからの帝国主義の敗退の中で、韓国を反共防波堤として護持し、安保―日「韓」体制を戦争遂行体制へと再編していくことが日米帝国主義の最大の課題となっているということである。まさに、アジア最後の反革命生命線として安保―日「韓」体制が存在しているということであり、これを打倒することこそ、帝国主義足下に生きるわれわれ日本人民の最大の課題であるということを確認しておかなければならない。

とりわけ、米帝カーター・ドクトリンとスイング戦略の下で、米帝軍事力が中東へ投入される中で、極東において日帝が米帝の肩代わりをさらに積極的に進めようとし、フォートレス・ゲールやリムパックなどの合同軍事演習を強行していることを見るならば、その位置はますます鮮明なものとなってくるのである。

2　帝国主義による石油略奪、中東・イラン制圧のもくろみ

本年四月二十四日、米帝カーターはイランに対する軍事介入をもくろみ、無残にも失敗した。昨年二月、米帝のカイライたるパーレビを打倒したイラン人民は、米帝スパイ活動の拠点である米大使館占拠を今日まで続け、また大幅石油値上げによる帝国主義の石油略奪への対抗は、帝国主義世界総体を出口のないスタグフレーションの泥沼にたたきこんでいる。

石油がなければ身動きのとれない帝国主義にとって、中東石油の確保こそ絶対的課題になっているのである。

米帝は本年初頭、カーター・ドクトリンを発表し、「ペルシャ湾地域を支配しようとするいかなる外部勢力の試みも、アメリカの死活的利益に対する攻撃とみなし軍事力を含む必要な手段をもってこれを撃退する」と宣言した。そして中東派遣軍十万の創設を急いでいる。このカーター・ドクトリンこそ、イラン・中東人民によって追いまくられた米帝が戦争的巻き返しを宣言したものに他ならない。そして、その下で四・二四イラン軍事侵攻がもくろまれたということである。

しかし、敗退し続けた帝国主義である米帝は、かつてのようにこれを一国で実現することは不可能であり、日帝やEC帝がこれに全面的に協力することが不可欠なのである。そして、日帝は石油の九九%を輸入し、その大半を、中東に依存しているが故に、独自の死活的利害をかけて、中東石油ルートの確保をもくろむリムパック80への参加を強行し、また米帝軍事力の中東への集中という事態に備えて極東における肩代わりのための軍事力増強の道をひた走っているのである。

ベネチア・サミットを通じてさらに強化されようとしている帝国主義の石油略奪、中東・イラン制圧のもくろみを粉砕しなければならない。

3　ソ連軍のアフガン人民抑圧

昨年十二月、アフガニスタン革命へのテコ入れとしてなされた、ソ連の軍事侵攻は、六ヵ月を経た今日、ますます泥沼化し、ソ連軍の反人民性がますます明らかとなっている。すでにカルマル派の八割が逃亡したと言われ、カルマル政権を支えているものはソ連軍以外に何もないといった事態が現出している。まさにアフガニスタン全人民対ソ連軍という対決の構図がつくり出されているのである。ここにソ連の「アフガニスタン革命の防衛」という大義名分は完全に消滅しているのである。われわれは、自国の大国主義的利害の下に第三世界解放闘争をねじ曲げようとするこのような試みを断固として弾劾しなければならないし、革命運動のスターリン主義的歪曲を自らの闘いの中で何としても克服しなければならない。

以上見てきたように、イラン革命や光州蜂起に示されるごとく、人民の勝利と帝国主義の敗退の歴史的すう勢はますます鮮明となってきている。イラン革命は、米帝の同盟国サウジアラビアにも波及し、王制はあと二年しかもたないと米帝をして思わせる事態が進行している。米帝のヒザ元でおきたニカラグア革命はホンジュラス、エルサルバドル、グァテマラと、中米全域へと拡大しつつある。さらにアフリカではローデシアにおいて、ジンバブエ・アフリカ民族同盟が革命政権を打ち立て、白人帝国最後の牙城南ア連邦においても闘いの炎は拡大しているのである。こうした人民の快進撃と、帝国主義の戦争的巻き返しが真正面から衝突し、発火点へと到るのが八〇年代であり、まさに八〇年代が「戦争と革命の時代」であることの根拠である。光州蜂起はまさに「戦争と革命の時代」の幕あけを告げる号砲であり、全世界のいたる所で光州のような闘いが爆発することをわれわれは確信しなければならない。

次にわれわれは、日帝の戦争準備と、それに向けた全社会的再編の攻撃について見ていこう。

4　日帝の戦争準備の進行

戦争前夜的情勢をふまえた日帝の戦争準備が、第一に防衛二法改悪、有事立法、新三矢研究、防衛費増額、徴兵制発言、武器輸出拡大等として進行している。そして、これをおし進めてきた自民党の分裂的事態にあって、社公民は安保・自衛隊を容認し、かかる日帝の戦争策動に協力し、完全に翼賛政党に転落してしまっていることを弾劾しておかなければならない。

第二に経済的には八〇年代国際資本競争にかちぬくために、産業構造の転換が進められ、労働集約型産業の切り捨てと、コンピューター、原子力、航空機などの軍事産業と関連を有した知識集約型産業の戦略産業としての育成がめざされ、大量の失業者群が生み出されている。そして、その転換のための資金が大衆収奪によって調達されており、大幅増税、公共料金値上げ、さらには一般消費税の導入がもくろまれているのである。

第三に、天皇の政治過程への登場が、天皇在位五〇年式典、浩宮「加冠の儀」などにより行われ、さらに成田治安立法、弁護人ぬき法案、大地震対策特例法などの攻撃を通じて、官僚的警察的軍隊的専制支配への転成が強引におし進められている。

第四に、三里塚闘争に対する同盟分断攻撃、狭山再審棄却と部落差別の激化など、闘争破壊と人民分断、差別・抑圧が強化されている。

そして第五に、教育の帝国主義的再編が、①四・二〇文部省通達物質化による学生運動圧殺、②徹底した差別選別教育と侵略反革命の尖兵づくり、③大幅学費値上げによる大衆収奪と被差別大衆の教

育過程からの排除として進行していることを見なければならない。

まさに戦争準備の攻撃が社会のあらゆる領域へと浸透していることを確認しなければならない。しかし、こうした攻撃が強化される中で、帝国主義が最も強権的な支配をもくろんだ佐世保重工や筑波大学において闘いが爆発し燃え広がっていることを見なければならない。帝国主義の戦争準備による強権的支配と生活破壊は、一方で、ギリギリのところでの人民の反撃を生み出し、そしてこうした闘いはますます拡大していく以外ないということを確認しておく必要がある。

同時に、この階級攻防の煮つまりは、あらゆる部分の本質を洗い出さずにはおかない。まず、社公民が帝国主義の危機を自らの危機としてとらえ、危機突破のために帝国主義に全面的な協力を開始している。八〇年代の熾烈な攻防はますます革命的左翼と右翼日和見主義の分岐を鮮明なものにしていくのである。われわれは、真の革命的左翼として、被抑圧民族・人民の利害を徹底して守りぬき、八〇年代蜂起・内戦を切りひらく勢力として自己飛躍をかちとっていかなければならない。

〈任務・方針〉

すべての学友諸君！ 同志諸君！

われわれは、七〇年代学生運動の運動的停滞を打ち破り、再び、三たび、荒々しい戦闘的な学生運動の再生をかちとらねばならない。八〇年代の情勢が、六〇年、七〇年をこえる学生運動の爆発の条件と可能性を示し、そして同時にそれを要求している以上、われわれは全力を傾けてこれをやりきらなければならない。

われわれの闘いの方向は、言うまでもなく全人民的政治闘争である。被抑圧民族・人民の利害を守りきる政治闘争の構築においてのみ、八〇年代階級闘争の蜂起・内戦的発展がかちとられるのだということを確認しなければならない。そして、この闘いを学園を基礎に、社学同の支部建設とそのもとでの政治闘争の構築として実現していかねばならない。

さらに、教育の帝国主義的再編による矛盾が噴出し闘いの胎動を孕んでいる個別学園における学内課題をも、同じような質において実現するのでなければならない。全人民的政治闘争を学内に持ちこみ、学内から街頭への闘いを組織するのみならず、学内闘争そのものの立脚点を飛躍させることが問われているのだ。

すなわち、どんな学内課題にしても、それが自分の即自的利害や生活、権利を守る、改良することにとどまるならば、いかに戦闘的に闘われようと、また爆発的高揚を実現しようと、それは八〇年代学生運動を前進させる質を持ちえない。否、そればかりか、日帝の戦争策動にまきこまれていく以外ないということを確認する必要がある。「自分達の生活を守るために戦争に反対だ」と言いながら、その生活がアジア人民からの収奪のうえになりたっていることを直視できないが故に、光州蜂起のようなアジア人民の決起に対して、「日本の権益を守れ！ 生命と財産を守れ！」という大合唱にからめとられ、戦争へ動員されていかざるをえない反戦平和主義のように、また、自分達がこの帝国主義社会のどこに位置するか把えることができないが故に、自分達の利害のためには社外工や臨時工を切り捨てざるをえない純プロ主義のように、自分達の即自的利害の防衛のみを目的とするならば、それは実践的にはきわめて反動的なものに転落してしまうのである。

七〇年代階級闘争―学生運動の地平が、朝鮮、狭山、三里塚闘争の中でつかみとった被抑圧民族人民との血債にかけた連帯であることを踏まえるならば、八〇年代において、ありとあらゆる闘いの中で、全人民的政治闘争のみならず個別学内闘争においても「われわれは何のために闘い、何に拠って立つのか」を徹底的につき出していかねばならない。戦争と革命の八〇年代、革命と反革命の分岐が一層進められる八〇年代であるからこそ、その内容、質が根底的に問われるのだ。

まさに、かかる内容をもった学生運動の爆発をかちとることこそ、全共闘運動をこえる八〇年代学生運動の勝利の方向である。広範な学生決起を実現し、それを戦略的方向のもと、革命のもとに獲得するという、両者を同時に実現する唯一の道であることを確認しようではないか。

以上を踏まえた上で、具体的に任務を確認するならば、まず第一に、光州民衆蜂起に応え、安保―日「韓」体制を打倒することである。光州民衆蜂起は、全斗煥独裁に対する闘いとしてのみならず、それを背後で支える日帝との闘いとしてあり、同時に日帝足下に生きるわれわれ日本人民に対する、決起を呼びかける血叫びなのだ。この血叫びに応えることこそ、日本学生の歴史的責務であり、これを避けて通ることは絶対に許されない。日帝による三六年間の朝鮮植民地支配、一九二九年の光州反日学生決起が示すように苛酷な植民地支配の下で日本人学生による朝鮮人学生への侮蔑・襲撃に対する反撃という現実を何ら受けとめないまま、学徒出陣に動員され、アジア侵略戦争の尖兵となって二千万アジア人民の虐殺に手を染めた日本学生の歴史的血債にかけても、今こそ朝鮮侵略反革命阻止、安保―日「韓」体制打倒闘争の爆発をかちとらねばならない。

第二に、政府・空港公団による二期工事着工のもくろみと対決し、反対同盟とともに二期―廃港決戦に勝利することである。侵略反革命拠点三里塚軍事空港を粉砕するとともに、反対同盟農民が十四年の闘いを通じてつくり出してきた日本革命の実践的根拠地を守りぬくことが問われている。七八年強行開港に対して管制塔に攻め登り、三・三〇開港を撃破したわが社学同の山下同志をはじめとする管制塔占拠の闘いによって、三里塚闘争は、日本階級攻防の中心環へとますますおしあげられてきている。まさに、二期着工を許すのか、人民の実力で廃港をかちとるのか、この二つに一つの道しか残されていないのだ。われわれは、再び三たび、否何度でも、三・二六戦闘精神によって自らを奮いたたせ、廃港決戦を闘いぬこうではないか。

第三に、二・七狭山再審棄却を徹底弾劾し、異議申し立て審勝利、狭山完全勝利まで闘いぬかなければならない。二・七再審棄却は、日帝―四ッ谷による石川氏獄死と狭山闘争の圧殺、部落差別の激化をねらった許すことのできない攻撃である。獄中十七年の不屈の石川一雄氏の戦闘精神をわがものとし、敗北にくじけることなく、狭山再審の突破口をこじあけるべく奮闘しようではないか。

第四に、既に述べたように、教育学園闘争の爆発を全人民的利害のもとに創り出すことが確認されなければならない。

そして最後に、それら一切の闘いを進めるためにも社学同を不抜の組織として断固として建設しなければならない。そして学生共闘会議を学内大衆闘争機関として広範な先進的学友の結集をかちとらねばならない。

すべての学友諸君！ 同志諸君！

社学同は再建された。しかし、それは未だわれわれの決意としてしか存在していない。八〇年代学生運動の高揚を切りひらき、その中で真のブント主義を開花させるという決意としてである。従って、われわれは、社学同の再建は、これまでの闘いと組織のさらなる飛躍をかちとっていくことの中にしかありえないと考える。社学同を腐らせるのも、輝かせるのもわれわれ次第であり、その意味で社学

同再建はようやく本日をもってその第一歩を踏み出したにすぎないことを肝に銘じなければならない。

しかし、同志諸君！　学友諸君！　われわれが誰よりも熱烈な魂と自己犠牲的精神を発揮することができるならば、必ずや社学同を戦闘的な学生運動の牽引車として再建することは可能である。

そのことを確信し、真紅の社学同旗をかかげて、六・二二反戦反安保闘争を第一弾とする日本階級闘争の戦場に、いざ出撃しようではないか。

東京外語大サークル棟闘争の中間総括

社学同東外大支部

昨年六月六日をもって開始された外大のサークル棟闘争は、本年に入りかってない運動の全学的高揚をかちとってきた。これに対し外大当局は、七月一八日全学ロックアウトを強行し、一九日機動隊導入による大弾圧をもって闘争圧殺をはかってきた。

われわれは、韓国学生の決死の闘いに日本学生運動の爆発をもって、何としても応えぬくべく、この長期のしかも激烈なたたかいを外大のたたかうすべての学友と共にその最先頭でたたかいぬいてきた。確かにまだ、われわれの力は微力でしかなく、圧倒的な物量にものを言わせた機動隊の暴力を前にして、現象的に「敗退」を余儀なくされた。しかしながらこれは、たたかいの単なる一段階にしかすぎない。たたかいの発展は当然にも敵の兇暴な弾圧をひき出すのである。そのことによってたたかいが終結してしまうのか、それとも弾圧をバネにして更に発展するのか、それはひとえにたたかう主体が、敵の弾圧を主体的に乗り越えられるかどうかにかかっている。

そのためにもわれわれは、何としても韓国学生の英雄的なたたかいにトコトン学びぬく必要があるだろう。あの残虐な光州蜂起制圧以降も、暗黒の全斗煥体制下で、光州蜂起を上回るたたかいの実現に向け、不屈の地下活動を続けている韓国学生と固く連帯し、権力ー当局一体となった弾圧に、屈することのない強固な陣型を構築する中から、外大闘争の更なる大衆的な、そして実力的な発展をかちとろうではないか。

以下、この間のわれわれのたたかいの総括である。

1　東外大における帝国主義的教育再編

現在日本帝国主義は、才三世界人民の武装解放闘争の嵐のような進撃と、それに起因する石油・資源危機といった情況に立たされ、安保・日「韓」体制の戦争体制への再編を急ピッチで推し進めてい

る。そしてまた、かかるもくろみの下に国内体制整備が行なわれ、文教政策においても産・軍・学協同路線を深めるなかから帝国主義的再編が急速に進行している。

東外大における大学再編は、こうした帝国主義の動向に大きく規定されつつ、基本的に二つの軸をもって推し進められている。一つには、ⓐ教育内容そのものの改編であり、日帝の国際資本競争と、才三世界に対する資本進出など侵略反革命を、具体的に担っていく人材＝語学・国際事情エキスパートの効率的・計画的育成に向けた策動としてである。もう一つの軸は、ⓑこれを補完するための学内管理支配体制の強化であり、学生運動への弾圧強化・圧殺策動である。そしてⓐが、具体的には日帝－文部省の意をうけた、七五年坂本（学長）私案にもとづく国際関係学部新設構想としてあり、更にこの間の七七年朝鮮語科、七九年ベルシャ語科新設としてあったのである。またⓑは、(ア)学舎整備計画と呼ばれ、全学を学術・体育・厚生の三ゾーンにそれぞれ分断し効率的な全学管理支配体制を敷くことがめざされつつ、これと並行して(イ)学生の民主的権利、既得権の大幅な削減がなされ、昨年来よりタテカン規制、ビラ・ポスター規制、選挙期間中の選挙活動の禁止、外語祭での教室使用制限などの攻撃が打ち出され、とりわけ外大における歴史的な運動拠点の解体をめざすものとして七五－七九年寮破壊が行なわれ、今回の木造棟破壊が行なわれたのである。

したがって木造棟破壊－設立届＝認可制導入を通じた新サークル棟封じ込め攻撃の本質が、直接的には学舎整備計画の一環としてあり、更に木造棟跡地に研究棟を建設するという意味において、将来的な国際関係学部設置に向けた重要な布石として存在するという、東外大再編の両軸をかねそなえたものとして確認する必要がある。

2 闘争経過

一九七九年

六・六 〈団交〉 学長、木造サークル棟破壊・全サークルの旧図書館書庫移転計画発表。なお、移転を機に、「学生団体（サークル）設立届」「課外活動共用施設（部室）使用願」提出を制度化することを明らかにする。

七・四 〈サ連・計画白紙撤回要求書提出〉 サ連は、当局の計画を(一)サークル活動圧殺、(二)学内管理強化、ととらえる。

七・一四 〈学長回答書〉 白紙撤回要求には応ぜず、外大発展のためにサークルの不便はしかたがないと回答。

九・一九 〈学長名公示〉 選挙に関する特定政党・団体に対する支持・反対の一切の掲示物禁止。

一〇・二 〈学長指示〉 外語祭において、改修教室の固定机をはずすことを禁止。模擬店としての使用禁止。

一〇・二四 〈学生課長指示〉 改修教室における、授業と関係のない掲示物の禁止。

一一・一五 〈新サ棟青写真発表〉

一二・一四 〈団交〉 学長、七四年学生部長当時のサ連との確約書（①木造棟を将来的に取り壊す必要が生じた場合、学生の納得を得るまでは、これを行なわない。②文化サークル連絡会議を、木造棟問題に関する交渉団体と認め、個別的な分断の働きかけ＝取り引きはしない。③サークル施設の最低限同面積を保障するという立場は変わらない。）について②以外の再確約拒否。「学生がサークル活動を円滑に行なうための条件を引きあげる努力をする。」という確認をとる。学長、「今後、学生とは一切の確約は行なわない。」と発言。

一九八〇年

一・二二 〈新サークル棟移転問題対策会議発足〉 学内の全サークルの参加。

一・二三 〈当局、新サ棟についての説明会〉 「課外活動共用施設使用規定」（共用部室制・サークル認可導入、鍵の当局管理）を明らかにする。当局は、二月中に設立届提出、三月中に移転、三・三一封鎖を意図して、この説明会をもつが、学生側はこれを粉砕。

一・二九 〈団交〉 学長、設立届を提出しなければ、新サ棟の移転交渉には一切応じないと、強行な態度をとる。

一月末～二月中旬 〈対策会議・署名運動展開〉 設立届白紙撤回および新サークル棟条件改善要求、三・三一木造棟封鎖反体。七〇〇名署名

二・一四 〈三・三一木造棟封鎖阻止・サークル認可制導入粉砕決起集会〉 一七〇名結集。学内デモ。

〈団交〉 学長、「学外者を入れた集会は許可しない。今後、このような集会があれば警察を入れる」と発言。設立届白紙撤回には応じないが、部員名簿等について今年は記入しなくてよい、とやや譲歩。

二・二〇 〈三・八設立届提出期限公示〉

二・二二 〈抗議行動〉 二・二〇公示、二・一四学長発言に対する抗議。

三・四 〈入試情宣〉 制服、私服、計一〇余名の警官導入。

三・五 〈早朝、サークル部室襲撃、破壊事件発覚〉 犯人不明。泊りこみ、二四時間木造棟防衛開始。

三・八 〈三・八設立届期限突破春休み団結集会〉 学内デモ。全サークルで、三・八設立届提出期限を粉砕。当局、期限を十五日に延期。

三・一五 〈三・三一木造棟使用禁止告示〉

三・三一 〈三・三一木造棟封鎖阻止、サークル認可制導入粉砕、警察権力導入糾断決起集会〉 学内デモ、学生課抗議行動。

〈学長酔っぱらいなぐりこみ事件〉 泥酔した学長、夜八時ごろ木造棟に闖入、学生に対し「おまえ、なぐってやる。」「警察に逮捕されないように気をつけろ。」と暴言を吐き、脅迫。

四・一 〈木造棟、電気、水道、早朝抜きうち切断〉

四・一五 〈サークル自主運営、サークル棟自主管理貫徹四・一五集会〉 百十数名結集。学内デモ。

四・五月 この間、連日クラス入り、ビラ情宣、アピール。外大の筑波化に反対するクラス決議、サークル決議運動展開。

五・二 〈対当局青空団交〉 三五〇名余が参加。当局強行な姿勢くずさず。

五・三 〈サークル部室襲撃、破壊事件〉 犯人不明。この日より武装し防衛強化。

五・四 〈木造棟襲撃、旗持ち逃げ未遂事件〉 前夜にひき続き鉄パイプ、角材で武装した数名が木造棟に侵入したが撃退。

五・七 〈五・一六設立届提出期限および、提出サークルによる部屋割り会議公示〉

五・九 〈全学スライド上映討論会〉

五・一六　〈設立届提出期限、部屋割り会議粉砕、五・七公示撤回、抗議行動〉　学長、抗議中逃亡をはかるが、サークル員これを阻止し、学長を問いつめ、部屋割り会議延期をかちとる。

〈掲示板以外の一切の場所に掲示物をだすことを禁止する公示〉　当局、教室ろうかの掲示物を一方的に撤去する。

六・一〇　〈団交〉　学長、設立届を提出しなければ新サ棟条件改善、とりわけ研修室の部室化について確認できないと、押し通す。話し合いつかぬまま、職員約二〇名を動員し、「どうせ、七月中には木造棟を壊すのだから。」と言いのこし、暴力的に退席。

六・一七　〈退去命令告示阻止交渉〉　学生部長「話し合いでの解決は九九・九％ムリ」と発言。

六・一八　〈木造棟からの私物搬出、六・三〇退去命令告示〉　告示阻止、掲示板前座りこみ闘争を闘っていた学生を職員三〇余名を動員し、暴力で排除。

六・一九～　〈外大の筑波化阻止、六・一八告示、当局の暴力へ抗議のハンスト闘争〉

六・二八　〈ステッカーはがし事件〉　学長、バトカー、制服

六・二〇　警官を校門前に待機させたうえで、職員三〇余名を動員し、対策会議のステッカーをはがす。これに対し二〇〇名の学生が学長をとりかこみ、四時間にわたり抗議、謝罪を要求するが、学長は「監禁中は何も話さない。」をくりかえすのみ。

六・二六　〈六・二〇事件謝罪要求行動〉　学長、学生との面会を拒否。強制面会であると通告し、「七・二〇までに木造棟をこわす。」と発言。

六・三〇　〈木造棟退去命令粉砕〉

七・一　〈抗議集会〉　学長、集会後の抗議団面会拒否。

七・X　〈新サ棟実力解放、占拠〉

七・七　〈木造棟備品検査〉　この後、当局は民青のたれこみにより、新サ棟占拠を知る。

七・八　〈学長、新サ棟退去命令告示〉

〈学生部長、新サ棟退去命令警告〉

〈七・一六木造棟封鎖告示〉

七・九　〈当局、「学生諸君へ」ビラ配布〉

七・一五　〈東外大の筑波化を許すな、木造棟破壊阻止、新サ棟自主管理貫徹、総決起集会〉　筑波大、日大をはじめとする、首都圏一六大学約一〇〇名結集。集会後学内ジグザグデモ。

七・一六　〈木造棟備品撤収、私物ひきあげ〉

〈夜間、構内立ち入り禁止〉

七・一七　〈全学ロックアウト〉

七・一八　〈木造棟破壊阻止、新サ棟自主管理貫徹、ロックアウト粉砕、刑弾、処分を許さないキャンパス集会〉　ロックアウトの中約二〇名でうちぬかれる。門前で日大、筑波大、大正大の学友一〇数名呼応、機動隊私服、門前の一〇数名を暴力で排除。

七・一九　〈ロックアウト粉砕、木造棟破壊阻止、新サ棟自主管理貫徹、校門前緊急集会〉　早朝より筑波をはじめとする、首都圏の学生一〇〇余名が、校門前に結集。ロックアウト中のキャンパスに残り闘う四名の学友と合流し、四時間にわたり内、外呼応した集会を貫徹、八時四〇分、機動隊導入、中の四名を含む全員を排除。木造棟破壊さる。

七・二〇　〈新サ棟バリケード破壊、検証〉

七・二一　〈ロックアウト解除〉　新サ棟、学生ホール、講堂封鎖。

七・二二　〈機動隊導入理由告示、夜間立ち入り禁止告示〉

3　総括

最初に総括にあたって、結果から逆照射して解釈をこねくり回すような結果解釈主義的態度を断乎としてしりぞけなければならない。何故なら、かかる総括ほど非主体的なものはないからである。したがってわれわれはまずもって、われわれ社学同がいかなる獲得目標をもってこの闘争にかかわり、担ってきたのかが明らかとされねばならない。それは才一に、外大の帝国主義的再編としてある木造棟破壊・サークル認可制導入を何としても阻止するということ、才二に、かかるたたかいの陣型をサークルを基軸として全学的な反筑波化、反四・二〇の陣形として形成していくこと、才三に、かかる陣形内部に、安保－日韓闘争を軸とする全人民的政治闘争潮流の形成をかちとり、これを通し、サークル闘争を担うサークルの反戦闘争陣形への飛躍をかけ闘うこと、才四に、全国学生共同闘争推進の一翼となるべく闘うこと、才五に、日本学生運動、外大闘争への敵対者＝日共スターリニストに対する大衆闘争を通じた断固とした党派闘争を貫徹すること。

基本的には以上の獲得目標をもって闘いを担ったのである。以下われわれは各々の点について総括を行なっていく。

まず才一点目に関して

われわれは、東外大の帝国主義的再編を阻止する闘いを、この間一貫して闘い抜いてきた。七六－七七年朝鮮語科新設阻止闘争、七八年日「韓」学生交流反対闘争、七九－八〇年今回の木造棟－新サ棟闘争等を一貫して全学的な大衆闘争として担い抜いてきたのである。こうした闘いの中にあって、われわれは東外大の大学再編の中で、国際関係学部新設、木造棟破壊策動があることを暴露しつつ、これとの対決を一貫して訴え続けてきた。今回の攻撃にあっては、直接にこの問題が、サークルにふりかかってくるということとなった。

われわれは、この攻撃を大衆闘争を通じ、粉砕するため、サ連－対策会議の中で、そこに結集するサークル・学友と共に闘いを展開してきた。

最初の闘いは、七九年七月四日のサ連による当局への木造棟取り壊し計画白紙撤回要求書提出であった。これに対し、当局は、一向に聞き入れることなく、むしろ外大の「発展」のためだということで居直ってきたのであり、そのことにより外大の「発展」と、学生の自主活動は鋭く対立するものであることが明らかとなったのである。すなわちこの闘いは、その発端より外大再編との非和解的な対立の方向を必然化させていくのである。

まずわれわれは、当面の目標を当局による個別サークル切りくずしを粉砕することにおいた。七九年秋－冬の期間、連日のサークル間の討論、サ連の総会を通じつつサークル同士の団結と統一をつくり出す中から、容易に切りくずせるだろうと考え、学生をあなどっていた当局の意図を粉砕したといえる。

これに対し当局は、八〇年初頭大学が始まると同時に、学生に対し、直ちにサークル設立届を出すように通告してきたわけだが、われわれは、これを打ち破るため、そしてそのために一切の個別交渉を行なわせないため、サ連以外の全サークルを含んだ新サークル棟移転問題対策会議を発足させ、より一層の統一した団結で当局に向かっていった。二・一四、一八〇名によるキャンパス集会の成功、三月中の設立届提出強要攻撃に対する全サークルによる拒否、木

造棟居残りは、当局を徹底的に追いつめた。全サークルの団結した力によって当局の個別切りくずし攻撃をはねかえし、年度内木造棟破壊を完全に阻止した。

かかるたたかいの渦中、当局の走狗となった何物かによって夜間サークル室が襲撃ー破壊されていった事件が起こった。これに対しわれわれは、戦闘的な学友と共に、自衛武装し、木造棟防衛泊まり込み闘争に突入する。一方追いつめられ当局は、四月一日一方的に木造棟使用禁止を通告し、木造棟の電気・水道カットを強行してきた。しかしながらわが学友たちは、これに一切屈しなかった。われわれは対策会議の戦闘的学友と共に、ろうそくの火の下で連日泊まり込みを断固として継続、新学期開始以降、連日の全学情宣闘争に突入。これより七月まで木造棟泊まり込み闘争が闘いぬかれることとなる。

これ以降、当局はますます滝の川署との連絡を密にし、私服警官導入の日常化などの権力ー当局一体となった闘争圧殺攻撃をかけてくるが、これに対しても闘う学生たちはひるむことなく、対権力ー対当局の緊張関係の中で、四・一五キャンパス集会を反撃の突破口として、連日情宣をとおした全学八〇〇の署名、クラス決議、五・二青空団交三五〇名などを背景とした闘争の全学化をかちとり、追いつめられた当局に対する追撃のたたかいを継続した。このたたかいは、当局による木造棟備品立ち入り検査を実力で阻止するたたかいや学長実力カンヅメなどを通じつつ、四ー五月の木造棟破壊策動を完全に阻止しぬいた。文部省に対する概算要求のリミットを七月にひかえた大学当局をギリギリの所まで追いつめたのである。

ついに学生部長は、六月一七日「話し合いによる解決は九九・九パーセント無理」と宣言し、権力による暴力的圧殺の意図をあらわにした。われわれのたたかいは、ついに大学当局の本性を白日の下に引きずり出したのである。われわれはこれへの回答を抗議の一〇日間ハンスト闘争としてたたかいぬいた。このたたかいにより、六月木造棟立ちのき命令を実質的に粉砕し、六月中の木造棟破壊も阻止しぬいた。

こうした中で当局は、夏休み流し込み、夏休み木造棟破壊を画策してきた。われわれは大衆的な力によって、当局の木造棟破壊攻撃を概算要求のリミット七月まで阻止しぬき引きのばしたのである。

当局の夏休み流し込み策動を突破し、われわれは対策会議の戦闘的学友と共に、ついに七月×日新サークル棟実力解放ー占拠闘争を敢行した。この闘いは、四ヵ月の木造棟闘争の非妥協・実力の地平に立った攻撃的実力闘争としてたたかいぬかれた。当局による完全に管理されきった文字通りサークル収容所として作られようとしている新サ棟を占拠ー自主管理し、当局の管理強化の拠点を実力で解体するものとして意義をもつ画期的なたたかいとして実現されたのである。ただここにおける問題点として、研究棟建設に対峙する木造棟破壊阻止の陣形を一歩退かせてしまったことがあげられるわけだが、主体的力量との関係において、新サ棟実力占拠と同時に担うことは現実性がなかった。

このたたかいに対し、当局は告訴・処分攻撃をかけ、一八日より全学ロックアウトをしき、一九日機動隊を導入した。こうした中でわれわれは、新サ棟実力占拠の切り拓いた地平を何としても防衛し、ロックアウトを粉砕すべく、大学内に居残り、外にいる学友と呼応して最後まで徹底して実力でたたかいぬいたのである。

ともあれ、われわれがめざしてきた、外大の帝国主義的再編としての木造棟破壊、認可制導入を阻止するといった獲得目標との関係で総括するなら次のようなものとなる。

① 確かに木造棟破壊そのものは、最終的には阻止できなかったわけだが、当初七九年度中といわれた破壊も、当局にすればニッチもサッチもいかない概算要求のリミットである七月中旬にまで引きのばし、日帝・文部省ー外大当局による国際関係学部新設の布石となる研究棟建設策動といった帝国主義的文教政策に一大痛打を浴びせたこと。

② 使用禁止通告中の木造棟への三ヶ月以上の泊まり込み、そして何よりもサークル収容所として作られようとしていた管理強化の拠点としての新サ棟を実力で解放し、一〇日間にわたって学生によって自主管理された場所として占拠しつづけるといったたたかいによって、管理強化を実質的に打ち破っていったこと。

③ 七・一八ー二〇ロックアウトに対し、学内に残り続け、一九日、機動隊に強制排除されるまで、内外結合し実質的にロックアウトを粉砕し続けたこと。

④ 総じてわれわれのたたかいが、当局をして、全共闘以来一〇年ぶりに機動隊を導入せざるを得ないところまで追いつめたことである。

そして才二に、我々はそうしたたたかいを、あくまで大衆に依拠し、この攻撃にさらされている当事者であるサークルを基盤とした大衆運動の原則的な展開をもってたたかいとり、東外大における反筑波化、四・二〇の大衆的な陣形を創出すべく尽力してきた。これに関しては、八百名の全学署名といった大衆世論形成、全学集会への百名以上の結集、団交、三百名以上の結集といった形でのクラスの学友をもまき込んだ大衆動員として大きな支持の輪を作り出した。また、対策会議の中でも、この闘いを通して多くのサークル員の主体的な運動への参加が、かちとられてきた。これらは総じて東外大における反筑波化の陣形の前進であり、権力・当局により眠り込まされてきた学生の政治的自覚の向上である。この大衆に立脚した力によってはじめてサークル棟闘争の爆発があったのである。また、こうした中で、スターリニスト日共ー民青を除く、外大のすべてのたたかう学生の団結と統一がお互い立場の違いを越えた筑波化・反四・二〇といった一致点において作り出された。これも、またサークル棟闘争の全学化を作り出した根拠である。われわれは、ここで培われたたたかう者の団結を大切にし、さらに強化、発展させねばならない。

才三に、われわれは、サークル棟闘争を外大における個別学園闘争＝経済闘争そのものの原則的な推進として、大衆闘争機関の論理にそって最先頭で担ってきたわけだが、これと同時に、 a. 社学同によって直接推進される全人民的政治闘争＝革命的学生運動としての安保・日韓闘争潮流の建設を目標とし、さらに、これによって裏うちされた、 b. 個別学園闘争そのものの政治的発展＝反戦闘争陣形としての形成を実現せんとしてきた。

aに関しては、われわれは社学同の前身である筑波共闘支部の七四年結成以降、一貫して唯一の全人民的政治闘争潮流として安保・三里塚・狭山等の街頭政治行動を闘い抜き、これへの多くの学友の決起をかちとってきた。かかる成果に立って、本サークル棟闘争下にあっても、日帝の侵略反革命と対決する全人民的政治課題への決起を全学に訴え、暴露を行ない、安保・三里塚・狭山闘争へ闘う学友と共に決起しぬいてきた。しかしながら、一方で、恒常的な潮流建設に関しては不十分であったと総括しなくてはならない。すなわち一つひとつの政治闘争の宣伝・煽動をなし、決起を実現しつつも、それが潮流として定着しえていないという現実である。それは、恒常的な潮流建設に向けた系統的な組織戦術、とりわけイデオロギー闘争の不十分性として対象化されなくてはならない。そして、そうなった根拠として、主要には個別学園闘争の自然発生性への傾斜があげられるであろう。したがって、われわれがこの不十分性を乗りこえ発展していくためには、一方で個別学園闘争の発展に向けた献身と同時に、他方での全人民的政治闘争潮流建設を、具体的な独自闘争として前者との立体的＝有機的な構造の下に推進する系統的・

かつ緻密な運動ー組織展開をなしきることが最大の課題である。

b. さらにaを踏まえた上で、われわれがサ連→対策会議といった大衆闘争機関そのものの政治的発展にいかに寄与できたかを総括する。

まずこの闘争の端緒は、サークル移転に際して物理的条件が悪化するといったことに対するサークル員たちの即自的反発であった。これに対し、われわれは、教育の帝国主義的再編＝筑波化・四・二〇の実質化といった政治的暴露を行ない、「反対する会」運動を通じつつ先進的学友と共にかかる視点の共有化を計りつつサークル棟闘争を政治的に担える主体の構築をなしてきた。この成果を礎にして本年よりの大々的なサークル棟闘争の全学化をかちとってきたのである。そして二・九筑波現地学生共同闘争への参加をかちとることを一つの大きな契機としつつ、サ連ー対策会議総体において「外大の筑波化阻止、四・二〇実質化粉砕」といったスローガンを獲得し、大きな政治的飛躍をなしたのである。さらに三月以降、電気・水道カット下でのロウソクの火をともしての連日泊り込み、連日署名、情宣闘争において、闘う学友たちは、非妥協、不屈のたたかいの質を実践的に獲得していったのであり、七月新サ棟実力解放ー占拠闘争においては、断乎とした攻勢的な実力闘争の質を獲得していった。又、七・一八ー一九ロックアウト粉砕闘争において、木造棟、新サ棟闘争の切りひらいた地平を何としても防衛すべく、処分ー刑事弾圧のドウカツにも一切屈することのない決意を当局に対し身をもって示しぬき、権力ー機動隊導入に対し内外結合し、最後までひるむことなく実力で闘いぬいたのである。

このようにして、サークル棟闘争そのものの質も、中教審ー筑波化・四・二〇の実質化攻撃と非妥協的に実力で対決するといった内容的発展をかちとってきたのであり、客観的に日本帝国主義の戦争態勢に向けた国内ー教育再編と鋭く対決しうる構造をかちとってきたといえるわけであるが、まだ直接反戦のスローガンを獲得しえていないし、自己目的化された自主管理運動＝アナルコ・サンディカリズム的傾向から脱しているとはいえない。

したがってわれわれは、さらなる政治内容的発展を実現していく必要がある。

才四に、われわれは、社学同再建にあたってすべての社学同の同志とともに、日本学生運動の沈滞に歴史的ピリオドを打ち、新たな高揚を切りひらくことを誓い合った。われわれ東外大支部はかかる決意のもと、外大闘争を日本学生運動の全国的再建と爆発にむけ、その突破口とすべく闘いぬいてきた。そのためにわれわれは、今筑波闘争を軸として始動をした全国学生共同闘争の推進に貢献すべく闘ってきたのである。具体的には、昨年の「反対する会」主催の『圧殺の森』上映集会への筑波大、日大、東大等の参加。二・九筑波現地闘争への結集、四・二〇闘争への決起、七・五日大闘争への参加、七・一五外大キャンパス集会への一七大学の結集、七・一八ー一九闘争への一八大学の決起といった段階的発展をかちとりつつ全国共同闘争推進の一翼を担ってきた。とりわけ七・一八ー一九においては、予定された集会ではなく、緊急に入った実力闘争に直ちに首都圏の多くの学園から学生が外大にかけつけてくるといった、共同闘争における一歩前進をかちとったものとしてあったといえる。とりわけ、前夜に連絡を受けたにもかかわらず、すぐさま一九日の闘争に多数かけつけた筑波大の学友の献身性に学ばなくてはならない。

われわれは、この闘いの成果を打ち固め、さらなる全国学生共同闘争の推進に向け奮闘する必要がある。また、そのためにも、外大闘争の高揚に尽力し、全国へと燃え広がる発火点にするんだ、その礎となるんだという決意をもって今後の闘いに臨む必要がある。

才五に、日本においていたるところで、闘う人民に対する敵対者へと転落しているスターリン主義の権化＝日共・民青は、外大においても、その例にもれず、余すところのない反動性を発揮している。昨年、彼らはサークル棟闘争に一切とり組まぬまま、当局とのボス交機関でしかない自治会をデッチ上げに向け代議員会を成立させたわけだが、われわれが中心となって介入し形成した反対派代議員によるボイコット戦術によって、自治会成立決議は流産に終わった。自治会成立以後、当局とのボス交をもってサークル棟闘争をつぶすはずであったプログラムを見事に粉砕された彼らは、それ以降サ連と連動した自治会内反対派運動に引きずられ、口先きだけでは、木造棟破壊反対、設立届反対を細々と叫んで闘いに「加わって」いかざるを得なかった。しかしながら、当局との対立が尖鋭化し、闘争が「筑波化阻止、四・二〇実質化粉砕」のスローガンを獲得するや全面的な逃亡と裏切りを行ない、さらには明確な敵対を開始したのである。このとき、学生の闘いは、はっきりと日共・民青の路線を乗り越える内容と運動展開をかちとっていったのであり、これに対し、日共・民青は自らを左翼的に乗り越えるものに対しては、自己保身的な反動的敵対を行なうスターリニスト的本質を全学的に自己暴露したのであり、学生自身の闘いによって、その「唯一の前衛」の仮面がひっぱがされたのである。こうした激烈な闘争の過程で、一時は自治会成立一歩手前までこぎつけた彼らは、いまでは組織的にガタガタの状態に追い込まれている。追いつめられた彼らは、新サ棟占拠直前に、このことの暴露ビラをまき、占拠後、これを発見した民青が当局に通報し、排除を要請するといった行為をもって、自らの党派的利害のためには、当局とも手を組むといった敵に組した姿を明らかにしたのである。しかし、このことをもって彼らは、ますます真剣に物事を考える学生から支持を失ない、闘う学生からは憎悪をのみを生み出さしめたのであり、自らの組織内は、ますます自己矛盾を拡大したのである。われわれは、かかる腐敗しきったエセ「左翼」、当局の手先＝日共・民青を断じて許してはならないし、さらなる激烈な大衆闘争を通じた党派闘争の貫徹をもって最期的解体をなし、いまだ彼らの誤ったイデオロギーにだまされている多くの真面目な学生の自覚を引き出し、闘う戦列の側に吸収しなくてはならない。とりわけ、当局のサークル個別切り崩しと、七・一九機動隊の導入を頂点とする打ち続く弾圧の中で、サークル間の分断が、不本意ながら生み出されつつある今日、これにつけ込み、介入を目論む日共・民青の動きには細心の注意をはらいつつ、これを粉砕しなくてはならない。

4 展望

以上の総括にふまえ、社学同東外大支部の今後の大まかな展望を提起したい。

まず第一に、木造棟ー新サ棟闘争の大衆的かつ激烈な実力闘争としての展開によって、切り拓かれた日帝ー文部省ー外大当局による外大再編のプログラムの混乱、遅れに対し、さらなる追撃を加え、国際学部新設や学舎整備計画に基づく、三ゾーン区分けをめざす坂本私案を完膚なきまでに粉砕し、破綻に追い込むことである。

第二に、そのための全学的な闘争陣形を、木造棟ー新サ棟闘争によって創り出された学生内部の流動化、括性化をさらに拡大することをもって、創出することである。それは、これまでの闘争主体であったサークル＝対策会議の打ち固めと、それを基礎としつつクラスをも含めた全学的な大衆闘争基盤の建設である。

第三に、この間の闘いによって明らかにされてきたように、日帝は、その文教政策においても徹底して反動的な帝国主義的再編を行なってきている。われわれは、この間の不十分性にふまえ、日帝の侵略反革命と全的に対決する全人民的政治闘争潮流＝安保・日韓闘争潮流を早急に建設しなくてはならない。現在、金大中氏が全斗

の手によって死刑攻撃にさらされている中で、われわれはこれを絶対に許さないためにも、断乎として日韓連帯の全学的展開をかちとる必要がある。これを通じて、全人民的政治闘争＝安保・日韓闘争潮流の建設をかちとり、秋期日韓・三里塚決戦へと合流してゆかなければならない。

第四に、この間かちとられてきた全国学生共同闘争の地平をうけつぎ、さらなる共同闘争の推進に貢献する必要がある。

以上

日大闘争の革命的爆発に向けて

社学同日大支部

六八・九年、日大闘争の巨大なうねりは、広範な学生大衆の叛乱として日本学生運動に重大な軌跡を残した。そして、そこに現われた戦闘性は学生運動の未来を厳として提示しぬいたのであった。しかし二次ブント―社学同は、この日大闘争の一翼を担いながら、当時孕んでいた組織的不十分性ゆえ、これを牽引しきることなく、闘争の終局のおとずれと共に消滅してしまった。われわれには二度目の失敗は断じてゆるされない。

一九八〇年、帝国主義の「現実的な戦争」をもっての具体的な侵略反革命体制の構築は、今まさに音をたてて進行している。がしかし、学生の反撃も、確実に、着々と開始されているのだ。かかる情勢下において、本論文をすべての戦闘的学友に提出するにあたって以下の内容を確認しておきたい。

ひとつには、帝国主義の教育再編と個別資本としての日大の関係を明らかにし、さらに、六八、九年の日大闘争の成果と現界を見てゆくなかから、八〇年代における日大闘争の基本的方向を規定してゆくことである。

第二には、現在かちとられつつある全国学生共同闘争と、個別日大闘争の関係の把握である。

さらに第三には、日大闘争の発展をいかなる質によって実現させてゆくのかといった問題提起である。いくら運動的に闘いが拡大しようと、それを内側からささえる政治思想的内実が欠落しているならば、闘いの前進はあり得ないことは自明の理である。

日大は各学部ごとに分断され、独自の学生支配が貫徹されている。全共闘運動以降の日大闘争は、その障壁を越えた統一的な闘いとはいたっておらず、「全学的」な日大といった大きな枠で語られる本稿では、日大闘争の進むべき方向としてまとめることにした。具体的な各学部での学生支配・弾圧の現状、それを突破する闘いの方向

についてはまたの機会にふれることにしたい。
ともあれ、本論において、八〇年代日大闘争の進路を模索するすべての学友に対し、基本的な認識と方向を提起することをもって、再建した社学同日大支部の今後の闘いの決意とかえてゆきたい。

1　帝国主義の教育再編と日大

われわれはまず、日本帝国主義の教育再編が、戦後帝国主義が復興を遂げてゆくなかで、それに対応する労働力商品づくりという目的で、急速に進行していった過程を見ておかねばならない。五〇年代初頭から六〇年安保にかけて、とりわけ中教審が設置されるなかで、政府―文部省が一体となって学生の管理を強化しながら「産学協同」路線の骨格を創りあげてゆくのである。そして、このなかで日大はどの様な位置にあったのか見ておく必要がある。

①　戦後帝国主義の教育再編の歴史

米軍政下の日本では、米軍の「民主化」政策の一環として、いわゆる国体教育は否定され、基本的人権の尊重―教育基本法が戦後教育の出発点となったのである。一九四六年教育刷新委員会（四九年教育刷新審議会として受けつがれる）において課題となったのは、教育の基礎づくりであり、民主的教育の完全な実施であり、国民文化の向上をめざすことであった。しかし、結局「自己の理念の挫折」と結論を残し解散し、文部省内に恒久的な諮問機関としての中央教育審議会を設置することになる。

ここにおいて見なければならないことは、教育刷新審議会が、広く学者・文化人によって構成されていたのに対し、中教審は、文部大臣が任意に委員を決定し構成することになっており、また、会議は非公開であるということである。当然何ら「客観性」すら持ち得ぬしろものであるし、教育の政府やブルジョアジーへの隷属を意味するものでしかないのである。結局中教審とは、朝鮮戦争以降の日本帝国主義の復活にとって必要不可欠な教育政策の、その再編という課題を自己の主要な任務とするものとして登場してきたのであった。

朝鮮戦争にひき続く60年安保に至る過程では、国内市場の拡大と各独占体への個別資本の系列化が着々と進んでいった。日帝は、国際競争力の回復とさらなる発展に向け、経済成長をなすための経済計画の一環としての計画教育を目的としたのである。日経連等の財界からの要求や中教審においても、戦後「一般教育」的色彩の強い労働力では有効な労働力たりえないとされ、技術革新と経済の画期的成長に対応する技術技能者を、小学校から大学を通して計画的に養成しなければならないとされた。つまり、一方における学校体系の改編であり、他方における後の（六七年）「期待される人間像」に見られる様な内容でのイデオロギー的再編である。

学校体系の改編とは、単線型を理想とする新学制から、複線型による職業専門大学・高校の新設、拡大、強化をすることである。単線型では、戦略的ハイタレントと中級技術労働者の両者はまかなえないのである。さらに、これに旧来の年功序列にかわって、「能力主義」を持ち込み、また、一部の戦略的ハイタレントの養成とこれに学校制度をあわせることによって、他方で中級技術労働者を大量に生み出してゆくのである。こうした差別選別教育によって激化する矛盾を排外主義的イデオロギー的価値観統一の教育内容強化によって集約せんとしているのである。

ここにおいて、戦後帝国主義の教育政策の骨格はほぼ整備されたと言える。こうした東大を頂点とした、大学のピラミッド化は、これ以後着々と固定化されてゆくのである。こうしたなかで六八、九年の日大全共闘の闘いは、きわめて重要な意義を持ってくるのである。

②　個別資本としての日大

以上、大づかみではあるが帝国主義の教育再編の過程を見てきたこともふまえて、日大という私学教育資本の社会的位置を確定してゆきたい。

マンモス大学であるがゆえ、各学部ごとに地理的にも切り離されているがゆえ、又、右翼の拠点であるがゆえ、学生間の団結を創ることも難しく、「起ち上がれない日大生」として一般的に理解されてきた。そして、六〇年代後半に至るまで、日大生は、資本と暴力の隷属下にあっても、それに甘んずる以外なかったのである。

この様な事態をささえてきた物理的基盤は、何よりも古田体制の五八年度合理化改善方案にみられる。

①創意工夫して、最小限の経費をもって、最大限の効果を挙げることに努力する。
②教育の拡充強化を図ることに最善を尽す。

総編
・世界総合大学の発展を期す。
・国策に対応すべき体制の整備を図る。

以上合理化案を見るならば、明確に、六〇年代さらなる高度経済成長に向けた産学協同路線の、排外主義イデオロギーと、労働力商品の生産工場と、自らが積極的になってゆくことの宣言であることがわかる。

また、これを実体的に保障していた支配構造は次のとおりである。

①中央集権的、権力の集中
古田個人への権力の集中、すなわち、日大の古田への私有財産化
②各学部独立採算制による利潤の拡大合理化
③①②を実体的に保障するものとしての右翼体育会、関東軍
④制度としての、検問、検閲

結局、五八年古田案から見てとれるのは、五六年度「経済白書」の「もはや戦後ではない」という有名な言葉にも示される様な五〇年代後半からはじまる高度経済成長期において、それにみあった大学再編―「産学協同」の一大突破口としてあったということである。そしてそれが、私大においてこの極悪人「古田」によって、他に先んじてなされたことをふまえなければならない。

産業構造の高度化と、それに対応する教育政策、差別選別教育の意図的な持ち込みが、政府―文部省によって全学的になされてゆくとき、その意図は直接的に、とりわけ私大において即刻反映されるわけではない。つまり、私大・個別資本としての性格を見ておかなければならないのである。個別資本の利潤追求がその宿命としてある私大は、自らの内なる論理として、自大学の再編合理化を開始する。それが五八年古田案とその後の日大のもう一方の姿である。

日大は言うまでもなく巨大な資本にふくれあがっている。一〇万学生を抱えながら自己増殖してゆくとき、同時に内に大きな矛盾を生み出すことになる。（授業のマスプロ化、設備の不備等）そこで自らの手で、矛盾をたたきつぶす私兵（関東軍、右翼体育会）や、機構が必要になる。それが日大の今なお続く重弾圧の根拠であり、他に先がけて大学再編、合理化がなされていった根拠である。つまり、私大においては、たとえば「学問の自由」「真理探究の場」「学

生の自治」なる幻想が根づよく残り、学生弾圧、管理支配が一定の「民主的ルール」に基いてなされる場合もある。しかし、日大においては「帝国主義の侵略反革命体制づくり」と「個別日大資本のなりふりかまわぬ膨張」の両者がからみ合いながら、他に先がけて重弾圧体制が敷かれていったのである。

日大は、政財界に大量の「要人」を送り出してきた。とりわけ日大資本と関係のある「有名人」は、日本会のメンバーを見れば、日大資本が戦後日本帝国主義に果たしてきた役割りは一目瞭然である。日本が帝国主義として復興し、六五年、日韓条約締結を大きな契機として、韓国、アジアへの帝国主義的進出が具体的に開始されてゆく。この過程で日大資本は、政治的にも経済的にも、社会的にも許すまじ役割を担ってきたのである。

歳月は流れ、一九八〇年。日大は今もドス黒く暗躍している。韓国民衆は虐げられている。この日大資本の下で生きるわれわれ日大生は、たとえいかなる重弾圧体制が敷かれようとも、韓国の学生の血叫びが聞こえたなら、一切を投げうって闘わなければならない任務がある。日帝中枢と密な関係を持つ日大で、学生決起の火の手が再び、三たび湧き起こることは、日本学生運動総体にとっても重要であることは言うまでもない。

2 日大闘争の歴史的意義

六八年四月一四日、国税局が日大に約二〇億円の使途不明金があると発表。のちに三〇億円近い脱税が指摘された。経済学部会計課長が失跡、理工学部女性会計課員が原因不明の自殺。

〝眠れる獅子〟だった日大生に、永遠に眠り続けるのか、起ち上るのかの選択の時がきた。過去当局によって、右翼学生によって、一切のあたりまえの自由が圧殺されてきた日大生にとって、積年の怨念をはらす時は今しかない。

六八～九年の日大全共闘の闘いは、重弾圧下における学生が決起したがゆえに戦闘的に、ラジカルに、荒っぽい闘いとなったわけだが、また同時に、ピラミッドの底辺の叛乱としての位置を見なくてはならない。

以下、六八－九年日大闘争の地平と限界を対象化してゆきたい。

① 日大闘争の経過

先にも述べたように、一〇万学生と、遠く各学部間が分断され、交流もなかった情況であっても、学科別に比較的少数の学生の単位がある文理学部や、学生数が少なかった経済学部で、まず烽火があがった。

そして、唯一右翼系自治会でなかった経済学部学生会が、五月二一日この偉大な闘いの突破口を切り拓いた。そして五月二三日、あの〝栄光の二〇〇メートルデモ〟が初のデモとしてかちとられた。日大闘争の記念碑が打ち立てられたのである。

さらに五月二七日ついに学部間の隔りを乗り越え、日大全学共闘会議が結成された。全共闘は、五大スローガン（①全理事の即時退陣、②経理の全面公開、③検閲制度の徹廃、④不当処分の撤回、⑤体育会、応援団の解散）を古田会頭以下全理事にたたきつけ、大衆団交を要求しつつ暑い夏に向かう。

この過程で、度重なる体育系右翼学生や、機動隊の襲撃に対し、経済、法と次々とバリケード・ストライキに突入していったのである。

同年九月三〇日、夏休み明けの徹底した法経奪還実力闘争に勝利し、三万人を越える結集で大衆団交がかち取られた。この時、古田会頭は全共闘を唯一の学生の代表機関と認め、五大スローガンを無条件でのみ、日大両国講堂に、学生の歓喜の紙吹雪が舞った。

だがしかし、一〇月一日、政府閣僚懇談会で佐藤首相が、「政府としては、法秩序を破壊する者に対しては、き然たる態度で望むべきで、日大大衆団交方式は絶対に避けるべきだ、この様な形で大学の紛争問題が解決されるのは、常軌を逸脱したやりかたである……」と発言し、一〇月三日、二度目の大衆団交が一方的に拒否された。この事実によって、佐藤日帝政治委員会と古田権力のゆ着が大衆的に明らかにされ、学友は「佐藤打倒」を叫びデモ行進をするに至った。

ここにおいて、古田の階級的本質と、日大の重弾圧が、個別的なものでなく、政府－文部省の大学再編の一部としてあることが大衆的に暴露されたのである。その後古田は、なりふりかまわぬ学生弾圧（バリケード破壊、指導者への令状逮捕等々）を、権力と一体になってなしてくるが、一方学生の側も、東大闘争との結合や、全人民的政治闘争との結合が開始される。

一〇・二一国際反戦闘争において、自国帝国主義打倒、安保粉砕をかかげ、防衛庁、新宿、国会と、実力闘争が展開される。この影響を受けながら、一〇月二二日東大－日大両全共闘による決起集会が、東大安田講堂前で開かれる。そして、東大－日大闘争の結合は、六九年一月　一八－一九、東大闘争と神田カルチェラタン闘争の爆発となって表現されることになる。だがしかし、権力の「騒乱罪適用の恫喝の前に、それ以降の展開は大きく規定されざるを得なかった。すなわち一月一八－九の東大、神田の闘いは、その後の政府－ブルジョアジーの圧倒的弾圧によって後退を余儀なくされたのだった。

日大闘争は、学生戦線総体に対する弾圧の中にあって、東大と共に全国学園闘争の天王山的位置であったため、当然主要な攻撃目標とされ、古田をはじめ、日大当局は、この尻馬に乗りながら巻き返しをはかってゆく。

一月二四日郡山工学部、四〇〇名の職員、右翼に武装攻撃されて陥落。二月二日法、経、二月九日理工、芸と機動隊が導入されバリ撤去。六〇〇名の機動隊の警戒の中で入試が強行された。以降、政府－大学当局のなりふりかまわぬ弾圧の中で、「大学の正常化」が強行される。

六九年五月二一日、日大闘争一周年集会。同年九月医学部単独ストに突入……その後も抵抗の大衆的闘いは続いたが……

② 日大全共闘の闘いがつき出した地平と限界

六八－九年の日大闘争の大まかな経過は以上見てきた通りである。次にわれわれは、この凄じい闘いが、数万人を動員して闘いぬかれたトコトン戦闘的な闘いが、学生運動の流れの中に何を刻み込んだのか、そしてわれわれは何を総括し、何を継承すればよいのかを明らかにしなければならない。

まず背景として確認しなければならないことは、第一に米帝のベトナム侵略反革命戦争の激化と、これへの日帝の加担に対する闘いが、一〇・八羽田闘争を契機に全国的に、労働者、学生、市民の広汎な層に広がっていったことである。

革命的左翼は、「プロレタリア国際主義」と「革命的祖国敗北主義」の質を獲得し、安保闘争を実力闘争として展開した。これが、多くの労、学に政治的活性化を醸し出していったのである。

そして第二に、大学間の分化が一層進行したということである。先に見てきた様に、戦後日帝が、帝国主義として復興してゆくなかで、国際競争力を養うため、政策として単線型から複線型への改編を行ない、排外主義イデオロギー、ナショナリズムの下への意識の統合をなしてきた。それが六〇年代において、高度経済成長のもとで、さらなる資本の国際競争力の強化がめざされ、新たな生産体制にともなう労働力の育成がめざされた。具体的には、国民生活の

向上と、複線型への教育制度の改編のなかで、大学の相対的位置の低下が促進され、東大を頂点としたピラミッドがより強固に、そして誰の目にも明らかに確立していった。それはまた、学生の「エリート予備軍」と「単なる労働力予備軍」との分化の促進を意味していたのである。つまり、戦略的ハイタレント・中級技術労働者・産業予備軍の差別選別教育固定化が勢いを増して進められていったのである。

日大は、ことわるまでもなくピラミッドの底辺部分に位置していた。当時の学園闘争の一方の極である東大においては、自ら、自分達の大学を「帝国主義大学」と位置付け、自己の帝国主義的、排外主義的教育の場たる東大へのかかわりを問題にし、「自己否定」の思想として表出されていった。それに対し、日大闘争では、中級技術労働力商品、産業予備軍として自らが外圧的に位置付けられてゆくなかで、また、六〇年代を通して、日大資本がさらに肥大化してゆくなかで、一切の矛盾を強権的に自己の体内に消化せんがため、「あたりまえのこと」が保障されず、それに対する素朴な怒りの爆発としてあったのである。

つまり、大学の帝国主義的再編に対する学生の即自的利害と即自的意識による自然発生的決起の極限的表現であり、個別学園において、数万名の決起を各学部が分断されているにもかかわらず創出した、前代見聞の広汎な学生大衆の叛逆であったのである。このことをまず第一に確認しなければならない。

第二に確認すべきことは、自然発生的ながら全人民的政治闘争との結合の萌芽をはらんでいたことである。

闘争の経緯から見れば、六八年六月一一日、経済学部前での集会と、それに襲いかかる右翼体育会系学生とのゲバルトに、大学本部の要請で機動隊が導入されたときのことである。当初、機動隊が右翼学生を排除してくれるものと考えていた全共闘学生は、拍手で機動隊をむかえた。数分後それは、悲鳴と怒りの響きに変わった。機動隊が右翼学生ではなく、全共闘系の学生にテロ、リンチを加えたのだ。ここにまず、闘う日大生は、権力の本質を身体で感じとったのである。

九・三〇大衆団交に対し、日帝佐藤が介入し、一〇・三の二度目の大衆団交を、実質的にやめさせた事態については、前記の通りである。ここにまた、闘う日大生は、権力―当局のゆ着構造を見てとった。闘えば闘う程、右翼学生や当局のみならず、国家権力―機動隊とも対決せねばならなかったのである。

かかるなかで闘いを放棄しなかった日大全共闘は、一〇・二一―二二、一・一八―九闘争へと、個別学園闘争のワクを食い破り、他大学との共同した闘いや、全人民的政治闘争への参加へと、闘いの質を向上させていった。確かに自然発生的ではあったけれど、これは成果であり、偉大な地平である。

しかし限界として総括せねばならない点もある。ひとつには、今述べた全人民的政治闘争との結合の問題で、しかしまだまだ不十分であったこと。やはり自然発生性は自然発生性であり、いかに戦闘的に、ラジカルに闘われても、永続的な闘いとはなり得ないのである。しかるに、一・一八―九闘争後、明らかに闘争は後退せざるを得なかったのである。

だが一方で、一〇・八以降政治闘争を一貫して牽引してきた革命的左翼、党派が、その組織的、思想的脆弱さをはらんでいたがゆえ、日大闘争の巨大なうねりを収約し、発展させることができなかった点も同時に、不十分性として痛苦に総括せねばならない。

第二には、自己の大学へのかかわりが全く問題にならなかったことである。日大の重弾圧下でそこまで問題にすることは、とてつもなく大変なことではあるが、しかし、中級技術労働力商品が売られ

てゆく先は、韓国民衆やアジアの人民の血と汗を吸い上げる日帝産業資本である。さらに、われわれの存在それ自体が、帝国主義足下に生きているといった現実そのものが、被抑圧民族人民に、あるいは部落大衆にとって、何を意味するのか、といった捉え返しが無かったことである。

これに関しては、七〇年多くの学生が、狭山闘争、三里塚闘争と拘るなかで、「血債の思想」として深化され獲得されていったのである。

確かに、日大全共闘の闘いは、幾多の不十分性をはらんでいた。だがしかし、不十分性があったとしても、この闘いの築き上げた地平と、これにかかわった学生ひとりひとりの戦闘的魂は、十年たった今も、日大に生きている。たとえ当時と人は変われど、様々な人々、様々な闘いによってはぐくまれてきた。われわれは、全身全霊をかけて、この戦闘的魂を継承しなければならない。

われわれは次の言葉をもってこの項を終えてゆきたい。

「日大から去って行くすべての学友へ。屈辱感、挫折感をもって日大から去っていかないで欲しい。もし去っていくなら、日大闘争を自己の良心に、人間性に従い闘ったという誇りと勇気をもって、去って欲しい。」（秋田明大議長）

3　七〇年代政府―文部省の学生弾圧と学生運動

七〇年安保粉砕の闘いや、全共闘運動等による闘いの高揚が引き潮の様に過ぎ去った後、そこに残ったものは、より一層高度化された学生管理支配であり、日大においては「アウシュビッツ体制」の復活であった。

政府―文部省、大学当局は、この学生運動の爆発をある意味ではわれわれ以上に総括し、筑波大学「開校」に見られる様に「紛争に対応する大学」から「紛争をおこさせない大学」への再編強化をなしてきたのである。

一九七一年ニクソンドクトリンで「戦争のアジア人化」が提唱され、極東・アジアにおける日帝の政治的・軍事的役割りが大きくなっていった。労働者国家の群としての存在、それ以上に才三世界被抑圧民族・人民の進撃、これらに対し帝国主義は共同反革命を強化せんとする。これが七〇年代の基本的世界情勢である。日帝は軍事外交路線を、米帝の肩代りとして日米安保体制を基軸に強化し、これを保障する国内再編を全社会的に貫徹し、帝国主義の「腐朽性」の一層の深化、拡大のなかに実現せんとしていったのである。

帝国主義の国内再編と同時一体的に、教育再編―学生弾圧も進行してゆく。

六〇年代後半大学闘争が盛り上がり、また、街頭政治闘争へ学園から、バリケードの中から、多数の学生が出撃していった。文字通り大学は革命的左翼、闘う学生の拠点と化したのである。自らの侵略反革命体制構築に合わせた大学づくりの計画、学生の生産が大打撃を受けた日帝ブルジョア支配者共は、大学―学生対策を急速に押し進めて来ることになる。すなわちこの試みは、六九年三月九日自民党文教制度調査会の「大学回復臨時法案」の要綱試案（稲葉試案）

に、治安弾圧の一環としての大学政策が余すところなく明示されている。また、中教審答申才二二回「当面する大学教育の課題に対応するための方策について」（七〇年四月）の中にも、大学の管理秩序の強化が強く打ち出されているのである

稲葉試案を抜粋し、まとめるならば、

・暴力活動の禁止

・学生の政治的行為の禁止

①政治団体の結成、企画、その勧誘

②刊行物の発刊、編集、配布

③署名、示威運動の企画指導

④文書、図書の掲示・配布

・政治的行動を学生に教唆・扇動した教職員は「教職員政治活動審査委」で免職、減給、戒告等の処分ができる。

・文相の指導監督規定強化

①文相は、教職員政治活動審査委の処分決定に従わない大学当局責任者に対し、免職等の措置を取れる。

②紛争が長期化した場合は、一定期間大学封鎖、または廃校とする。

一言で言えば、学生の政治活動を禁止し、違反した場合は処分。これを煽動した教職員は免職し、出来ない場合は大学責任者を処分。それでもダメなら廃校にするといった、全くもって許しがたい攻撃なのである。

中教審二二回答申について基本的に前者と変りあるものではない。たとえば、「大学問題について関係者に期待するもの」では、「学内における学問の自由を脅かす行為に対して、勇気と信念をもち」（つまり、学生の暴力と闘えということ）、「閉鎖的な自治観念にとらわれることなく」「行政上の責任を果たせ」等々、奥歯に物のはさまった様な言い方で書き連ねているのである。後者は、ただ中教審の立場上、オブラートにくるんで提起されただけで、両者を見て、結局、学生の闘争をいかに政府支配階級と大学当局者が協力して鎮圧すべきか、又、できるのか、といった内容を明らかにしているのである。

以上の内容を既存の大学に要求していくことはもちろん、政府支配階級は、自らの手でそのモデル校たる筑波大学を創り出していった。七三年「筑波立法」、七四年筑波大学強行「開校」、そして現在、全大学の「モデル校」―筑波型の再編が着々と進行している。

政府支配階級からの、こうした、七〇年代における教育再編―学生弾圧の攻撃をうけて、日大当局は、「臨時措置」「学内正常化」と称して、各学部次々とロックアウト、暴力ガードマンの常駐といった、弾圧体制を敷いていったのである。

七三年、経済学部サークルの公認、未公認をめぐる闘争の過程で、当局の西山君退学処分に対する闘いと、それに呼応した文理学部での闘いと、七四年、学部祭の結集をめぐっての闘争に当局は卑劣にもロックアウト攻撃をかけ、そして検問―検閲体制を敷き、暴力ガードマンを導入するといった弾圧体制を敷いていった。

全共闘の圧倒的な闘いに恐怖した日大当局は、さらに一層の重弾圧をもって、学生決起を押しつぶそうとするのである。

七一年全国全共闘の崩壊以降、全国全学生を包み込む様な運動は展開されていない。日大においても、各学部ごとの重弾圧体制を食い破る闘いは突発的にはあれども、全学的に日大の非人間的な学生管理支配を根底から突き崩す闘いとしては展開できてこなかった。

だがしかし、七〇年代を通してかかる情況下においてもなお闘い続ける学生達の多くは、狭山闘争、三里塚闘争などへと決起し、学生の闘いはここにおいて質的前進がかちとられたことを確認せねばならない。これが七〇年代学生運動が獲得した地平である。このことは、八〇年代侵略反革命、挙国一致体制の激化の中での学生運動

の再生にとって、必必須の条件となるのである。

4　八〇年代学生運動の高揚と日大闘争

次に、八〇年代、学生運動をわれわれはいかなる内容で再生させ発展させてゆくのか、その中で日大闘争のもつ基本的役割を明らかにしてゆかねばならない。

①侵略反革命前夜的情勢と全社会的再編

七五年ベトナム・インドシナ人民の帝国主義に対する勝利は、現代世界の趨勢が「人民の勝利と帝国主義の死滅」にあることを決定的に突き出した。世界中で帝国主義のカイライは、次々と第三世界人民の解放への雄叫びと共にたたき出されている。被抑圧民族・人民のエネルギーは、文字通り人間としての尊厳をかけたものであるがゆえ、たとえ親族や同胞を虐殺されたとしても、その屍を乗り越え、とどまることを知らない。

ベトナム敗退後、帝国主義はその生命線を韓国朴政権にもとめた。朴の維新体制をさらに強化し、新植民地支配を一層強力に押し進める一方、光韓合同軍事演習を展開し、それに自衛隊がかんでゆき、まさに安保―日「韓」体制の戦争体制の打ち固めを強引になしきった。にもかかわらず、昨年の馬山、釜山蜂起は、朴体制の内部崩壊を生み出さしめ、全斗　の非常戒厳令下においても、光州民衆蜂起が闘いとられたのである。たとえ、軍事的に光州蜂起を鎮圧しても、これで韓国民衆の闘いの炎が消せるわけではない。炎は拡大し、必ずや韓国全土を覆い、日・米帝のカイライ共を、日帝ブルジョアジーを焼き尽す日が来るのだ。

帝国主義はまた、イラン革命にサウジアラビアが続く悪夢に脅えている。石油戦略の発動以降、中東人民の石油を武器とした闘いが続く。それは、帝国主義総体をスタグフレーションの泥沼にたたき込んだ。昨年初頭のイラン革命と中東諸国人民へのその影響は、まさに、石油にドップリとつかった帝国主義を未曽有の危機のどん底に追い込んだのである。さらなる中東情勢の革命的展開は、帝国主義者にとっては悪夢かもしれないが、これも近い将来正夢となるのである。歴史を逆戻りすることはもはや出来ない。帝国主義は以上の事実に心底恐怖し、青ざめ、痩せさらばえた身をガタガタ震わせている。この様な醜き帝国主義者の脳裏には、もはや、第三世界への侵略反革命体制の「現実的」な戦争をもっての貫徹しかない。しかもそれは、光州民衆蜂起以降、一刻の猶与もならぬものとして急展開に入ったのである。

以上の世界情勢と戦争前夜的情勢の煮つまりは、国内において防衛二法改悪、有事立法、新三矢研究、防衛費増額、徴兵制発言等として進行し、戦争に向けた国民統合の攻撃として、成田治安立法や弁護人抜裁判法案を通した天皇制イデオロギーの下への集約がめざされている。そして、経済的にも産業構造の転換がなされ、コンピューター、原子力、航空機等の戦略産業の育成がめざされているのだ。この転換の中で大量の失業者を生み出しても、官僚的・警察的・軍隊的専制支配を貫徹し、帝国主義はなりふりかまわず延命すべく、着々と国内再編を進めているのである。

②学生運動の現状と進むべき方向

かかる情勢下、七〇年代の教育再編については若干ふれたが、もう一度簡単に筑波大開校を見てゆこう。

筑波立法当時から帝国主義経済に忍び寄るスタグフレーションの影は、政府―支配階級の危機意識を助長、新たなエネルギー（原子力等）の先端的技術開発に見合った戦略的ハイタレントの養成が急務となったのである。同時にそこでは、「高度経済成長」における

労働力の「量」の確保よりも、のちの産業構造の転換に見合った「質」の確保として問われてくるのである。国大協自主規制路線は死文化し、「教育」への幻想、「象牙の塔」的アカデミズム、「大学の自治」の幻想は一切取り払われ、背後で確実に進行する侵略反革命戦争体制とあわせて見るならば、筑波大「開校」は「産学協同」路線の一大突破口であり、教育再編は新たな段階に突入する。

こうした筑波型管理支配を一挙的に導入する試みは、大学の移転策動や一切の自主活動の圧殺、四・二〇文部次官通達の実質化といった攻撃として表現されている。だがしかし、「紛争をおこさせない」大学であったはずの筑波大で、多くの戦闘的学友は勇躍起ち上がったのである。七九年、自主学園祭運動において学生は決起し、その後、数々の不当処分や刑事弾圧、街頭闘争における見込み逮捕にも屈せず、今なお戦闘的に闘いを押し進めている。また、この闘いに触発され、全国共同闘争の一環として闘いとられた八〇年七・一八―一九の東外大闘争で、四名の学友が、ロックアウトの構内に刑事弾圧を恐れず実力占拠を闘いとった。このことは何を意味しているのだろうか。

制度的に、また暴力で学生支配を強化すれば学生は言いなりになる。これが政府―支配階級の論理である。しかし実際はどうなのか、果してそうなのか、断じて否である。弾圧すればする程、またそれを強権的にやればやる程、闘う学生は一方で消滅するが、他方で、真に闘う学生は鍛えられ、より大きな、より内容のある闘いを展開するのである。まさにこの様なものとして筑波大や東外大、日大文理、法等での実力決起はかちとられたのである。

現在、全国いたるところで学生の決起が開始されている。七〇年代の愚民化政策と、政治的アパシーの中で、学生達は投げかけられた弾圧を本質的なところで捉えているわけではない。だが反面、大学当局の言いなりになり、眠りこまされているわけでもない。学生達は、自らの存在の基盤や、「あたりまえのこと」が保障されなければ素朴に疑問を感じ、ストレートに恐るのである。そして、確実に学生の闘いはひろがり、活性化を生み出している。

こうした個別学園における自然発生的ではあるが闘いの高揚への萌芽が、筑波大反処分二・九闘争、四・二〇文部次官通達実質化策動粉砕を課題とした全国六〇数大学一〇〇〇名の共同闘争として昇華され、四―五月韓国学生の英雄的な決起に鼓舞されながら現在に至っているのである。

現在この全国共同闘争は、内部で様々な路線の分岐や対立をかかえながらも、かなり強固な大学間の団結を創り出している。たとえば東外大七・一五集会において、わずか二日前に緊急に取りくみが決まり、それから他大学、他戦線への連絡が開始され、十六大学の闘う仲間が結集した。さらに十九日の機動隊導入に際しては、前日十八日の夕方から連絡を取り、同日夜には集合場所たる大正大に十八大学約一〇〇名の闘う学友が馳せ参じたのである。

こうした共同闘争と学生の団結は、八〇年代学生運動の爆発の前兆であり、われわれはこの動きをより質的にも量的にも大いなるものへ高めあげるべく奮闘せねばならない。そして、単なる運動的共同闘争の発展のみならず、全人民的政治闘争との密接な連関、結合をはかり、それを個別学園において保障しうる体制の構築を、各学園で闘うすべての革命的左翼と先進的学生は急がねばならない。またどんな学園的課題においても、それが結局自己の「生活を守る」「権利を守る」といったことにとどまるならば、それへの闘いがいくら高揚しようと、日帝の戦争策動にからめとられてしまうことも忘れてはならない。最も大切なことは帝国主義下の自己の切開であり、アジアの人民や、部落大衆の血と汗の上に生活するわれわれ学生の存在の捉え返しが「血債の思想」として深化されねばならないということである。以上の様な政治闘争の質と政治思想内容が、学

園闘争を担い、学園闘争を牽引するすべての学友は我がものとし、個別学園闘争において闘いのなかに浸透させてゆくことが、ひいては共同闘争の発展に連なってゆくのである。

以上の様な個別学園闘争と共同闘争、政治闘争との密接な関連性のなかで、われわれは、日大闘争を位置付けてゆかねばならない。

③ 日大闘争の今後の展開に向けて

日大は見ての通り各学部ごとに分断され、独自の学生弾圧体制が敷かれている。農獣医学部の様に早くから御用学生団体が作られ、右翼誠心会の暴力を背景に組織的な学生管理支配が貫徹されている学部もあれば、法学部の様に直接的暴力、検問―検閲体制によってようやく「学内秩序」を維持してきた学部もある。（現在御用団体づくりが進行しているが）したがって、各学部ごとに学生の意識も違うのである。

御用団体づくりの攻撃について若干見ておくならば、直接的なガードマンのゲバルトによる力の支配は、逆に全学生の闘いの攻防の環が明らかになり、ともすれば当局にとって墓穴を掘るものとなりやすい。そこで今、全学的に進められているのである。しかし、各学部ごとにその進行情況は違い、よってまずその学部の現状にあった闘いの構築がなされなければならないのである。そしてさらに、その学部において自己完結する様な闘いの質ではなく、日大資本そのものを問題とする内容の持ち込みがなされなければならない。とはいっても、いきなり全学的な運動が展開できるわけでもなく、現状を見るならば、ある学部での決起が、他学部の学生を触発するほど主客の情勢は煮つまってはいない。ここで重要なのは、対学部当局闘争を対日大当局闘争へと発展させる闘う主体の側からの規定と、その様な内容の不断の提出である。日大当局は、意図的に学生を各学部ごとに分断しているわけで、われわれ闘う主体がこれに屈服してしまったなら、日大闘争の全学的発展はあり得ないのである。こうした個別日大闘争発展の方途と同時になされなければならないことは、全人民的政治闘争との結合である。個別闘争は、その徹底化によっては政治闘争に発展しない。個別的利害は、階級的利害の中に位置付けられない限り、結局勝利する道はないのである。八〇年代において、帝国主義の侵略反革命と、それに伴う反革命国民統合が激化すればする程、人民・大衆の政治的流動化は必至であり、かかる情勢化において、個別闘争がそれとしていくら闘いとられても、帝国主義打倒―プロ独樹立と連ならない限り、労働者階級人民の解放はあり得ないのである。

以上、個別日大闘争と共同闘争、そしてそれと政治闘争の有機的連関と結合にわれわれは最も留意し、今後の闘争を押し進めてゆかねばならない。また、そうでなければ日大闘争の勝利はあり得ないのである。

だがわれわれは、闘いの方向の確認だけですませるわけにはいかない。

七八年十二月、文理学部の戦闘的学友は、対当局との連続した闘いを、最大時一〇〇〇名を越える大衆決起で、ケガ人を出しながらも勝ちとった。その後、当局の一方的ロックアウト、検問―検閲、暴力ガードマンの増強等の攻撃がかけられたが、学生の圧力で当局と対峙しぬき、先の検問―検閲体制を撤廃させ、現在まで一定の解放状態を闘い取っている。また七九年法学部において、秋の自主学祭運動を闘うなかで、不当にも入校禁止処分者が日を追って増していった。この状況を突破するため、また、検問―検閲体制撤廃、暴力ガードマン追放、自主活動の自由、学祭貫徹を掲げ、十一月十六日、対当局団交要求闘争を、学大実（準）を中心に、五〇〇名の学友と共に闘いぬいた。しかし不当にも権力と一体化した当局は、学友二名を事後逮捕するといった、攻撃をかけてきたのだった。だが

二学友は、権力の暴力的な取り調べや起訴攻撃にも屈せず、三ヵ月の獄中闘争の貫徹し、現在裁判闘争を闘うなか公判廷において、事実を捏造し闘う学友二名への有罪判決を目論む検察側を、逆に追いつめている。こうした戦闘的学友の決起の中に、われわれはあの日大全共闘の戦闘性が、息づいていることを見てとることができる。

資本と暴力の隷属下で、過去の屈辱と憤怒の一切をはらすがごとく闘いに起ち上がった数万の日大生の築き上げた地平の上に、われわれは今立っている。現在も脈々と日大に流れる戦闘性、ラジカリズムをわれわれは、断乎として継承する。

日大の学生が起ち上がるということは、重弾圧体制を前に、学生が腹をくくって決起するということである。起ち上がればどんな目にあうか知っていて起ち上がるのである。ゆえに、日本学生運動の中で日大闘争は、歴史を見ても明らかなように常に突出した位置を持ってきたのである。しかしながら、海を隔てた韓国では、学生達が先に起ち上がった者の意志と魂を受けつぎ、屍を乗り越え闘い続けてきたのである。日帝植民地下からの数十年にわたる虐待と、血塗られた歴史に耐えた韓国の労働者・学生は、計り知れぬほどの革命性と戦闘性を内に宿しているのである。そして、年老いた帝国主義をなおも死の淵に追いやり、現代世界の趨勢と、人民の未来を握りしめ、勝利の日まで終わることのない戦闘に文字通りわれとわが身をかけているのである。彼らの血と汗の上に存在してきたわれわれ日本の学生は、今をのがして彼らの闘いに応える時はない。

全ての日大生諸君！

未だ脆弱でしかないわれわれにとって、日大の重弾圧は大きなものに見えるかもしれない。しかし、第三世界人民の、とりわけ韓国の学生の直面している弾圧に比べれば全くたいしたものではないし、彼らの築き上げてきた闘いに比すればわれわれの闘いなど微々たるものでしかないのである。しかし、現実にわれわれの眼の前に厳しい弾圧として日大の重弾圧体制が存在しているならば、これを根底的に突き崩す闘いをもって、韓国の学友達の闘いに応えていこうではないか。

（結　語）

六月、社学同は再建された。一〇年間の苦節を通し今、この日大にも甦ったのだ。われわれは、日大闘争の有する戦闘性を継承する。われわれは、韓国学生の闘いに一切を投げうって応える。全ての学友諸君、共に闘おう。真紅の社学同旗の下で！

東海大闘争の前進をかちとれ

社学同東海大支部

はじめに

筑波大、日大とならび中教審モデル校である東海大学において闘いの炎が燃えている。

全共闘運動の終焉以降、恐るべきテンポで進行した教育の帝国主義的再編―学生管理支配体制の強化のもとで、苦節を余儀なくされてきた学友たちがそれをくい破り全国的規模で進撃を開始しはじめた。東海大闘争もそのようななかで、昨冬学費闘争の大爆発を実現し、当局をして「学費一部すえおき」という大戦果をかちとってきた。

われわれ社学同東海大支部はその闘いの一翼を担い前進をとげてきている。

ここでわれわれは更なる東海大闘争の推進に向けて①東海大学の実態報告とその反動的性格を暴露し②昨冬学費闘争が切り拓いた地平を守るべく意義を明らかにし③秋期大攻勢戦取―東海大の革命的発展の方向性を提起していきたい。

1　東海大学の社会的位置と性格

東海大学は、大政翼賛会総務局長であった松前重義により、一九四三年航空科学専門学校として設立されて以来、一貫して日帝ブルジョワジーの要請に応えてきた私学である。

「大東亜戦争が起っていよいよ技術者の不足を感じるようになった。…東海学園の経営する航空科学電波科学専門学校は、それぞれ当時の技術者要員不足に対してその使命を果たしつつあった」更に一九六三年、「われわれは池田内閣の所得倍増計画を遂行するに必要なる技術者養成の見地から、私学の定員増加の自由を認むべきであると主張したのである」以上のような松前総長の発言を見れば明

らかであろう。帝国主義の利害とピッタリ一致させることを自らの任務と位置付け、露骨に産軍学協同路線を「主体的」に推めてきた大学なのである。

そして、東海大学の特色として注目すべきことは、かかる「校風」を実体的に支えている「松前思想―建学の精神」の反動性である。

普通、個別私学資本における、共同幻想性を理念化したものが、「○×大精神」として表現されるわけだが、実際上、そのような観念上の産物は、帝国主義的再編の進行過程にともなう個別私学資本の分業化と日帝―文部省の中教審―筑波化政策によって「空文句」に等しくなっている。つまり、帝国主義の危機の煮つまり―戦争遂行体制構築の中にあっては「大学の自治」等という、ブルジョワ的権利すらが許されないものへと至っているのである。その中で東海大の「精神」は帝国主義の利害を先取り的に代弁しているが故に、一貫して学生抑圧を行ない、現在にいたるまで確固とした指導理念たりえているのである。

ともあれ、その内容を見るならば、「建学の精神は人道主義、人格主義の教育であっていやしくもこれに反する唯物史観的世界観に基づくものではない」「社会と国を愛し、世界を愛しうる巾の広い人物を歓迎……民族と国家と世界に対する平和的使命を自覚させ、広い視野に立って新科学時代をリードする」「新時代を指向する歴史観・人生観・世界観に関する思索を通じ新しい社会の建設に任ずるにふさわしい人材の育成を期している」以上のように内容たるや、帝国主義イデオロギー（＝①資本への屈服②反共思想③愛国排外主義）を基軸としている。そしてこのような思想性の当然の帰結は、「唯物思想の保有者と称する一部学生が、学問の府たる大学を暴力によって騒乱の巷と化し、施設を破壊し、あるいは学内秩序を乱すが如き最近の動向は断じて許せない。建学と目的を破壊する者として、本学はこれらに対して断固たる態度をもって臨む」などと、共産主義者や闘う学生を、反共主義を物質化するものとして、目的意識的に敵対視―弾圧するのである。

そして、このような反革命イデオロギーが全国の東海大系列の高校も含めた全ての教育機関における『現代文明論』の強制的学習として、あるいはＦＭ東京の「望星高校」という松前の私設番組を通じて流布されているのである。われわれはこれを、反共主義者による公的教育機関の私物化として弾劾する。

それでは、以上のような「建学の精神」に基づくところの学内体制はどのような特徴があるのか。

第一に見てとることができるのは「四・二〇通達」の完全に近いまでの実質化が貫徹されており、闘う学生に対する暴力弾圧―徹底した学内管理支配体制のもとで、「紛争を起こさない大学」となっていることである。

学内暴力装置＝学生課職員による職業的暴力弾圧。そして「学則」と学内治安維持法たる「十五項目禁止条項」により、学生のあらゆる活動は抑圧―制限され、検閲制―許可制あるいは、サークル活動における顧問制度の導入により、政治活動はもちろんのこと、一切の自主的活動、文化創造運動は当局の監視の下におかれている。

ここにおいては、現在に至るまでの帝国主義的大学再編の過程に存在していた、「学生の自治」等のあらゆる「民主の装飾」は一切ない。また、そのことは東海大が、帝国主義の利害を全面化させていくうえでの支配形態はブルジョワ民主主義をも否定し、強権的にならざるをえないということなのである。

第二の特徴点は、当局の白色ゲバルト支配を右から支える右翼体育会と「左」から支える「学生会」といった、御用学生が学生を弾圧する分断支配の構造である。

体育会は云うまでもないが「学生会」は表向きは「学費値上げ反対」などと、闘うかのようなポーズをとりつつ、その本質は、「建

学の精神」に屈服したＪＣ的階級協調主義であり、俗にいう「秩序派」である。それは大衆の闘うエネルギー・方向性を反動的に集約―制動させていく単なる日和見主義一般ではない。われわれの闘いに対しての職員と一体になって暴力的敵対や「成田過激派」キャンペーンを行うといった事実があるように、完全に当局の尖兵になりさがっており、闘いの前進にとっての桎梏物として、体育会ともども打倒―解体の対象でしかない。

そもそも、「学生会」は当局が自らの支配を貫徹するために、「援助金」を出すなどして、計画的系統的に育成してきた経過があるわけだが、われわれがここで見ておくべきことは、闘う思想性階級性を抜きにしてものとり主義―経済主義へと走るならば、必ずや彼らのような体制補完物の位置に転落するのであって真の勝利を獲得することはできない。逆にいうならば、われわれと彼らとの分岐点は単に戦闘的か、日和見かにとどまらず、そこにおける階級的質とどのような方向で闘うのかが問われているのである。

第三に見なくてはならないのは、貧農プロレタリア、被差別大衆を排除することと、学生からの収奪―生活破壊であるところの高額な学費である。

七九年度の学費をみると、医学部の四〇〇万円を筆頭に、理工学部八二万円、芸術学部八五万円、文学部七六万円、教養学部八一万円等々、他の大学に比べても非常に高額となっている。それに加えて「赤字」を口実に一方的な値上げを十年以上連続しておきながらその学費の使途経理を全く明らかにしていない。実際、東海大は「建学」ならぬ「建築の精神」で在校生とは関係のない新施設を次々と建設しており、東海大資本の利潤拡大のみに学費が注ぎこまれているのは明白なのだ。資本主義の疎外された労働のもとで、汗水流して働いた分の何割かを資本家に搾取され、受けとった労働者の賃金が再び私学資本の利潤のために収奪されていく、このような構造を見すえ闘っていかなくてはならない。

2　昨冬学費闘争の意義と限界

以上のような学内管理支配体制と十一年連続の不当な学費大幅値上げ策動に対して、昨年十二月、ついに学友の怒りは爆発した。

「赤字」を口にしながら、東海大資本としての利潤追求のために、在校生―新入生とは関係のない施設拡大のみに学生大衆から収奪した金を注ぎこみ、その経理を秘密裡にしていること、そしてそのような当局や社会矛盾に目を向け、闘おうとする学友に暴力弾圧をかけてくるといった大衆を愚ろうしきった松前体制に対して戦闘的学友の断固とした闘争が展開されたのである。

十二月十三、十四、十九日、一週間にわたって闘われたこの闘争は、「学費値上げに反対する会」に結集する先進的学友を先頭として、一〇〇〇名にものぼる広範な学友と共に、当局と御用「学生会」―右翼の執ような闘争破壊―白色テロルに屈することなく、学内実力集会を打ちぬき、学生部長への大衆団交を要求する中で、一挙に全学化した。

ともあれ、この闘争の意義を見るならば、第一に、十一年間連続の値上げ強行をもくろむ当局に徹底して闘いを展開することにより、ついに勝利的成果として学費の一部凍結―「授業料すえおき」を戦取したことである。

学生課職員のなぐるけるの暴行をうけて全治一カ月、または前歯をへし折られながらも、三回にわたって学内実力集会を実現する学生たち。無期停学二名を初め、全員への処分攻撃がかけられつつも、ビラまきを断固やりぬく学生たち。その不屈性、旺盛な戦闘精神になんら値上げの正当性を持ちえない当局は恐怖したのだ。闘争に起ち上がれば、不当にも当局からの暴行のみならず、報復処分にさら

され、卒業や就職といったことにも関係してくる中で、自己のブルジョア的損得勘定を投げうってでも闘争勝利にむけて闘い抜く東海大生の姿勢は日本学生運動の革命性の一端を示したのである。このような思想性は、三里塚闘争や狭山闘争、あるいは日韓連帯闘争を闘いぬくなかで培われてきたのであり、まさに全人民の利害を守って闘うという思想的質が学園闘争に発揮されつつあるのである。いかなる弾圧に対しても、三里塚農民、石川一雄さんや韓国民衆がそうであるように思想的確信—正義性そして団結でもって闘うならば、一見強固かのごとくみえる松前体制も所詮「ハリコの虎」でしかないのである。

第二の意義は四・二〇体制＝暴力的学内管理支配体制を根底から打ち破り、広範な学友とともに戦闘的大衆的実力闘争としてかちとられたということである。

戦争前夜的情勢における帝国主義的教育再編の矛盾は、ますます学生に犠牲を強制し、そしてそれへの不満・怒りを管理支配体制の徹底化(四・二〇通達を見よ!)によって圧殺せんとしている。

あの御用「学生会」は帝国主義イデオロギー＝「建学の精神」の幻想性にのめりこみ、学生への治安弾圧攻撃的質を有している「学則」＝当局的反革命秩序のワク内にしか運動をつくり出していないが故に、それは階級的本質性において当局と激突し、追いつめていく大衆の要求を決して貫徹できないばかりか、逆に大衆の闘いをねじふせる体制補完物でしかないことは先に述べた。かかる中で、東海大闘争を勝利させていくには、管理支配体制の「合法化」であるところの「学則」と、それを思想的に支え、対決軸をおおいかくしている「建学の精神」を大衆的に打ち破っていくこと抜きにはありえないのだ。

更に決定的に押えておくべきことは、大衆的実力闘争の思想とは、単なる戦術レベルの問題としてのみあるのではないということである。

東海大資本は、日帝—文部省が戦争にむけた中教審—筑波化政策を押しすすめているなかで、日帝の利害と自ら個別資本の利害を符合させて積極的にその路線の先頭にたち、また大衆からの強収奪の上に私学資本としての利潤を追求している。従ってこれとの対決はその対立構造の本質性において、帝国主義と人民との階級的利害対立の絶対的非和解性—非妥協性、すなわち暴力性をはらんでいる。そうであるが故に、われわれが大衆の利害に断固として立脚し、当局と真向から対決していくならば、実力闘争の質でしか闘わざるをえないのである。

第三点目の意義は、学費闘争報告集会における首都圏の闘う学友との交流、二・九筑波現地闘争、そして四・二〇通達粉砕集会への「反対する会」としてのとりくみというように、全国学生共同闘争の一翼を担っていったことである。

今日、学園にかけられている中教審—筑波化攻撃の最大の特徴は、産業社会の要請に応える高中級労働者の育成だけにとどまらず、移転攻撃や「四・二〇通達」にみられるように被抑圧民族人民の進撃に追いつめられ、侵略反革命戦争への絶望的衝動にかられる日帝の全社会的再編—治安攻撃の一環なのである。しかしながら、東海大学費闘争と期を同じくした形で闘われた筑波大闘争—日大闘争といったように、中教審モデル校といわれ、「紛争を起こさせない」はずの日帝の反革命戦略拠点校からの大衆的決起が巻き起っている。このことは、まさに学生戦線における「佐世保重工」的事態の現出であり、今後闘いを更に発展させることによって日帝の戦争にむけた大学政策を根本から破産せしめていくことは十分に可能である。かかるなかで、東海大闘争が個別の闘いを超えて全国学友の共通の矛盾を撃つべく共同闘争に、あるいは全人民的政治課題を担わんと三里塚・狭山・日韓へ合流することは決定的に重要である。われわ

れは共同闘争を更に推進していくなかで東海大を反革命の砦から、革命的学生運動の拠点へと打ち固めていくだろう。

さて、以上のような意義をふまえつつも、この闘争を担うなかで突きあたったわれわれ社学同東海大支部の限界性と克服すべき課題について対象化しなくてはならない。

昨年春期において、われわれはそれまでの闘いが学生の大衆的決起と充分結合しえなかった限界を克服すべく学園で苦闘している学友との団結をめざした。そしてそれは学内課題を先進的学友とともに担う構造をつくりだし、六・二八東京サミット粉砕東海大実委の大衆的結成等、多くの成果を確認することができた。

しかし、一方において、かかる課題を追求していくことの裏返しの傾向として、学内主義—大衆追随主義的になったことは否めないし、学費闘争においても、闘いの質と方向性を明確に設定しえず、大衆運動一般としてしか関われなかった点を今後の闘いにむけて教訓化しなくてはならない。

「値上げ反対」「管理体制粉砕」という大衆の自然発生性の延長上にしか闘争を組織しえず、目的意識性をもって政治闘争との結合を組織化できなかったことがあげられる。そしてそのことは、闘争の進展に従ってその政治内実が問われるや否や、意志統一の基軸を失ってしまった現局面の「反対する会」の問題としてもとらえかえしていかなくてはならないだろう。現在、われわれに問われているものは、大衆の自然発生的決起と結合するだけではなく、それを安保粉砕・日帝打倒の方向性とそれを担いぬく不抜の革命戦士へと闘争主体の質を左転回させるといったレーニン『なにをなすべきか』で展開されている命題をたとえ困難性があろうとも貫徹しなくてはならないのである。なお、このことは東海大学共闘独自活動の強化—情宣紙『嵐の中へ』の定期的発行を通じ、われわれの政治的立場性を鮮明化するなど、克服しつつあることを加えておきたい。

ところで「反対する会」は突出した闘いを展開することにより、大衆の政治的流動化をつくりだしたわけだが、当局の処分弾圧に対峙するなかで次の闘いへ収約できず、政治的勝利とひきかえに組織的敗北といった状態を余儀なくされた。これは「反対する会」の組織的性格や結成当初の位置付けのあいまい性が原因としてあげられるわけだが、そのような局面における問題の一つに「東海大生は東海大闘争が第一」だとか「街頭で権力と激突するのは無意味」あるいは「学内運動ぬきに政治闘争はダメ」などという形式論理的発想からくる傾向を克服していかなくてはならない。

これに対しては東海大闘争の真の勝利とは何か、日本革命勝利の展望とは何かということを誠実に提起することによって解決していかねばならない。

3　秋期大攻勢をかちとれ!

われわれは、1、2、をふまえたうえで、現局面の後退性をのりこえ、秋から冬にむけた東海大闘争の新たな構築をめざさなくてはならない。

昨年期から本年夏期までの闘いは東海大の現状を突破するには至っていない。管理支配体制は維持され、「授業料すえおき」という事態をひきずり出しながらも学費総体の値上げを許してしまった。しかしそうだからといって怒りが消えたわけではない。東海大生は決して現実に満足しているわけではないのだ。

われわれはこの秋に断固とした闘争を推進しなくてはならない。そしてそれは昨年の闘いを上回り、質・量ともに飛躍したものとして実現していく必要がある。

そのために第一になすべきことは、全人民的政治闘争と東海大闘

争の有機的結合を保証する学内大衆組織・学共闘の強化発展を推進していくことである。

この秋期政治過程は日本の全人民にとって決して黙視することのできないものとしてある。

光州民衆蜂起をこのうえない残忍なやり方で鎮圧し、今度はその兇暴な牙を金大中氏をはじめとする二四名の政治犯にむけ虐殺せんとする安保―日「韓」体制との血債をかけた対決と、一五年間の血みどろの闘いに最後的決着をつけるべく二期工事阻止―廃港にむけた九・一五―十・一九三里塚決戦の大爆発をなんとしてもかちとらねばならない。これらの闘いを最先頭で担う東海大生の圧倒的決起を実現することは絶対的任務である。そしてそのような任務をやりきれる戦略的政治部隊を創り出しつつ、自然発生的にではあれ、政治闘争への流出をかちとっている東海大闘争の質を押しあげ、恒常的に日帝と対決しぬける全人民的政治闘争潮流を形成していかねばならない。

かかる闘いを主体的に推進していく学共闘の圧倒的建設は、政治勢力の分裂・均衡化から困難性を余儀なくされている学内大衆運動の再構築の上でも決定的な重要性をもつだろうし、逆に困難性をかかえているときほど、不屈の目的意識性をもって闘う組織が情勢を切り拓いていくのである。

第二になすべきことは「反対する会」の団結を強化し、秋期大攻勢、松前体制打倒―中教審路線粉砕闘争の構築をめざして闘い抜くことである。

ここで「反対する会」の組織的後退を整理するうえでその性格を明らかにしたい。

「反対する会」とは、様々な思想上・党派の違いをこえて、松前体制粉砕―学費値上げ反対―四・二〇通達実質化阻止の点で一致できる全ての学友の大衆組織である。そしてその運動構造は基本的にさきにあげた学内諸矛盾の解決にむけて「反対する会」独自の会議―情宣―学習会等を一つのサイクルとして展開するなかで闘いを構築していくことになるだろう。現在「反対する会」のメンバー各自が一つの戦線（サークル・クラス等）を受けもつ形になっており、またその方向で各戦線の連合組織として建設しようとする意見もあるわけだが、そのことは「反対する会」が各戦線の連絡機関化することにより分散化し、その結果、団結を弱め独自の運動展開の後退を強いられるだろう。また各戦線の闘いそのものも各人・各グループの個別能力に委ねてしまい東海大闘争の発展にはつながらないと考える。とりわけ東海大のような重弾圧体制にあってはなによりも密集した団結が問われており、あくまで「反対する会」の強化・拡大にむけて一切の日常活動―オルグ等を集中すべきである。それは「反対する会」として代議員会・クラス・サークルに登場することによって学友を結集していくことであり、そのもとにおける戦線配置の構造である。少くとも現在のわれわれにはこの方向がもっとも有効だと考える。

次に秋期大攻勢をかちとるにあたって問われてくる「反対する会」の階級的質をいかに高めていくかということである。

「反対する会」を一般的な「良心派」で終わらせてはならない。まさに闘いを経験することによって新たな矛盾・より本質的な矛盾を見いだし、それと対決していく方向でなければならない。あらためて言うまでもないことだが、学園闘争の自己完結はありえないし、今日の資本主義社会の変革、日帝打倒という課題が当然でてくるのである。すでに学生管理支配の現状に怒りをもって決起した学友の多くがその根拠を帝国主義的教育再編攻撃として見抜き、中教審―筑波化攻撃と対決していこうとしているわけだが、われわれはそれを中教審の歴史性や役割を単に知識としていくことや反権力ムードだけに終わらせてはならない。日帝の動向や教育再編の現状を知ることは必要条件であっても十分条件ではない。それが意識性だけの対決にとどまらず、日帝の八〇年代総路線と真向うから闘う方向性―戦略的総路線に基礎づけられた階級的実践化をもってのみ日本革命運動の前進があるのであり、われわれはそのような方向に東海大闘争―「反対する会」運動を牽引しなくてはならない。それは大衆組織としての独自の運動展開という原則性をふまえながら不断に政治的内実の持ち込みと学共闘を下から独自に建設していくことにより「反対する会」の政治的組織的強化を押し進めることで実現されるだろう。かかるなかで、東海大の学生管理の現状に反発するだけでなく、「日本帝国主義打倒のために蜂起を準備するのだ」と決意し闘う学友が大量に輩出されることは日帝の教育再編の粉砕を意味するのである。

ところで、七〇年安保決戦におけるところの教育学園闘争の大爆発は徹底的に日帝―大学当局を追いつめたにもかかわらず、全共闘運動終焉以降急速なまき返しを受けてきたことは知るところである。なかでも、学費に関するならば「受益者負担」論の押しつけや物価スライド制―新入生からの値上げをもって闘いから身をかわそうとしている当局との対決は困難性がある。このような攻撃の功妙さにあっては民青のように個別学園内の即自的要求路線の質では全く闘えない状況になっている。つまり何故自分達と直接関係性を持たない学費問題を闘うのか、このことのとらえ返しぬきに闘争を構築することはできないのである。それはとりもなおさず、教育の帝国主義的再編の動向との対決と自ら学生存在の位置をとらえかえしていかないかぎり断固とした闘争として爆発しえない。逆に即自的闘争一般としてはもはや学費闘争が高揚することはないのであり、まさに学費闘争といえどもその階級性・政治性が問われている。われわれは自らの闘いが何をもって革命的闘争たりえるのか、何に拠っていくのかということを質的に深化させ自らの政治性を鮮明につきだしていかねばならないだろう。

最後に東海大闘争は全国学生共同闘争の一翼を先頭で担っていかなくてはならない。

それは東海大闘争において解決していく矛盾―課題は全国学友の普遍的課題であるということだけではなく日本学生運動を革命的に再生し階級闘争の前進をかちとっていくことである。従って全国学生共同闘争とは単に個別学園大衆運動の算術的総和や横のつながりにとどまるだけでは決定的に不充分であることは言うまでもない。あくまでそれが日本帝国主義打倒闘争の方向性のもとに、被抑圧民族人民―全人民の普遍的利害を守りきるという質をもって展開されなくてはならない。

学友諸君！

韓国では流血と硝煙弾雨にあって人間の尊厳をさし示す偉大な闘いを学生が先頭で担っていった。友人・恋人が次々と敵弾に倒れていきながらも最後まで不撓不屈に闘い抜いたのだ。われわれは彼らの闘いを必死で学び東海大闘争に還元していかなくてはならない。今や言葉だけの連帯の時代は終わった。真の連帯が問われている。韓国の学友に続くこと、彼らのように闘い、安保―日「韓」体制を打倒しきること。これが連帯なのだ。

昨年からの地平と蓄積された質をしっかりとにぎりしめ、それを上まわる秋期大攻勢を韓国民衆に応えきるものとして打ち抜け！

社学同東海大支部は東海大を革命的学生運動の拠点とすべく責任をもって闘い抜くことを固く誓うものである。

スローガン

☆学費値上げ阻止！　経理を全面公開せよ！

☆松前体制打倒！　「建学の精神」粉砕！

☆暴力職員追放！　御用「学生会」―「体育会」を解体せよ！
☆「反対する会」を先頭に秋期東海大闘争の大爆発をかちとれ！
☆戦争にむけた帝国主義的教育再編粉砕！
☆「四・二〇」実質化阻止！　中教審―筑波化攻撃粉砕！
☆全国学生共同闘争勝利！　学生運動の革命的伝統を復権せよ！
☆韓国民衆の死闘に学び応えよ！　血債をかけて連帯せよ！
☆全ての東海大生は学生共闘会議の旗の下に結集せよ！

「ドイツ・イデオロギー」ノート

――マルクス主義の主体的把握のために――

湯沢拓史

はじめに

われわれは世界史の転換点ともいうべき激動の真只中に、社会主義学生同盟の再建をかちとった。われわれは再建集会において、光州で全斗煥の手先、兇悪なブラックベレー部隊に対し、銃を手にし、民族と人民の解放のために喜び勇んで突撃していった韓国の学生たちに心の底から連帯し、かれらに続いて斗おうとみなで誓い合った。そのことこそが社学同の最大の任務であることを確認しあった。われわれは今、その任務をまっとうしなくてはならない。

そこで、われわれはまず何よりも、次のことをふまえる必要がある。すなわち韓国学生に連帯するとは一体いかなることなのか、ということである。それは単に、日本において日韓連帯運動を行うということのみを意味するのではない。もちろん日本において韓国学生の闘いを支援する広範な大衆運動をまき起こすことは大事である。それは、なされねばならない。ただこれだけは必要条件であって必要十分条件を満たすものではない。

重要なのは、運動と同時に、いやそれ以上に韓国学生たちの「生きざま」「死にざま」を真剣に見つめ、逆にそのことからわれわれ自らの「生きざま」を問い返していくことに他ならない。かかるラディカルな問いを自らに発してこそ、はじめて韓国学生に真に連帯しうる道はあるのであるといえる。

では、共産主義者として自己を形成しようとしているわれわれにとって、それはいかなることなのか、それは韓国の学生たちが民族と人民の解放のために死をも恐れずに全斗煥とたたかいぬいた光州蜂起のように、われわれ自身が、人民の解放のために武装蜂起をもって日本帝国主義を、打倒しうる真の人民兵士たりうるかどうなのかといった問いに他ならないのである。そのことはもちろん、強固な「決意」が前提である。しかし決意は一時の感情にとどまってし

まり限り、決して本質的でないし、長続きすることはできない。それは一つの世界観＝思想性へと高めあげられることをもってはじめて真に発揮されうるし永続化するものなのである。

われわれの世界観＝思想はいうまでもなく共産主義である。したがってわれわれは、何としてもこの思想の主体化をかちとらねばならない。たてまえとしての共産主義ではなくわれわれが真にそこで生き、死ぬことのできる思想としてのそれでなくてはならない。

それゆえわれわれは、日々の政治活動をなしていくことは前提としつつも、「活動をしているからいいんだ」式に自らの思想的打ち固め、共産主義者として自己形成の闘い、文字通り自己との闘いをないがしろにしてはならない。社会とのたたかいはすなわち自己とのたたかいでもあり、逆に自己とのたたかいはすなわち社会とのたたかいでもあるといったことが共産主義者の前提であるならば、われわれは常に自らの思想性を点検し、真の革命的共産主義者としての自己形成＝自己変革のためのたたかいを「今」においてたたかいとらねばならない。まさにこの、死を賭してでも生きぬこうとすることができる思想として、自らの思想を打ち固めようと真剣に己れと格闘すること、そのことこそが、おのれの生を民族の未来に投影し一切を献げる韓国学生の血を吐くような苦闘に内在的に連帯しうる唯一の道ではないだろうか。

このつたないノートがマルクス主義の主体化のための一助となれば幸いである。

本ノートの構成

A 「ドイツ・イデオロギー」とは
B 「ド・イデ」のつき出しているもの
　1. 唯物論的人間観
　2. 史的唯物論
　3. 国家論
　4. 共産主義
C 「ド・イデ」におけるマルクス主義の地平
D スターリン主義者による史的唯物論の歪曲
E 黒田哲学批判

今回に関してはA、Bのみ収録

A 『ドイツ・イデオロギー』とは

この著作は、マルクス・エンゲルス・ヘスの合作とされ、執筆年月日は、一八四五年九月～四六年五月ごろとされている。

構成は次のとおりである。

才1巻
　Ⅰ フォイエルバッハ
　　ライプツィヒ宗教会議
　Ⅱ 聖ブルーノ
　Ⅲ 聖マックス
　　ライプツィヒ宗教会議の結末
　　真正社会主義
才2巻
　Ⅰ 「ライン年誌」または社会主義の哲学
　Ⅳ カール・グリューン「フランスとベルギーの社会運動」または真正社会主義の歴史記述
　Ⅴ 「ホルシュタイン出自のゲオルグ・クールマン博士」または真正社会主義の予言

このうち一般に「ドイツ・イデオロギー」として読まれているものが、才一巻Ⅰ「フォイエルバッハ」であり、最も重要な部分である。

「ド・イデ」は、執筆当時マルクスらの努力にもかかわらず、出版されることなく、その原稿は「鼠どもがかじって批判するままにさせ」（マルクス「経済学批判序言」）られたのであった。結局彼らの存命中には、この原稿からは、まったく重要でない部分だけが印刷されたにすぎなかった。エンゲルス死後、原稿はドイツ社民の右派ベルンシュタインの手に渡り、三七年間で、かれらの手で刊行されたのは、テクストの半分にみたなかった。

この最もすぐれた才一章「フォイエルバッハ」がはじめて出版されたのは、一九二四年、ソ連のマルクス・エンゲルス研究所によるリャザノフ版である。これはＭＥＧＡ（マルクス・エンゲルス全集）に収録。二度目は、一九三二年、やはりこれもソ連のマルクス・エンゲルス・レーニン研究所によって出版されたアドラツキー版。これは「ド・イデ」全章を含みＭＥＷ（マルクス・エンゲルス著作集）に収録（岩波・大月文庫本もこれ）。

その後このアドラツキー版が最大の権威を持っていたが、その編集の仕方が問題とされ、現在では更に一九六五年、ソ連バガトーリャ版、六六年東独新版、七四年日本広松版がある。その理由はアドラツキー版は「草稿を一旦バラバラに切りきざんだうえで糊と鋏でつぎはぎしている」（広松渉）からである。

この編集の問題をめぐって今なお論議は続いている。

さらにもう一つの問題点として論議を呼んでいるのが「持ち分問題」である。すなわち「ド・イデ」はほとんどエンゲルスの筆跡で書かれており、マルクスは、多くは加筆といったかたちで書いている。これをめぐって、ⓐグスタフマイヤー＝マルクスとの討論にふまえエンゲルスが執筆、ⓑリャザノフ＝エンゲルスがマルクスの口述筆記、ⓒ広松渉＝思想的にエンゲルスが主導といったような説がある。

ただわれわれは、このような文献解釈上の問題点に関して知っておいたほうが良いだろうが、何よりも重要なのは「ド・イデ」のつき出している世界観をトータルに把握し、どれだけその中から、われわれの自己変革の糧をつかみとり得るのかといったことである。

なおこのノートはバカトーリャ版（合同出版）によった。

※本文の引用句に関して、出典註が記載されていないものは、基本的に「ド・イデ」である。

B 「ド・イデ」のつきだしているもの

1. 唯物論的人間観

(a) 人間とは何か

己れあるいはわれわれは何であるのか、つまりは人間とは何であるのか、といった問いは、人間が人間として歴史の中に登場して以来、人間が持ちつづけてきた問いであり、われわれが現実に生き続けるかぎりにおいて、抱きつづける問いである。かかる問いこそ、あらゆる哲学＝世界観＝人間観の出発点であり、かつ結論としてあるものに他ならない。

マルクス自身、かかる問いを出発点としつつ、その徹底化をつうじ、唯物論的人間観を形成していったのであり、もって、得た結論こそ、共産主義に他ならない。ここに、共産主義がマルクス主義と呼称されるゆえんが存する。

マルクスは、かかる人間観にもとづき、次のような判断を下す。すなわち、「人間は自分たちが何であるのかとか何であろうとしているのかとかについて、自分たち自身にかんしてまちがった観念を

これまでいつも自分たちの頭のなかにこしらえてきた。」（アドラツキー版「ド・イデ」）と。

人間とは何か、といった問いに対する解答は、さまざまな時代において、さまざまなかたちで与えられてきた。そして、マルクスの生きた時代においては、哲学界をヘーゲル体系が支配し、人間を含む一切のものの原理が絶対精神とされ、そこでは、精神が世界―人間を規定するものとされていたのである。

これに対し、マルクスは、ヘーゲル体系の完全な逆転→解体をおこなった。すなわち、「生きた諸個人」「現実的に活動する人間たちに出発点がおかれ、かつかれらの現実的な生活過程の側から、この生活過程のイデオロギー的な反映と反響の発展もまた解明される」のであり、「意識が生活を規定するのではなくて、生活が意識を規定する」といった、あらたな人間観＝世界観の提出をおこなった。これが、唯物論的人間観である。そこでは、人間とは何か、といった問いに対して、絶対精神であるとか、実体、類、唯一者、人間（なるもの）などといった、抽象的普遍性をもって本質となすような解答は拒否される。あくまでも人間とは「生きた諸個人」であり、「現実的に活動する人間たち」以外の何ものでもなく、それこそが、人間の本質である、とされるのである。

したがって、より人間的なものは、より現実的なものと、幸福は、「生きた諸個人」の生活の幸福となり、一般的な人間主義（＝ヒューニズム）は、現実的人間主義となるのでなくてはならない。マルクス主義が、真の人間主義、ヒューマニズムといわれる根拠である。

(b) 人間と環境

それでは、「生きた諸個人」とは、いかなるものなのか。それは、一切から孤立した個人などでは決してなく、生きている以上、自然の取得をもって飲みかつ食い、そのことを複数の労働をとおして実現するなかから、あるいは、人間を産むことを複数で実現するなかから、必然的に、ある諸関係を、自然や他の人間といった環境をとりもっている諸個人のことである。したがって、「環境は、人間が環境をつくると同時に、人間をつくる」のであり、人間と環境とのこの交互関係を媒介するものが、人間労働に他ならず、それは常に、共同で実現される協働としてある。そして、この協働こそ、人間を社会化せしめる根拠であり、人間を人間たらしめた本質である。したがって、人間とは、協働を基礎とした社会的存在であり、「社会的関係の総体（アンサンブル）」（マルクス「フォイエルバッハに関するテーゼ」）なのである。

(c) 人間と生産

さきに協働が、人間を人間たらしめた本質であることを示した。協働とは、生活手段の生産を実現する行為である。ゆえに、「人間自身は、かれらが生活手段を生産しはじめるや否やーみずからを動物から区別しはじめる」といえるのである。そして、「人間はかれらの生活手段を生産することによって、間接的にかれらの物質的生活そのものを生産する」のであるから、「生産のこの様式は、」「すでにこれら諸個人の行動の一定の仕方、かれらの一定の生活様式にほかならない」のであり、「諸個人がかれらの生活をあらわす仕方が、かれら自身のあり方である。」「したがってかれらがなんであるかは、かれらの生産と、すなわちかれらが何を生産し、またいかに生産するかということと一致する。それゆえ、諸個人がなんであるかは、かれらの生産の物質的条件に依存している」のである。

人間とは何か、それは生産の物質的条件によってきまるのである。

(d) 実　践

生産は常に、生産的実践としての労働をもってなされる。労働は

自然に働きかけ、自然を取得する行為として常に実践的である。労働は、必ず協働として実現され、このことはただちに、他の人間たちと実践的な関係をとり結ぶ、という意味において、常に実践的である。それゆえ、「あらゆる社会的生活は本質的に実践的である。」（「フォイエルバッハに関するテーゼ」）人間とは、本質的に実践的な存在であると結論される。

(e) 言語と意識

他の人間たちと実践的な関係をとり結ぶこと　すなわちそれは、自分をも含む社会総体にはたらきかけることを意味し、それはまた、社会的存在としての自分自身にはたらきかけることを意味する。そして、この実践的な関係の成立は、言語の存在を意味する。つまり、「言語とは、実践的な、他の人間たちのためにあってこそ、はじめてまた、私自身のためにある現実的な意識」なのであり、「意識とおなじだけふるい」のである。「意識はそれゆえ、そもそも始まりからすでに社会的産物であり、およそ人間である限り、それはかわらない。」「意識とは、意識された存在＝（意識された）現実的生活過程のこと」であり、意識された「社会的関係の総体」のことである。

(f) 現実的人間主義と実践

そうであるならば、「意識をかえよ」という要求は、現実、すなわち社会的諸関係をかえよという要求へと、おきかえられねばならない。さもないと「意識の幻影とのみ」たたかうにすぎず、とどのつまりは「現にあるものを別様に解釈せよ、すなわちある別の解釈によって、それを認めよという要求にゆきつく」ことにしかならないのである。すなわち、意識された不幸であるとか絶望、虚無、悲惨などといったものはおしなべて、それらを感ぜしめているところの社会の現実をかえねば、現実的にはなくなりはしないのであり、考えをかえてみたところで、現実はかわるわけではなく、矛盾は厳として存在しつづけ、むしろそうすることによって、現実の矛盾を固定化させてしまうことにもつながるのである。そのことはまた、矛盾をはらんだ社会的関係の総体としてある自己を、すなわち、不幸であるとか絶望、虚無、悲惨、などといったものにゆがめられた自己を、解決しはしないのである。

ここに一般的・抽象的人間主義（ヒューマニズム）の虚偽性、さらには反動性が露呈される。なぜならば、一般的・抽象的人間主義は、不幸に苦しむ人間に対して、彼らをしてそうならしめているところの現実に目をむけさせるのではなく、ただ「愛」であるとか、「友情」であるとかを説いて回るだけであり、かれが不幸の根拠としてある現実に対し反逆を起こすならば、「敬虔な」ヒューマニスト諸君は、おそらくはかれの憎悪とその「野蛮な」反逆行為に非難の声を投げかけるにちがいないからである。「人類はみな兄弟」などと宣伝し回っている輩を見よ。真の人間主義かどうかは、その人間が現実に、社会にどうかかわるかによってのみ決定されるのだ。

真の人間主義は、したがって現実的かつ実践的である。いわば現実的人間主義である。それは出発点を「生きた諸個人」におく。それは現実的不幸を「愛」であるとか「友情」であるとかいった観念的抽象でおおいかくすことを断固しりぞける。それは「怒り」をバネとして、不幸や迫害や差別といったものの現実的・社会的根拠をとりのぞくためにたたかう、すなわち現実・社会をかえるための変革的実践をおこなう。このことはまた、ただちに、社会的関係の総体としてある人間そのものの自己変革活動を意味するのである。

かかる現実的人間主義・変革的実践の立場こそが、唯物論的人間観の結論である。これはさらに、階級性を基礎としたプロレタリア・ヒューマニズムへと発展させられる。

2. 史的唯物論

(a) 歴史の本源的な三つの契機

「前提というものをもたないドイツ人との関係上、どうしてもわれわれは、あらゆる人間存在の、したがってまたあらゆる歴史の第一の前提、すなわち、人間たちは、〈歴史をつくること〉ができるためには、生きていることができねばならないという前提を確認することをもってはじめる必要がある」

ここでマルクス（あるいはエンゲルス）は、ドイツのヘーゲル派に代表される観念論的な歴史観に対し、唯物論的な歴史観の前提を人間生活そのもののうちにおいていることを、まず確認している。

さらにその前提は、「三つの契機」として対象化される。

第一に、「これらの要求（＝食べることと飲むこと、住居、衣料とその他若干のこと）をみたすための諸手段の生産、物質的生活そのものの生産」、第二に、「この最初の要求がみたされたこと自体が、要求をみたす行為とすでに手に入れている要求をみたすための道具とが、あたらしい諸要求へとみちびくこと」、第三に、「人間たちが他の人間たちをつくりはじめる、すなわち繁殖しはじめる、ということ」である。

そして、ここで留意せねばならないことは、「これら社会的活動の三つの側面は、三つのことなる段階と解されるべきではなくて、歴史の出発点から、そして最初の人間たち以来同時点に存在し、今日でも歴史のうちで力をもっている、まさに三つの側面……三つの契機としてのみ解されるべきものである」ということである。

こうした「三つの契機」をエンゲルスは、「家族・私有財産および国家の起源」の一八八四年序文において、「衣食住の対象の生産およびそれに必要な道具の生産」と「人間自身の生産、種族の繁栄」と表現し、さらにこの両者をまとめて「直接的生活の生産および再生産」とよんでいる。まさにこの「直接的生活の生産、再生産」こそが歴史および現実の出発点としての史的唯物論の根本命題に他ならず、経済学において「経済原則」として規定されるものの内容である。

(b) 歴史における人間の本源的関係

「直接的生活の生産、再生産」とは、人間が自ら欲望をみたすために自然を取得する「人間と自然とのあいだの質料転換」（マルクス「資本論」）といった関係を直接意味するわけだが、ここで重要なことは、かかる事態は必ず社会的協働といった関係を通してのみ実現されるということであり、このようにして人間における生活の生産は常に一個二重の関係、すなわち自然的＝社会的関係として現れるのである。

この、生産を協働をもって実現する一個二重の関係が、歴史における人間の本源的関係に他ならない。そして、この自然的側面を技術的関係とよび、社会的側面＝協働関係を生産関係とよぶ。

(c) 史的唯物論とは

したがって、かかる自然的＝社会的関係を本源的に有する「直接的生活の生産、再生産」の全構造の歴史的解明をなし、論理的規定性を与えてゆくものが史的唯物論であり、「直接的生活の生産、再生産」の自然と人間の関係性の側面（自然的側面）のみを対象化するものが技術論である。

(d) 生産関係

人間が協働をもって生活の生産をなす際にとり結ぶ関係の総体が社会的生産関係であり、その諸側面としては、直接的生産関係、分配関係、交換関係、消費関係、生殖＝家族関係が存在する。

なお、「ド・イデ」においては、生産関係の概念は、未だ十分には整理されてはおらずに「交通様式」、「交通形態」、「交通関係」という用語で表わされている。

(e) 生産力

人間による「直接的生活の生産、再生産」過程、すなわち「人間と自然とのあいだの質料転換」過程（＝労働過程）のなかから発現される力が生産力であり、人間による自然に潜在する物質力の支配の度合をあらわすものである。そして、この生産力の実体をなすものが、労働過程に投げ入れられた労働力・機械力・自然力であり、生産諸力とよばれるものである。また、それら三者は、それぞれ労働そのもの、労働手段・労働対象として、労働過程における三つの契機を構成する要素となり、後二者を生産手段とよぶ。

(f) 土台と上部構造

「人間の存在とは、かれらの現実的生活過程のことを意味」し、「意識が生活を規定するのではなくて、生活が意識を規定する」といった唯物論的人間観に基づくならば、次のような社会の立体的構造が導き出される。すなわち「人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の必然的な、彼らの意志から独立した諸関係を、すなわち彼ら物質的生産諸力のある一定の発展段階に照応する生産諸関係をとり結ぶ。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を、すなわち、そのうえに一つの法制的および政治的な上層建築がそびえたち、そしてそれに一定の社会的意識形態が照応するところの現実的な土台を形成する。物質的生活の生産様式は、社会的・政治的および精神的な生活過程一般を制約する。」（マルクス「経済学批判序言」）ということである。

ここにおいて土台とは、生産諸力の発展に照応する生産諸関係のこととして規定されているわけだが、これはまた下部構造とも呼ばれる。一方これの反映として形成される社会的意識諸形態とそれに照応する諸制度は、上部構造として規定されることとなる。

上部構造―（例）法律、政治、宗教、芸術、言語、科学等

(g) 経済社会構成態の発展

歴史とは、生産諸力の発展に照応する、生活諸関係を基礎としつつ、歴史的に独自な生産様式によって規定される経済社会構成態の発展過程であり、それは、本質的には生産と所有との歴史的に独自な関係の変遷史としてある。なお、「ド・イデ」においては、経済社会構成態へと発展していく概念が「所有形態」としてあらわされている。

経済社会構成態は原始共産制、階級性、共産制へと大別され、階級社会の内的構成は、総体的奴隷制＝アジア共同体、奴隷制＝古典古代的共同体、農奴制＝ゲルマン的共同体、資本制、世界過渡期＝世界プロ独期といった発展段階をとげ、無階級社会である世界社会主義↓世界共産主義へと移行するのである。

(h) 経済社会構成態の各々の発展段階

(イ) 原始共産制

百万年といわれる人類史の大半九九万年位の期間であり、家族↓部族↓種族による土地所有のはじまるずっと以前の形態である。この時期の最後的形態は「放牧生活、一般には移住」による生命活動の維持の時期であり、「種族は決して一定の場所に定住することなく、そのであう牧草をくいつくしていた」（マルクス「資本制生産に先行する諸形態」）。種族共同体等自然的な共同組織は、それ故、

土地の共同体的占取と利用との結果として現われるのではなく、前提としてあらわれる。

(ロ) 総体的奴隷制＝アジア的共同体

共同体所有＝占有はあっても、その内には所有概念そのものが発生しないことにおいて、原始共同体の一亜種、無階級社会と階級社会の過渡である。小共同体が独立的に相ならんで細々と生活し、それら共同体内部においては個人はかれに割り当てられた土地で、その家族と共に独立して働く。が、ここには個人の所有は存在せず、ただ個人の占有が共同体所有を媒介にして存在するにすぎない。

(ハ) 奴隷制＝古典古代的共同体

諸家族からなる共同体は、共同体が所有者として存在するための諸条件の重要な一つとして、戦闘的に軍事組織として編成されている。ここでは共同体所有は、国家所有や共有地として表現され、私的所有とは分離している。共同体の成員は、労働する土地所有者たち、分割地農民たちが主であり、彼等は都市に住み私的所有物たる土地に、共同体成員としての自己の存在に関係するようにかかわるのである。なお直接に生産を担う奴隷たちは、市民の所有物として人格は認められていない。「市民と奴隷のあいだの階級関係は完全にできあがっている」

(ニ) 農奴制＝ゲルマン的共同体

ここでは個々の家族長は遠く離れた森の中に安住しており、共同体は彼らの即自的に存在する統一が血統・言語・共通の過去などによって与えられているにもかかわらず共同体成員のその都度の連合という形で存在するにすぎない。共同体は、国家として存在せずに共同の目的のための集合によってだけ存在する。「この共同体制に、直接に生産する階級として対立するのは、古代共同体の場合のように奴隷ではなくて農奴的小農民である。」農奴は人格を認められており「生産用具、すなわち一片の土地の占有（権）と用益（権）とをもっている。」（エンゲルス「共産主義の原理」）

(ホ) 資本制

生産と所有が完全に分裂し、資本家は、一切の生産手段を所有し、労働者は、自らの労働力以外何物をも持たぬ存在となる。又、共同制は、幻想的共同性として純化した国家を除き完全に解体され、労働者は、アトム的に分立化された個として競争が原理としてある市場にたたき込まれる。

(ヘ) 資本制以降　後述〈共産主義〉の項

(i) 階級闘争

階級社会とは、社会の諸成員が基本的に、支配する人間集団と支配される人間集団へと分割された社会のことであり、階級とは「歴史上特定の社会生産体制におけるその地位から見て、生産手段に対する彼らの関係（その大部分は法律に確認され成文化されている）からみて、社会労働組織における彼らの役割からみて、したがって彼らが使用する社会的富の占有方法からみて、それぞれことなっているところの人間の大集団である。」（レーニン）

ようするに階級とは、基本的に生産手段の所有にもとずき分類されるのである。

こうした階級社会における階級分裂に基き、階級対立が発生する。それはあくまでも非和解的であり、階級闘争としてあらわれる。すなわち、「すべてこれまでの社会の歴史は階級闘争の歴史」（マルクス・エンゲルス「共産党宣言」）なのである。階級闘争は、生産関係を変更してゆく、その起源力となってゆく。

(j) まとめ

われわれは、以上のことをふまえ、史的唯物論に基いて歴史をみ

るならば、ほぼ次のようなものとなる。

「社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法律的表現にすぎないが、所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発達諸形態からその桎梏に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急激に変革される。このような諸変革の考察にあたっては、経済的生産諸条件における物質的な、自然科学的に（→正しくは、社会科学的に、すなわち経済学的に　筆者注）正確に確認できる変革と、人間がこの衝突を意識し、それを闘い抜く（すなわち階級闘争－筆者注）場面である法律的な、政治的な、宗教的な、芸術的または哲学的な諸形態、簡単に言えばイデオロギー諸形態とを常に区別しなければならない。ある個人がなんであるかをその個人が自分自身を何と考えているかによって判断しないのと同様に、このような変革の時期はその時期の意識から判断することはできないのであって、むしろこの意識を物質的生活の諸矛盾から、社会的生産諸力と生産諸関係とのあいだに現存する衝突から説明しなければならない。一つの社会構成は、それが十分包容しうる生産諸力がすべて発展しきるまでは、けっして没落するものではなく、新しい更に高度の生産諸関係は、その物質存在条件が古い社会自体の胎内で孵化されおわるまでは、けっして古いものにとって代わることはない。」「大づかみにいって（原始的－筆者）、アジア的、古代的、封建的（＝ゲルマン的－筆者）、および近代ブルジョア的生産様式を経済的社会構成のあいつぐ諸時期としてあげることができる。ブルジョア的生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。」「しかしブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対の解決のための物質的諸条件をつくり出す。したがってこの社会構成でもって人間社会の前史は終わる。」（マルクス「経済学批判序言」）

(補) 経済学

唯物論の根本命題としての経済原則は、異なる社会的生産関係を有する経済社会構成態ごとに、その実現の仕方が異なるわけであるが、資本制社会における実現形態は、労働力商品化を通じ①価値法則②人口法則③利潤率均等化法則という諸法則をもってあらわされる。かかる経済原則の資本制的実現形態は、経済法則と呼ばれ、これの理論的解明をなしていくものが社会科学としての（狭義の）経済学である。また、この（狭義の）経済学を基礎とし、科学的根拠とすることによって、歴史的に様々な形態をとる経済社会構成態の社会的生産関係を分析していくものが広義の経済学である。

なお史的唯物論は、（狭義の）経済学をかんずくその論理学としての原理論の科学性を基礎とし、広義の経済学を媒介するなかから、その科学性は論証されることになる。

3. 国家論

(a) 幻想的共同性としての国家

「さらに分業と同時に、各個人あるいは各家族の利害、相互に交通しあうすべての諸個人の共同利害とのあいだの矛盾が生ずる。しかもこの共同の利害は、ただ単に表象のうちに〈普遍的なもの〉としてあるのではなくて、何よりもまず現実のうちに、相互に分業していることによって依存しあっている諸個人の関係として実在する。

まさにこの特殊利害と共同利害との矛盾から、共同の利害は国家として、現実的な　個別的でありまた総体的であるような利害から切りはなされた自立した姿をとる。同時にそれは、幻想の上でだけ共同性の姿をとるのであって、実はいつも　諸階級、す

なわち各種の人間集団ごとにわかれて、そのうちのひとつが他を支配するような諸階級という実在的土台のうえに立っているのである。」

まさにこの共同利害と特殊利害の対立にもとづく共同利益の幻想的共同性としての自立こそが、国家のイデオロギー的側面における本質に他ならない。したがって、国家の存在すなわち特殊利害と共同利害との対立の存在は、階級分裂の存在を意味する。あらゆる時代において支配階級はつねに圧倒的に少数の集団であった（特殊なブロ独をのぞく）。にもかかわらず彼らは階級支配を行なった。支配階級は、幻想的共同性としての国家を利用したのである。すなわち彼らは、自らの利害を国家の利害として表現したのである。したがって現代の「国家とは、ブルジョアが、そとへむかっても、うちへむかっても、かれらの所有とかれらの利害とを相互に保障するために必要と」するものとしてある。

以上のことは、次のような結論をもたらす。

「支配階級の思想は、いつの時代にも支配的な思想である。すなわち社会の支配的な物質力である階級は、同時にその社会の支配的精神力でもある。物質的生産の手段をみずからの指揮下におく階級は、それといっしょに精神的生産の手段をも自由に支配しうるのであるから、それにともない精神的生産の手段を欠いている人々の思想は、おおむねこの階級に従属せしめられる。支配的な思想とは、支配的な物質的諸関係の観念的表現、すなわち思想として把握された支配的諸関係以上のなにものでもない。」この支配階級の思想の社会の支配的思想への転化は、基本的に幻想的な共同性としての国家をつうじて、なされるのである。なお、かかる構造の中に、前衛党の必要性のイデオロギー的根拠があるといえる。

なお、レーニンは以上示した幻想的共同性としての、国家のイデオロギー的側面での把握に関して、彼の著作「国家と革命」において欠落させている。

(b) 政治権力としての国家

「国家、階級対立の非和解性の産物であり、その現われである。国家は、階級対立が客観的に和解されなくなっているところに、その時にその限りで発生する。逆にまた国家の存在は、階級対立が和解されえないものであることを証明している。」「国家は階級支配の機関であり、一つの階級による他の階級の抑圧の機関であり、階級の衝突を緩和しつつ、この抑圧を合法化し強固なものにする〈秩序〉を創出するものである」（各々レーニン「国家と革命」）。したがって国家とは常に政治的であり、それは法を媒介とし自らをあらわす力なのである。すなわち国家とは政治権力に他ならない。また法とは、階級支配の「道具」であり、それの適用をとおして権力が発動されるところのものなのである。そして本質的には、支配階級の意志にもとづくところの法は、常に国家の意志として表現されるため「そこから法律は」国民の「自由な意志にもとづくかのような幻想を生ずる。」

それでは、かかるものとして存在する国家権力の実体とはいったい何なのか。それは、統治のため政治的諸機関としてあり、具体的には軍隊・警察であり、その暴力によって支えられる官僚機構・議会・裁判所・行政施設などのことである。したがって国家権力は、本質的に暴力的である。それゆえ国家を転覆しようとする革命もまた、本質的に暴力的である。そのことは具体的には、暴力の担い手軍隊・警察との対決を意味する。

資本制社会は、生産と所有の完全なる分離を本質とする。資本制社会は、特殊利害と共同利害を完全に対立させ、共同利害を幻想のかなたへと追いやる。したがって資本制社会は国家を完成させる。「現実的な利害から切りはなされた自立した姿」すなわち対立した姿を完成させるのである。

ここから導き出される結論、それは、「労働者階級は、できあいの国家機構をそのまま掌握して、自分自身の目的のために行使することはできない」（マルクス『フランスの内乱』）ということであり、それに代わって新たな国家機構（＝コミューン）を創出しなくてはならないということである。なお、現代のソ連や中国などの「労働者国家」は、このコミューン（ソヴィエト）的組織を解体させてしまっているか、あるいは当初より建設していない。これは、スターリン主義の一つの根拠を形成する。ところで、このコミューンを基礎とするあらたな労働者の国家は歴史上、最後の国家形態であり、自ら死滅してゆく国家としてある。

4. 共産主義

(a) 行為的現在における共産主義＝共産主義運動

「共産主義とは、われわれにとって成就されるべきなんらかの状態、現実がそれに向けて形成されるべきなんらかの理想ではない。われわれは、現状を止揚する現実の運動を、共産主義を名づけている。この運動の諸条件は、いま現にある前提から生ずる。」

われわれは、〈唯物論的人間観〉の項において、真の人間主義の貫徹の道は、変革的実践の立場が立脚点であり、これぬきにしては一切が観念的空語であり、せんじつめれば、非人間的な現実を「別様に解釈せよ」といった要求にゆきつくものであることを確認した。ところで、共産主義の目的は、現実に生きる人間・人類の解放である。であるならば、それは、現実を「別様に解釈」することをもって万事すませようとするような、観照的立場とはあいいれないのである。すなわち、共産主義とは、「現状を止揚する」実践的立場が原点であり、それは、行為的現在における共産主義＝共産主義運動としてある。

すなわち、一流の知識人をきどった人間が大学の研究室などの閉鎖されたアカデミズムの空間にこもり、現実から乖離した立場から、どれ程マルクスの文献を読みこみ、解釈を下そうが、それは解釈学以外何物でもなく、たとえ本人が、己れについていかに解釈しようが、その人物は共産主義とは無縁なのである。さらに、そのような立場から現実の共産主義運動にケチつけばかりおこない、みずからの優位性を保とうとしている人物などは有害ですらある。それは、全共闘運動期において、「進歩的知識人」たちが、みずからの立場を守るために、変革に起ち上がった学生たちに悪罵を投げかけ、反動の側に回ったことを想起するだけで十分である。まさに、現実的な変革的実践の立場とは、このように重要であり、われわれは、これを常に原点としなければならないのである。これを出発点として、はじめて革命運動ははじまる。

(b) 史的唯物論と共産主義

われわれは、史的唯物論にもとづき、次のような見解に達する。すなわち、「生産力が発展するにつれて、現にある諸関係のもとではただ害だけをひきおこし、もはや生産力ではなくて破壊力でしかない生産力と交通手段が生ずる段階が到来する。そして、このことと結びついて、社会のあらゆる重荷を負わねばならないだけで、社会からどんな利益もうけない一階級、社会の外に押し出されているので、他のすべての階級へ、徹頭徹尾対立せざるをえない階級が生ずる。この階級は、全社会構成員の大部分をなし、この階級から、根本的革命の必然性についての自覚、共産主義的自覚があらわれでる。」

すなわち、史的唯物論は、歴史の発展の原動力となる生産力と生産関係の矛盾が、資本制社会をして必然的に崩壊へと追いやること

をさし示すのである。それは、生産力の破壊力への転化であり、その根拠となる生産と所有の完全な分裂にもとづくわけであるが、このことはまた、生産と所有の統一を実現する共産主義革命の必然性をさし示すのである。

なお、資本主義社会における経済法則の支配は、経済学によるその科学的な分析を可能とさせ、労働力の商品化にもとづくところの資本主義社会の歴史的限界性＝崩壊の必然性に科学的な論証を与える。

(c) 共産主義革命の前提

「この（資本制社会における－筆者注）疎外が、なにかへたえがたい〉力となるために、すなわち人が、それに抗して革命を起こさざるをえなくなるために、まず前提として必要なのは、それが、人類の大多数をまったく〈無所有な〉ものとして、また同時に、現存する富と教養――このいずれもが生産力の巨大な成長、それの高度な発展を前提とする――の世界に対立するものとして、うみだしていることである。――そして他方、生産力のこの発展（これとともにまったく同時に、人間の世界史的なあり方で経験される生活が、局地的なあり方のそれにかわって生じてくる）は、したがってまた絶対に必要な実践的前提である。」

つまり共産主義革命の前提は、（資本の－筆者注）生産力の巨大な発展とプロレタリアートの多数の世界史的産出なのである。

なぜならば、この革命の担い手は、「人間の完全な喪失であり、それゆえ人間の完全な回復によってのみ自己をとりもどしうるような階層」、すなわち階級そのものの廃絶をもってしてしかみずからを解放しえない階級＝プロレタリアートだからであり、また、生産力の発展なしには「ただ欠乏だけが普遍化され、それゆえ窮迫につれて、必要不可欠なものをめぐる争いも再開し、以前のいやらしいものすべてが復活するにちがいないから」である。

(d) 共産主義革命の性格

「すべていままでの革命では、活動のあり方にはいつも手を触れずにおき、ただこの活動の別の配分、ほかの人々へあらたに労働を割り当てることが問題になったにすぎなかったが、共産主義革命は、いままでの活動のあり方に狙いをつけ、労働を一掃（→止揚－筆者注）し、あらゆる階級の支配を、階級そのものといっしょに廃棄する」のである。またこのことは、人間とは社会的関係の総体であり、「生活が意識を決定する」ことをふまえるならば、人間そのものの根本的変革を意味する。「したがって、革命は、支配階級が他のどんな仕方によっても打倒されえないことからだけ必要なのではなく、打倒する階級が、革命においてはじめて、すべてのふるい身の汚れをぬぐいおとして、社会のあたらしい基礎をつくる力を身につけるところへ達しうるからこそ必要なのでもある。」

なお、共産主義革命の成就は、「主要な諸民族が〈一挙に〉、かつ同時に遂行することによってのみ可能であり、そしてそのことは生産力の普遍的発展とそれに結びついた世界交通を前提としている。」

(e) 共産主義革命の方法

支配者による階級支配は、常に幻想的な共同性としての国家を通じてなされる。それは、直接的には政治権力をもってなされる。そのことは、被支配階級の反抗は、共同性への反抗として、ただちに政治権力の介入をもって鎮圧されることを意味する。したがって、革命は、「まず何よりもさきに政治権力を奪取せねばならない。」共産主義革命も同様に、まずはそのことをもって始まる。プロレタリアートによる政治権力の奪取＝プロレタリア独裁である。これをもってプロレタリアートは、みずからの利害と国家の利害を一致させるのである。

なお、政治権力とは、暴力装置がその実体である。したがって、これを奪取しようとする行為は、本質的に暴力的である。ゆえに、共産主義革命の方法は、基本的に暴力手段による政治権力の奪取としてのプロレタリア独裁権力の樹立であり、まずもってわれわれは、これをめざさなくてはならない。

(f) 共産主義社会

「共産主義がこれまでのすべての運動から区別される点は、それが、これまでのすべての生産と交通との諸関係（＝生産関係－筆者注）の基礎をくつがえし、はじめて自覚的にすべての自然成長的諸前提を、これまでの人間たちの手になるものとみ、それらの自然成長性をはぎとって、結合した諸個人の力に服せしめるところにある。それゆえ、共産主義の制度は、本質的に経済的であり（↔政治的－筆者注）、これらの結合の諸条件の物質的創出である。共産主義は、現存の諸条件を、こうした結合の諸条件にかえる。共産主義がつくりだす仕組みとはまさに、諸個人を離れて自立しているいっさいの仕組みの存在の余地をなくすための真の土台にほかならない。」

すなわち共産主義社会の土台は、結合した諸個人による生産手段の共有にもとづく計画経済であり、それによる自然成長性＝経済法則の廃棄である。それは、本質的には、生産と所有の統一としてある。ただし、これは、共産主義社会の土台として、共産主義に向かう過渡期において実現されることとなる。

そこで次に、資本制以降の社会、すなわち過渡期→共産主義社会といった共産主義革命の過程を追っていくこととする。

(イ) 過渡期＝プロレタリア独裁期

この時期は、階級性と共産制の過渡をなし過渡期世界と世界過渡期に大別される。

①過渡期世界とは、資本制国家とプロ独国家が共に存在している世界であり、一九一七年ロシア革命によるプロ独国家成立をもってはじまった現代のことである。

「ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの闘争は、その内容からではないが、その形式上、最初は民族的である。いずれの国のプロレタリアートも、当然まず自国のブルジョアジーをかたづけなければならない。」（「共産党宣言」）したがって、常に革命は、一国的な革命として実現されるわけだが、内容的には世界革命の一階梯としてふまえられねばならない。ここでは、プロレタリアートによる生産手段の占有と計画経済が基礎となるが、階級は死滅せず、非和解的対立は依然として存在し、ゆえに国家も残り続ける。コミューン（ソヴィエト）を基礎とするプロレタリア独裁国家である。なお、この時期に革命の内容において世界革命の立場を放棄し、一国的経済建設にその政策を従属させ、一国において「社会主義」を宣言しているのが、スターリン主義である。

②世界過渡期とは、全世界的にブルジョア国家が打倒され、すべてがプロ独国家へと置き代えられた世界的プロ独期から、全世界が単一の国家へと統一され、国家・階級が死滅する世界プロ独期を含み、全世界的に生産手段の、プロレタリアートによる占有が完成し、生産と所有との統一がなされる時期である。これらの時期は、ブルジョア国家は存在しないが、ブルジョアジーは存在しつつ、これが次第に解体され、消滅していく過程、すなわち階級と国家が死滅し、「人類の前史」の終結する世界史的段階としてある。

(ロ) 共産主義社会

世界プロ独期において階級と国家が死滅した後、到来するのが共産主義社会であり、それは、共産主義社会の第一段階＝世界社会主義と、共産主義社会の第二段階＝世界共産主義に大別される。

①階級の死滅にともない「階級的ソヴィエト国家は社会主義経済が

組織されるに従い、ますます生産と分配の管理機構、文化と運営の組織に解体する」（トロツキー）のであり、世界社会主義とは国家が完全に死滅し、それが「生産と分配の管理機構、文化と運営の組織」である共同体統制機関へと止揚された時期をさす。この時期には、貨幣は死滅し、等量労働交換にもとづく労働証書制が採用されているわけだが、等量労働交換の基礎としての「抽象的人間労働」の概念は残り、分配のブルジョア的権利はまだ残存する。「能力に応じて働き、能力に応じて取る」社会である。

②世界社会主義における巨大な生産力の発展にもとづき、社会的労働日が圧倒的に短縮し、そのことによって、「抽象的人間労働」の概念は死滅し、労働証書制が廃止される。労働の概念が、芸術や技術やその他一切の人間的活動を包括したものとして「自己目的としての労働」（「資本論」）が開始される。ここに世界共産主義は到来するのである。この時期には、一切のブルジョア的権利は死滅し、精神的労働と肉体的労働の対立も止揚される。「能力に応じて働き、必要に応じて取る」、「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件となるような一つの共同社会」の出発である。

以下次号

韓国学生運動史

——韓国学生運動の革命的戦闘精神をわがものとするために——

高杉建作

はじめに

現在、海をへだてた韓国の地で、われわれの想像を絶するすさまじい闘いが展開されている。

とりわけ五月に湧きおこった全土での蜂起、なかんずく光州市民三〇万による武装蜂起は、われわれ一人ひとりの心を強く深くゆり動かし、われわれに、新たなる闘いの決意を与えてくれた。

戒厳軍の大虐殺に抗して闘う光州市の模様を、朝鮮大学民主化闘争委員会は次のように伝えている。

ああ！　民族史の大悲劇よ！

天はどうしてこんなにも無情なのであろうか。

神聖な国土防衛の義務を国民からゆだねられた軍人が、第二の居昌良民虐殺事件を行なっている。これが、全国民が胸をたたいて慟哭する悲劇でなくてなんであろう。五月十七日の夜中を期して全斗煥とその一派は既存の非常戒厳令をさらに強化し、自分の意にさからう全ての政治家、民主市民たちを逮捕、拘束することによって、わが国の民衆が期待していた民主主義に対する一縷の希望さえも抹殺してしまった。

これに憤激した全羅南道光州の全南大学、朝鮮大学をはじめとする、各単科大学と一部の高校生、民主市民たちの平和的デモに対して三万余名の戦闘警察を動員し、市民たちの前後を包囲し、ペッパーフォッグ（こしょう弾）を撃ちながら包囲網をせばめて退路を断ち、ソウルから急派された三千余名の空挺部隊ブラックベレーたちは、銃剣をふりかざして、狂った処刑人みたいにあたかもカボチャを刺すように手あたりしだいに刺し、血が河のごとく流れる死体を軍のトラックに投げ込んでいった。それでも足りず

に逃げまどう市民たちと幼い女学生たちを、校門さえをも突き破って襲い、市民たちが見ている前で銃剣で切りきざんだ。

このような蛮行に全市民たちは憤激し抵抗するにいたった。しかし、素手の市民たちはかえって銃剣に倒れてしまい、孫のような女学生が血を流して死んでいくのを見て、空挺部隊のエリをつかんだ七〇才の老婆は、かえって銃剣で刺し殺されてしまった。

男子学生たちに石を運んだ女学生たちは、真昼間、市民たちが見ている前で銃剣で切りきざまれ、血を見て叫ぶ市民たちに向かって空挺部隊は、血のついた銃剣をふりまわして殺すぞと叫んだ。女学生たちの服はズタズタに破られ、素裸にされたまま、血を流しながらトラックに乗せられて運び去られた。

いまや、市民の抵抗に当惑した空挺部隊ブラックベレーたちは、通りかかる市内バスや乗用車までも止めて、若者たちを手あたり次第に軍靴で踏みにじり不具にして連行していった。市外バスターミナルでは、このような蛮行に抵抗する市民たちとの戦いの中で、空挺部隊の銃剣に斬り殺された若者たちの死体が待ち合い室に並べられ、まだ片付けられなかった死体は、夜遅くまで道ばたにそのまま放置されていた。その上、生きのびた青年たちはじゅずつなぎにされ、道ばたに死体のように並らばされていた。

この時の空挺部隊ブラックベレーたちのスローガンは、「若い奴らは全部殺してしまえ」であり、全斗煥の親衛隊である空挺ブラックベレーによって無惨にも殺りくされた光州市民の悲惨さは筆舌につくしがたく、目をおおうばかりである。年のいった大人たちは、異口同音に「六・二五の時の人民軍もこれほどには残忍ではなかった」と痛嘆していた。

いま、光州には、若いという理由だけで罪となり、命を失うか、不具者にならなければならない運命にさらされている。

〝光州市民の七〇%は殺してもよい〟〝犬を何匹殺したのか?〟、このような言葉が空挺ブラックベレーたちの間でスローガンのように交されている。

さらに怒りを禁じえないのは、このような殺りく作戦の前に、警察幹部たちの家族はみな安全地帯に避難したという事実である。のみならず、血を流す女学生たちと死体を市民たちが病院に運んで応急措置をほどこすと、空挺部隊は病院にまで押し入って、看護婦を殴打し、器物を破壊して治療さえも受けられないようにした。

ベトナム戦争において良民を虐殺した蛮行の実例を、こんな風に同じ兄弟たちに対して示すことができるというのか!

世界の歴史上においても見ることができない蛮行に憤激した光州の愛国市民たちは、重武装した空挺部隊に対して素手で抵抗して、ついにはこのような事態を目撃しながらもあい変わらず虚偽の報道をしている言論に対する報復として文化放送を焼き打ちし、何ヶ所かの派出所と軍用トラック、ペッパーフォッグ車を焼き打ちするにいたった。共用のバスターミナルにおいては、市民が火炎ビンで軍と対決し、火の海となった。

空挺部隊が犯した蛮行にくらべたら何でもないこのような消極的な抵抗に、全斗煥はかえって市民たちの破壊行為の末にこのような事態が発生したかのような虚偽報道をしている。

二十日の夜を契機として全羅南道圏内の全ての通信を遮断し、最後の殺りく作戦に突入しており、いまや、高校生たちにまでは いつくばるようになるほどなぐりつけ、市内は慟哭の声で満ちあふれている。

このような全斗煥の特別命令殺りく作戦で犠牲となった死亡者の数は二百余名、負傷者は一千余名を数える。しかし、このような惨状を報道すべき責任のある言論は、十八日から二十一日まで悪夢の五日間、事実の報道は一言半句も探すことができず、全斗

煥が作成した原稿をオウムのようにくりかえしながら、光州事態は一部の外部不純勢力の策動であるとばかり報道している。

ああ! 目の前がまっくらとなり、胸がはりさかれるようで、これ以上ペンを書きすすめることはできない!

ああ! しかし、いまや独裁の鎖を断ち切って抵抗の血の色で染まった光州の空に、全国民が涙と怒りでともに参加し決起している。

全斗煥が二十一日に発表した光州事態に関する内容の幾つかの証言を書いてみると、流言蜚語という言葉に覆いかくした事実は、①四〇名死亡云々という部分に対しては、疑う余地のない事実であり、空挺部隊の銃剣によって白昼下に血を流しながら死んでいった。②女学生云々といった部分は、光州駅前の噴水台に女学生を素裸にしたまま立たせ、銃剣で乳房をえぐりとって殺したのである。

現在の状況は、全光州市民の蜂起で空挺部隊は追い出され、光州市内の全官公署が火に包まれており、全ての交通、通信はとだえ、軍隊の進駐をふせぐため、市民たちが松汀里の線路を掘り返してしまった。

全市民たちが叫ぶスローガンは〝死のう!〟〝殺してくれ!〟である。

釜山、馬山事態の時には、全羅道出身の軍人たちを投入し、今回の光州殺りく作戦には慶尚道出身の空挺隊を投入させて地域感情を誘発させ、残忍な行動をとらせることによって、その目論みを満たそうとする全斗煥一派の反民族的蛮行を、全国民はそのまま黙認してはならない。

狂犬全斗煥一派を追い出すことができなければ、われわれが子孫に残す遺産はかぎりない抑圧と搾取のみであることを肝に銘じ、われわれみなが闘争の一線に立ちあがって、愛国歌を声の限りに歌いながら前進しよう。

大韓民国万才!

民主主義万才!

以上の信じられないような惨状については、八〇万光州市民がその証人である。光州市民は、最後のひとりまで闘うであろう。

一九八〇年　五月二十二日

朝鮮大学校民主闘争委員会

すべての同志諸君、全斗煥の虐殺行為に激怒し、握りしめた拳をブルブルとふるわせているわが学友諸君。

本年四月、われわれが日本学生運動の革命的中核として、社会主義学生同盟の再生をなさんと決意した時、われわれのスローガンは「韓国学生決起に続け!」であり、われわれは、ひとりひとりが韓国学生のごとく全人民の最先頭に立ち、闘いの中で生きかつ死んでいける主体への飛躍を心に誓ったのであった。

そしてわれわれが六月社学同再建にむけて奮闘している最中、われわれがその主体に一歩でも二歩でもにじりよらんとしてきた韓国の学生、市民は、あの大闘争を闘いぬいた。

それこそは、まさに社学同の再建にむかうわれわれにとって、他のなにものもおよぶことのできない感動のメッセージであり、社学同の進むべき方向を、鮮血の赤き輝きをもってさししめした、力強いアピールであった。

したがってわれわれは、断じて韓国民衆の流した血にそむくことはできない。かならずやわれわれ自身が韓国学生のごとき闘いを実現していかねばならない。まさに一人ひとりが光州蜂起に比する闘いをにないうる兵士へと自己飛躍し、全人民の最先頭で、常に真紅の社学同旗をうちふり続けることを、追求するのでなければならないのだ。そしてそのためにもわれわれは、韓国学生の闘いを歴史的

にとらえかえすことによって、日帝百年の侵略に抗して闘いつづけてきた韓国学生の闘いに学び、その中に脈々と波うつ革命精神を主体化していこうではないか。

韓国民衆決起に応える日本学生運動の大爆発にむけ、韓国学生運動の革命的伝統を己がものとせよ！

Ⅰ　日帝の植民地支配に抗して

(1)　歴史的な歩みをはじめた朝鮮学生運動

一八七六年二月二十七日、「江華島条約」が強引に結ばれて以後、朝鮮人民は日本の帝国主義的侵略によって民族の尊厳をじゅうりんされ、長い苦渋の日々を歩みはじめた。

こうした中で一八九〇年代、近代的教育の発展とともに、抗日民族意識に根ざした学生運動が開始された。とりわけ一八九四年におこった甲午農民戦争は、日清の武力弾圧によって敗北したものの、後の民族解放闘争の支えとなり、次々と抗日民族学校が設立された。

一九〇四年、清国および帝政ロシアをやぶった日帝は、朝鮮の植民地化を固めるべく「日韓議定書」を朝鮮につきつけ、翌一九〇五年、「乙巳保護条約」によって朝鮮を半植民地化してしまった。

これに対して朝鮮人民は、壮絶な抗日義兵闘争―パルチザン戦を展開することで応えたが、恐怖を強めた日帝は圧倒的武力の投入をもってこの闘いを圧殺、一九〇六～一一年までに一万八千名の義兵を虐殺するなどの弾圧がなされた。だがしかしそれでも安心することのできない日帝は、民族意識そのものの存在に恐れをなし、教育の破壊を画策していった。

一九〇八年、日帝は掌握した教育権をたてに「私立学校令」を発布、五千校あった私学を一九一九年には四三〇校まで激減させ、また官学には一都一校主義を適用して朝鮮人教育の根底的破壊を進行させた。さらに、一九一〇年、「日韓併合条約」の締結と朝鮮総督府の発足により、朝鮮の地球上よりの抹殺がなされるや、翌一九一一年、「朝鮮教育令」の発令によって「皇国臣民化教育」が開始される。この同化教育は事実上の朝鮮文化の撲滅であり、これによって日帝は朝鮮人民に奴隷の道を強いんとしたのである。

こうした弾圧を背景に、日帝はより一層の帝国主義的侵略を推進する。とりわけ当時の朝鮮人民の大多数をしめていた農民から、東洋拓植株式会社を中心として次々と土地を強奪し、また「統治」の方法も、後に「武断政治」といわれたごとく軍隊と憲兵、警察中心であり、朝鮮人民に対するムチ打ち刑や、無制限の拷問などによる恐怖政治が貫徹された。

こうした中で、朝鮮人学生は、国を奪い、父母を虐殺し、財貨を奪い去った日帝への忠誠を強いる同化教育をきっぱりと拒否し、抗日学生運動を組織せんとする。しかし前述のごとく教育令によって高等教育機関を奪われ、学生そのものが激減する中では、有効な闘いが組めようはずはなく、闘いの中心は、高等教育を求めて海外へ留学していった学生、わけても在日留学生の手に移っていった。

一九〇五年を前後して日本留学を開始した学生達は、もともと地主や買弁ブルジョアジー、高級官僚の子弟であったが、日本の地でさまざまな迫害を受けることによって、次第に民族的自覚を強めていった。また一方で朝鮮には存在しなかった社会主義の影響を受けた彼らは、のちの抗日学生運動の重要な指導部として育っていったのである。

とりわけ東京における留学生達は、日帝の弾圧をかいくぐって活発な活動を展開し、一九一二年十月、「在東京朝鮮人留学生学友会」を結成、会報「学之光」を発刊し、抗日意識の発展につとめた。彼らは「われわれが日帝に報復するのは天から授かった権利だ」「われわれはペンにかえて退敵の剣を携え帰郷せねばならない」などという意識を深めると共に、「そもそもわれわれは同胞が血の苦しみの中で働いているが故にこそ、こうして留学できたのではないのか」と自己を痛烈に問いただし、祖国の解放に身命を捧げていくことを、むしろ自らの責務としてとらえていったのである。

このように自己を人民大衆の子弟としてとらえる中で、天から与えられた若さという特権を動員しきり、常に闘いの最先端をになわんとする思想性は、後の朝鮮学生運動を大きく規定するものとなっていく。

(2)　東京二・八宣言から三・一独立決起へ

留学生達が東京を中心に、着々と祖国解放の闘いを準備している最中の一九一七年、ロシアで労農学の手による革命が勃発した。

帝国主義間戦争の末期におこったこの革命が被抑圧民族人民の間にまたたくまに波及し、今や「帝国主義に鉄槌を、侵略者に死を！」という叫びが世界中をおおっていた。無論在日朝鮮留学生達がその叫びを発した一員であったことは言うまでもない。彼らは「世界思潮に従って朝鮮民族は今こそ独立せねばならない」「青年学生らが先頭に立って闘いぬかねばならない」と檄を発し、一大決起をなすことを決意したのである。

一九一九年、留学生達はソウルの学生達と連絡をとり、三月一日に独立宣言と大デモンストレーションを敢行することを決定、さらに二月八日に神田のＹＭＣＡ会館に六〇〇余名が結集して、「朝鮮青年独立団大会」を開催した。集会では次の宣言文が読みあげられた。

二・八独立宣言書（一九一九・二・八）

朝鮮独立青年団は、わが二千万民族を代表して、正義と自由のために世界万邦の前に独立を期成せんことを宣言する。（中略）

〔韓日〕合併以来、日本の朝鮮統治政策をみるに、合併時の宣言に反し、わが民族の幸福と利益を無視し、征服者が被征服者にたいする古代の非人道政策を襲用し、わが民族にたいして参政権、集会、結社、言論、出版等の自由を許さず、はなはだしきにいたっては信教の自由を奪い、企業の自由さえ拘束している。行政、司法、警察等の諸機関は朝鮮民族の私権までも侵害し、公私においてわれわれと日本人の間に優劣の差別を設け、わが民族にたいしては日本人に比して劣等な教育を実施し、わが民族をして永遠に日本人の使役者にならしめようとしている。〔朝鮮〕歴史を改ざんして、わが民族の神聖な歴史的伝統と威厳を破壊・凌辱している。少数の官吏を除くほかは、政府の諸機関と交通・通信・兵備等の諸機関の全部あるいは大部分に日本人を使用し、わが民族をして永遠に国家生活の知能と経験をうる機会をえさせないようにした。

われわれは、決してこのような武断専制・不正・不公平等の政治下においては、生存と発展を享有することは不可能であると信ずるものである。元来、人口過剰の朝鮮に無限に移民を奨励・補助して土着のわが民族をして海外への流離を余儀なくせしめ、政府の諸機関はもちろん、私設の諸機関にまでも日本人を使用し、一方的に朝鮮の富を日本に流出せしめ、商工業においても日本人にたいしてのみ特殊の便益を与えて、わが民族をして産業的勃興の機会を失わしめた。

このように、いかなる方面からみても、わが民族と日本との利害は相互に背馳し、その害を受けるのはわが民族である。それゆえ、わが民族の生存の権利のために独立を主張するものである。

最後に、東洋平和の見地からみるに、脅威であったロシアはす

でに軍国主義的野望を放棄し、正義と自由を基礎とする新国家の建設に従事中であり、中華民国もまたしかりである。また、国際連盟が実現すれば、再び軍国主義的侵略を敢行する強国はなくなるだろう。

したがって、韓国を合併した最大の理由は消滅したのであるから、朝鮮民族が無数の乱をひき起こすとすれば、日本に合併された韓国は、かえって東洋平和を攪乱する禍根となるであろう。わが民族は、正当な方法によってわが民族の自由を追求するものであるが、もしこれが成功しないならば、わが民族は生存の権利のためにあらゆる自由行動をとり、最後の一人までも自由のために熱血を流さんとするものである。これが、どうして東洋平和の禍根とならないであろうか。わが民族は一兵も持たぬ故、わが民族は兵力をもって日本に抵抗する実力はない。しかし、日本がもしわが民族の正当な要求に応じないならば、わが民族は日本にたいして永遠の血戦を宣言するであろう。

わが民族は、久遠にして高尚な文化をもち、また、半万年にわたる国家生活の経験をもつものである。たとえ、多年の専制政治下の害毒と境遇の不幸がわが民族の今日を招いたとしても、正義と自由を基礎とする民主主義先進国の範にしたがって新国家を建設するならば、建国以来、文化と正義と平和を愛するわが民族は、世界の平和と人類の文化に貢献するところがあることを信ずるものである。

ここに、わが民族は、日本および世界各国がわが民族にたいして民族自決の機会を与えることを要求し、もしそうでなければ、わが民族は生存のために自由な行動をとることによって、独立を期成せんことを宣言するものである。

決議文

一、本団は、韓日合併がわが民族の自由意思によるものではなく、東洋の平和を攪乱する原因となる理由をもって、祖国の独立を主張するものである。

二、本団は、日本の議会および政府にたいして朝鮮民族大会を召集し大会の決議によってわが民族の運命を決定する機会を与えることを要求する。

三、本団は、万国平和会議にたいして民族自決主義をわが民族に適用するよう要請する。

この目的を達成するため、日本に駐在する各国大公使に本団の意思を各当該政府に伝達することを要請すると同時に、委員三人を万国平和会議に派遣する。この委員は、すでに派遣された、わが民族の代表と同一行動をとる。

四、前諸項の目的が失敗するときには、わが民族は、日本にたいして永遠の血戦を宣する。これによって発生する惨禍は、わが民族の責任ではない。

この在日留学生達の決起と独立宣言の精神は、またたくまに朝鮮全土へと響きわたっていった。また留学生の内、日帝の弾圧をまぬがれた多くのものが祖国にかけつけて宣伝、煽動につとめたため、「二・八の学生に続け」という声が日ましに高まり、そしてついに歴史的な三月一日をむかえたのである。

三月一日は、同年一月二十二日に怪死した高宗の国葬日にあたっており、ソウルの街は深い哀しみと日帝に対する憤怒の念を胸につめこんだ参列者の群にあふれていた。

丁度こうした時、ソウル市内に一勢に檄文がはられ、パゴタ公園で独立宣言がなされたのである。その時の情景は次のごとくであったという。

『壇の正面には一〇年間影さえみなかった太極旗がその美しく雄雄しい姿をみせ、ソウル中央の蒼空におだやかな春風をうけ悠々と

はためいていた。この時群衆の脳裡は形容することのできない感激と興奮で満たされていた。たぎる血潮の波は全身にみなぎりあふれ、天をもつく気魄は大地をも呑む勢いであった。ちょうどそのときである。壇上にかけ上がった学生が一枚の紙きれを手にもち、感激にむせぶ興奮した語調で一行一行読んでいった。……夢路のような静かな場内には憤激につつまれた嗚咽の声だけが漸次高くなっていった。読んでいる人の音声もときには句読がよくきこえなかったりした。どこからか「大韓独立万才」の声が万雷のようにきこえてきた。場内は千軍万馬を率いて駆けているようであった。鮮明に印刷した独立宣言書と手提げ形の太極旗があちこちからどっとでてきた。ちょうど雲山会上に天の花がおちてくるようであった。学生たちの帽子は的を射るフットボールのように空中に上った。狂い酔ったような場内の群衆はどうしてよいかわからなかった。はじめは学生だけが集まっていたが、いつのまにかソウル市民、地方民らが足のふみ場もないくらいの群集にふくれ上がった。』

このパゴタ公園でおこなわれた決起は、すぐさま全ソウルへとひろがる。老いも若きも男も女も感動の涙を流しながら「朝鮮独立万才」を叫びつづけ、学生を先頭とする怒濤のごときデモ行進に加わっていった。いたるところでデモ隊と日本警察が衝突し、おびただしい血が流された。だが尊い血が流されれば流されるだけ、朝鮮人民の決起は拡大していく。

闘いはまたたくまに全土に波及し、いたるところで決起がなされ、警察署の焼き打ちや、あるいは日帝軍・警との銃撃戦がなされるなど、文字どおり全人民的蜂起へと発展した。三・一～五月末までも参加人員二百万人、展開地域は全朝鮮二一八郡のうち二一一郡というすさまじい激闘がくりひろげられたのである。

だがしかし、こうした全朝鮮人民が参加した三・一蜂起に対し、日帝は血も凍るような大弾圧をもって応えた。前述の期間だけでも七五〇九名が虐殺され、重軽傷者一万五千九六一名、検挙投獄された者は四万六千九四八名にも及んでいる。また虐殺の方法も、村に火をかけ、逃げだしてくる者を機関銃で撃ち殺すとか、教会からひっぱりだした者を十字架にしばりつけ、「お前らはキリスト教徒だから十字架で死ぬのは本望だろう」と銃剣で突き殺していくなどの許すまじき蛮行が行なわれた。

この一連の闘いに学生は総数二万余名中、一万名以上が参加し、全土のいたるところで革命的導火線の役割をはたすとともに、常に闘いの先頭にたって人民の決起を領導した。また在日留学生も続々と帰郷し、全土に散らばって闘いの前進に献身した。これに恐怖した日帝は、同年十二月迄に参加人員の四割近くにも及ぶ三千七一二名を検挙していった。しかし、一度たち上がった学生達の熱情はけっしてとだえることなく、更なる闘いへと胎動が開始される。それは学園から日帝の手先を追いだすべく闘われたストライキ闘争の激発という形でわきおこっていった。というのは、三・一闘争がおこるまで、学生の多くは祖国を奪われたことによって自暴自棄となり、向学熱も低かった。また一方で「皇国臣民化教育」を拒否する心が学生を学園から遠ざけていたのである。しかし三・一後は「民族解放の為に学ぶのだ」という意識が芽生え、そうした熱気の中で日帝の手先に対するストライキがたたきつけられていったのだ。

このように徹底して闘いぬかれた三・一蜂起は、朝鮮人民、なかんずく青年学生層の民族意識を大いに昂揚させるとともに、蜂起そのものの目的はとげられずとも、日帝の強権的支配を一定緩和させるという勝利をひきずり出した。またこの蜂起の血の教訓により、学生達は「学生とは学問するだけの存在ではなく民族の運命とともに生き、人民とともに闘って解放を克ちとる先駆的存在である」という自覚を深め、更なる闘いを展開していくことになったのである。

(3) 六・一〇万才運動と学生

三・一蜂起によって大打撃をこうむった日帝は、それまでの「武断政治」を排し、「文化政治」へとその重点を移した。これによって確かに朝鮮人の言論、出版、集会、結社の自由は若干回復したが、しかしこの「文化政治」はより巧妙な形で支配を貫徹する狡猾な攻撃だったのである。すなわちそれまで弾圧の一手であった民族改良主義者、民族ブルジョアジーを、一転して懐柔、吸集しはじめ、これによってそれまで闘いの戦列に加わっていた多くの者が日帝に傾斜しはじめたのである。

これをみた朝鮮の青年、学生達は、「巨大な帝国主義と闘う為には、植民地、半植民地という被抑圧民族の側に立つのみでなく、被抑圧階級である国際プロレタリアートとの国際的連帯をなさねばならない」といった意識に目覚め、やがて社会主義、共産主義への傾斜を強めていった。こうした意識をうけて、一九二五年四月十七日、朝鮮共産党が結成され、翌十八日高麗共産青年同盟が結成される。この組織はどちらも完全な地下組織であったが、これ以後朝鮮の学生運動はこれら左翼の指導のもとに展開されていくのである。

当時の学生達の初歩的闘争手段はストライキであった。植民地教育の主軸として朝鮮人蔑視を続ける日本人教師の多くを追放し、また日本語教科書を破ったり、日本語による学習を拒否したり、朝鮮語、朝鮮史の教授を要求したり、あるいはまた日本の祝日式典出席を拒否するなどといった闘いを展開したのである。一九二一～二九年のストライキ総数は五〇二件にのぼり、とりわけ二十七～二十九年では二三三件の闘争が組まれた。これに対し日帝は徹底した教育破壊と「皇国臣民化教育」の強化を続けたが、その内容を大まかにあげれば次の五点があげられるだろう。

①日本語の強制と天皇制思想の注入、②朝鮮人を徹底的に圧迫、③同化教育を基礎に、朝鮮語、朝鮮史の授業を禁止、④教育からの朝鮮人の追放(初等教育の就学率は一三・四%であった)、⑤「国粋主義と日本精神を注入し皇国臣民を練成する」ための「京城帝国大学」の設立、等々である。

かかる中でますます影響力を強めた左翼は一九二五年十一月、一〇五名の一勢検挙によって大打撃をうけた。しかしながら満身創痍ではあっても大衆闘争を領導できるのは、唯一朝鮮共産党であり、高麗共青同であった。一九二六年六月十日、李朝最後の国王、純宗の葬儀を利用して、両者は反日蜂起を計画したのである。六月十日、高麗共青同により「二千万同胞よ！ 仇敵を追い出せ！ 血の代価は自由のみである」という檄文が発せられ、ソウルの街では六万人民が列をなして「朝鮮独立万才」を叫びながらデモ行進を開始する。これに結集した学生二万四千は、口々に「朝鮮独立万才」と叫び、「朝鮮民衆よ、われらの怨讐は帝国主義日本だ！ 二千万同胞よ！ 死を決して闘おう！ 万才、万才、朝鮮独立万才！」といった檄文、ビラを撒布した。これに対し日帝は数千名の武装警官と軍隊をくり出し、弾圧を開始したため、ソウルの街はたちまち修羅場と化した。だが闘いはすぐさま全国へ波及する。平壌で、あるいは大邱で、「朝鮮独立万才」の叫びがあがり、各都市で大規模な闘いが行なわれた。しかしながらこの闘いで五千名が検挙され(内学生二千名)、朝鮮共産党、高麗共青同の多くの者が投獄されて、六・一〇万才決起は敗北に帰していった。しかしこの闘いは、三・一蜂起の多くの指導者が脱落したのち、共産主義者の指導力が圧倒的なものになりつつあるということをさし示したのであり、とりわけ二万四千の大決起をなしていった学生の闘いは、そのまま光州の闘いへと受けつがれていったのである。

(4) 光州学生決起

一九二〇年代後半期に入り、中国への侵略をますます露骨化していった日帝は、朝鮮をその「前線基地」、「兵站基地」として位置付け、支配の強化を狙ってますます奴隷化教育を推進した。しかし六・一〇をうけて学生の志気は大いに高まり、また第三次共産党が結成されて闘いは進展していく。

この様な時の一九二九年十一月三日、全羅南道光州市で「光州学生決起」が発生した。事の発端は十月三十日、羅州駅頭でおこった。この日、日本人学生が「鮮人は野蛮だ」などと言いながら朝鮮人女学生を卑わいにからかい、リボンを引っぱるなどした。これにみかねて叱責した朝鮮人学生に日本人学生が「鮮人のくせに何を言うか」と居直ったため、双方入りみだれての乱闘がはじまった。その場は何とかおさまったが、今度は十一月二日に光州駅で日本人学生五〇名がバットを振りかざし、教師に激励されて朝鮮人に襲いかかるという事件がおこった。さらに三日には、日本人学生が登校中の朝鮮人学生に対し、隠し持った短刀で手あたり次第に切りつけるという蛮行がおこなわれたのである。この報をうけるや両校生が一斉にかけつけ、両校の男女が東西におしまわるうちに、警官隊、および日本人青年団が出動し一方的に朝鮮人学生を弾圧していった。さらに翌日、朝鮮人学生二〇名、日本人学生七名が検挙されたが、警察は朝鮮人学生を苛酷に拷問し、背後関係をデッチ上げて、六日一七〇名を追加逮捕したのである。

この報は一挙に光州市内の全朝鮮人に知れわたった。日帝は三日事件が発生するや、ソウルから二個連隊の軍隊を派遣し、続々朝鮮人学生を逮捕していったが、光州の学生達の怒りは十二日、ついに大爆発する。

この日、早朝より市内の全朝鮮人学生が決起し、「朝鮮民衆よ決起せよ！」「青年大衆よ死をのりこえて闘おう！」「検挙された学生たちを奪還しよう！」「朝鮮人本位の教育を確立せよ！」「勇敢に闘う学生大衆万才！」等の檄文を散布しつつ、「朝鮮独立万才！」を叫んで堂々とデモ行進をはじめた。これに数万の市民が合流する。日帝は軍警を総動員してデモを襲い、学生四〇〇名を検挙するとともに、学校を無期休学にし、報道管制をしいた。しかし闘いは次から次へと口コミで伝わり、光州に近い地方からデモの波がひろがっていく。さらにそれはたちまちソウルに波及し、十二月三日、京城帝大の学生が決起を開始、五日にはソウル学生の大半が、ストライキやデモに参加していった。

闘いはますますひろがっていく。九日には儆新(キョンシン)学校生五〇〇名が「朝鮮独立万才！」を叫び、校門から飛びだしてデモを開始、これに警官隊の阻止線を突破した普成高普生千七〇〇名が合流して怒濤のごとき行進をくりひろげ、警官隊と激突して九五〇名の検挙者をだした。また同日養正(ヤンジョン)高普生がストライキに突入、六名が検挙された。さらに十五日、儆新学校、梨花(イファ)女高、淑明(スクミョン)女高等十五校が一斉決起し、「朝鮮独立万才！」を叫んでデモ行進を貫徹、その際多くの女子学生は慟哭しながら闘いぬいたのである。これに対して警官隊が襲いかかり四〇〇名を検挙、二十一日各校に休校が宣せられ、二十六日各校長が召集されて学生達に対する厳罰が迫られたが、校長達はこれを拒否した。

「ソウル学生が起った」という報は全国に伝わり、各地で普通学校生(小学生)までも参加してデモがうちぬかれた。

これをうけてソウルの学生達は翌年一月再び闘いを組織し、十五日普成学校生二〇〇余名、梨花女高生四〇〇名、培材高普生数百が決起したが、それぞれ一五名、五五名、二〇〇名という検挙者を出した。また同日警官隊の「出てくれば撃つ」というきびしい弾圧のため街頭にとびだせなかった同徳(ドントク)女高生、培花(ペファ)女

高生、貞信女高生(チョンシン)ら七校三六〇〇名は校内で集会を持ち、「朝鮮独立万才！」を叫びながら慟哭した。この日ソウル各学校の近辺を通った人の耳に、学生達の慟哭の声がきこえてこなかった所は皆無であったという。

さてかかる大闘争へと発展した「光州学生蜂起」は、総督府が発表しただけでも学校数一四九校、参加学生数五万四千名、検挙された者千六四二名、退停学処分をうけた者二千九一二名（無論実際ははるかにこれらの数値を上回っていただろうが）という激烈な様相を呈したが、この闘いはそれまでの三・一、六・一〇とはうって変った徹底した実力闘争として展開されたことをおさえておかなければならない。それは明らかに蓄積された抗日意識の大爆発であったとともに、「帝国主義打倒、プロレタリア革命万才」(ソウルでまかれたビラより）という価値感にうらづけられたものであったのである。光州学生決起のこの偉大な歴史は、その後の学生運動に大きな光を放つものとなった。これが更に発展して開花されたのが、四・一九革命であり、五一年を経て再び光州でおこったあの三〇万市民による武装蜂起であることはいうまでもないことである。

(5) 暗黒から解放へ

光州学生決起以前に民族解放闘争の中心勢力は、相次ぐ弾圧によって潰滅的な打撃をうけていた。さらに朝鮮革命に理解が欠落していたコミンテルンによる十二月テーゼ(一九二八年)は共産党解体を事実上促進させ、以後左翼の力はおとろえていった。また学生に対する弾圧も、日帝の中国侵略の進行とともに一層激化し、ストライキ闘争すら容易ではなくなっていった。

ここにいたって、学生運動の主力は再び在日留学生の手にうつることになる。在日留学生の数は、一九二三年、関東大震災にともなう一千名の学生の虐殺によって、一時期激減していたが、一九二九年九月末、四千四三三名、一九三七年十二月、九千九一四名と再び増加し、また光州決起当時に退学した者の多くが留学していったこともあって、その闘いは光州を受けついで活発化した。この闘いもやはり左翼によって牽引されたが、コミンテルンの「一国一党主義」にもとづく指令で在日共産主義者の任務が日本革命となり、在日朝鮮人運動は日本人運動に埋没され、民族解放の闘いとしては大きな損失をまぬがれなかった。しかし一方で留学生達は、それまでの反日一辺倒の姿勢を階級的にとらえかえし、むしろ進んで日本の先進的人民との団結をはかっていった。すなわち「民族排外主義に陥ってはならない、誰が敵で、誰が友であるかを見分けねばならない」と考えることにより、仇敵日本人の中から、積極的に同志をさがしていったのである。（しかしながら当時の日本の左翼には、これに応える思想性が存在していなかったことを付記しておく)。

しかし、かかる闘いもファシズムの嵐の中で孤立化し、東大、早大、中大、法大、明大等で活動していた多くの者がデッチ上げによって検挙された。また左翼の後退とともに買弁ブルジョアジーの子弟によるブルジョア民主主義者が留学生のヘゲモニーを握り、闘いは沈静化せざるをえなかった。また本国においても、一九三八年三月五日、第三次朝鮮教育令が発令されてついに学園内で朝鮮語を使うことすら禁じられてしまったのである。その後日帝は、同年朝鮮人に対する「陸軍特別志願兵制」を実施、四三年「学徒兵制」、「海軍特別志願制」、四四年「義務徴兵制」、四五年「国民義勇制」とあいついで朝鮮の青年学生を侵略戦争の弾よけとしてかりだしていった。これに対して学徒兵役拒否闘争が組まれたが、拒否者はすべて軍事工場で奴隷労働を強いられたのである。

しかしながら、そうした悪虐の限りを尽した日帝も、中国人民らの鉄槌によってついに悪運つき、一九四五年八月、朝鮮に解放の朝

がおとずれたのであった。

II 解放後のたたかい

(1) アメリカ式「皇民化教育」粉砕の闘い

一九四五年八月十五日、日本の敗戦によって朝鮮は解放された。解放当時、朝鮮における政治勢力は共産主義者のみとなっていた。共産主義者のみが日帝に屈せず闘ったため、人民の圧倒的支持があったのである。したがって九月六日樹立された朝鮮人民共和国政府は、全人民の意志にもとづくものであった。しかしながら九月八日南朝鮮(以後韓国と記す)にアメリカ軍が上陸するや、事態は一変したのである。

米帝は上陸するやいなや左翼勢力に敵対し、韓国に共産主義政権がうちたてられるのを恐れて、軍政府を韓国における唯一の政府としてしまったのである。さらに日帝統治時代の地主、買弁ブルジョアジー、高級官僚等の親日派をそのまま親米派としてだきこみ、支配の強化をいそいだ。それと同時に極右民族主義者達による政党、社会団体が続出し、米帝への迎合を深めていった。この一連の米帝の動きに対し、それまでアメリカ軍＝解放軍と信じていた学生達は大きなショックを受け、左翼学生運動を展開させていくことになるのである。

かかる運動を牽引したのは解放後結成された朝鮮共産党及び朝鮮共青同であった。共青同はのちに、朝鮮民主主義青年同盟に改編され、その指導下に朝鮮民主学生同盟が結成されて学生運動の主力となった。一方右翼学生はもっぱら、米帝とそのカイライの手先として動いていたが、全国学生総同盟を結成し多くの左翼学生に対する白色テロを激化させた。また、米帝も学生運動圧殺にのりだし、民青を解散させたが、民青は朝鮮民主愛国青年同盟として再組織され学生運動の主力としての位置を保ったのである。

これに対して米帝の取った政策は、基本的には日帝の取ったそれと等しく「皇国化教育」のかわりに「ヤンキー化教育」を行なうことであった。一九四六年三月、続々とつくられつつある民族教育機関を破壊すべく「無許可学校閉鎖令」を出し、さらに六月十九日、「国立ソウル総合大学案」(国大案）なるものを発表した。これは国立ソウル大学の名の下に、京城大学をはじめ、日帝時代の官・公立専門校を統合し、アメリカ人が学校運営権を握る官制理事会の権限下に全ての学校行政を占領政策に奉仕させようとするものであり、学校から民族意識を削除し、学問の自由や学園の自治を破壊するものであった。これに対してソウル大生のストライキを皮切りに各大学がストライキに突入、右翼による闘争破壊にもめげず、参加学生数四万五千をもって闘いぬかれ、学校運営に民間理事と朝鮮人総長の任命を承認させるという一定の勝利をおさめたのである。更に学生達は、当時ゼネスト等をもって積極的闘いを展開していた労働者の闘いを支援して闘争を組み、一九四六年九月二十四日の三〇万労働者の闘いには二〇校一万六千名が決起した。なかでも、これをうけて闘われた大邱人民抗争(十月二日)は実力闘争として学生を最先頭に闘われたが、この時米帝の軍・警と右翼によって三〇〇余名が殺害され、行方不明三千六〇〇名、負傷者二万六千名、検挙投獄された者は一万五千名にものぼったのであった。

一九四七年十一月、米帝は国連を通じて自らの朝鮮支配に都合のよい決議をあげさせ、全人民の反対にもかかわらず韓国単独選挙を実施した。これによって、一九四八年八月十五日、「大韓民国」政府が李承晩(イ・スンマン)を中心としてつくられたのである。これに

対し学生達は、各地で英雄的なパルチザン闘争へ突入し、果敢な闘いが展開されたが、それとともに左翼組織は地下化していったのであった。

(2) 李承晩独裁下で

李承晩政権は成立直後、左翼に対する全面潰滅方針をうちたて弾圧にのりだした。一九四八年九月二十八日、「大統領令」第八六号を公布して各学園に「学徒護国団」の結成を強制した。これは学生をファッショ的に統合するための組織であったが、それとともに学生と教職員は、一切政治運動をしてはならないとして、学生運動の圧殺を画策したのである。

一九五〇年六月二十五日、朝鮮戦争が勃発し、朝鮮人民軍は二十八日ソウルを解放した。この時、李承晩、右翼らはソウルから逃げだしたが、これによって多くの拘禁者が釈放され地下化していた左翼学生運動も地上にあらわれるようになった。そして七月三日、ソウルに集まった学生一万六千は「前線を支持しよう」のプラカードをかかげて前進し、同日光化門通りで行なわれた「愛国学生決起大会」では、①ソウル市内の青年はパルチザン闘争に参加しよう！ ②全国の学生は人民軍を積極的に支持し学生義勇隊を組織しよう！ ③義勇軍に参加して前線に出動しよう！ といった事を決議し、その場で男子学生三二五名、女子学生六八名による学生義勇軍が結成されたのである。これが導火線となって志願者は爆発的に増え、一般青年も含めればその総数はなんと四〇万名にまでふくれあがっていった。

これに対し朝鮮戦争の開始とともにソウルから追われ、再び戻り、また追われるといったことをくり返していた李承晩一派は、強権政治を一層強化し全ての学校を兵営化してしまった。また教育を「反共・国防教育」のみとなし、本来の教育はすでに失われてしまったのである。

一九五二年六月二十五日、独裁の危機に恐怖した李承晩は、非常戒厳令を宣布し、二十六日憲兵・武装警官を動員、国会議事堂を包囲した。そして反対派の国会議員に対し、右翼をつかって暴行・強迫・拉致などをほしいままにしたのである。この「五・二六政治反動」は、学生の李承晩に対する怒りと反対運動を高揚させた。韓国の学生達は、この戦争が北朝鮮からの侵略であり、共産主義は恐しいものだという宣伝にまどわされていたが、この頃から強く懐疑を抱き、「何のために共産主義と闘うのか」「共産主義と闘うのは民主主義を守るためだというが韓国に守るべき民主主義などあるのか」「この戦争は李承晩の独裁維持とアメリカのためのものではないか」として一斉に兵役忌避を行なったのである。

同年七月四日、政治テロルが横行する中で李承晩は、憲法「改正」案を国会で強引に通過させ、十五日には大統領再選就任式を行なった。朝鮮戦争の展望がはっきりしてくるにつれ、学生達の地下反戦運動は沈滞したが、学生達は最大の関心を学園の再建に向け、それとともに独裁者李承晩にピタリと照準をあて、それとの対決を深めていったのである。

一九五四年九月六日、李承晩は、彼に限って終生大統領をつとめるという憲法の改悪を強引になしきった。さらに同年十月十一日、「反共教育要綱」を発して反共教育を一層飛躍させた。また有名無実化しつつあった「学徒護国団」を再度強化し学園を政治的に利用していったのである。

一九五六年五月十五日、正・副大統領選挙が実施された。李承晩は副大統領に李起鵬(親戚にあたる)をたて、あたかも李王朝の復活をめざすがごとく、官権・全権暴力による選挙干渉と不正行為をはたらいたが、それでも李起鵬は野党の張勉に敗れ、自分自身得票率

が減り、しかもライバルの急死？の為いわば不戦勝するというさんたんたる結果に終ったのであった。

そして一九六〇年三月十五日、再び大統領選挙が実施されることになる。これに向けて李承晩は、前年二月の「民主主義の模範を示す為再出馬はしない」といった公約をひるがえし、再出馬を明らかにした。しかも、坂をころげおちるかのごとく得票を失なっている与党の姿と、反戦闘争の高揚に恐怖した李は、この選挙を徹底した暴力の下に干渉し、前代未聞の「選挙劇」を展開したのである。具体的には選挙前にすでに警察によって与党の得票率を八五％と定め、さらに当日は朝から右翼を動員して野党関係・反政府関係の人間を一切入れず、抗議などしようものならたちどころにテロルが加えられるという有り様であった。また有権者を三人組・九人組に編成し、その長に親政府の人間をおいて投票を監視させ、野党系の人間等がまぎれこまないようチェックすらおこなったのである。

これに対しついに学生・市民の怒りが爆発した。なかでも馬山民衆は数千名をなして選挙場へとデモ行進し「この選挙は無効だ」「国会議長李起鵬を殺せ！」と叫んで突き進んでいく。これに対して李承晩は、放水車をくり出し、さらにデモ隊に対し無差別銃撃を始めたのである。この時、幼い学生金朱烈(十六歳)が眼中にガス弾をうち込まれて即死したのをはじめ、死者十数名、負傷者七十余名をだすに至った。これに憤激した学生・市民二万三千名が蜂起して警察署に火を放ったのをはじめ、与党・自由党本部や自由党員宅などを次々と襲撃、破壊するという闘いが貫徹された。そこにおいて示されたものは、長年の独裁に対する怒りであり、その闘いは、四・一九革命の前奏曲として全国各地へと波及していったのである。

(3) 四・一九革命

馬山市民・学生の決起は、李承晩の専制独裁に対する一大決起として発展した。かかる中で四月十一日、三・一五デモで警察に虐殺され死体を川に投げこまれていた幼い学生、金朱烈の無惨な姿が発見された。これを見た馬山市民・学生の憤激は再度爆発し、二万名以上の蜂起へと発展、さらに「金朱烈を殺害した殺人犯は我々の手で処断しよう」という声が全国に広がり、四・一九革命の火蓋がきっておとされたのである。

この闘いの突破口をまず切りひらいたのは、高麗大の学生達であった。彼らは四月十八日、学内で集会をひらき、次のような宣言を発した後、デモ行進にうつった。

「大学は反抗と自由の象徴である。今や、窒息しそうな専制独裁者の最後の悪あがきは、まさに国民全体の生命と自由を脅かしている。それゆえ、歴史の生々しい証言的使命をおびているわれわれ青年学徒としては、これ以上、逆流する血の憤怒を抑えることができないのだ。もし、悪徳と悖倫にみちた今日の濁流の歴史を浄化しえぬとすれば、われわれは、永遠に後世の呪詛を免れられないだろう。

学生が象牙の塔に安住することができずに対社会闘争に参加せざるをえないわれわれは、確かに不幸な世代である。だが、同族が同族の血を吸っている今日の現実をどうして傍観できようか。われわれ青年学徒のみが、真正な民主主義歴史を創造する担い手になれることを肝に銘じて総決起しよう。」

これに対して李承晩政権は、右翼や、暴力団を動員してデモ帰りの高麗大生を襲わせ、学生一名が虐殺されるとともに数十名が重傷を負った。

翌朝、この高麗大生決起と学友の虐殺を知った学生達は「今日こ

そ何かがおこるだろう」と悲壮な覚悟をみなぎらせて学園へ向った。とりわけソウルでは朝の八時〜九時までに各大学のキャンパスに檄文がはられ、学生の総決起がよびかけられた。その内の一つ、ソウル大の宣言文は次のように語っている。

「象牙の真理塔を蹴って街頭に飛び出したわれらは、疾風のような歴史の潮流に自身を参与させることによって、理性と真理そして自由の大学精神を現実の惨たんたる薄土に撒こうとするものである。今日、われらは、自身の知性と良心の厳粛な命令にしたがって、邪悪と残虐の現象を糾弾匡正しようとする。これは、われらの主体的判断と使命感の発露であることを堂々と宣言するものである。

われらの知性は、たんたるこの地の現象が民主主義と自由を偽装した専制主義の極悪な専横に基因していると断定する。おおよそ、民主主義の政治史は自由のための闘争史である。近代民主主義の基幹は自由である。われらの自由を根こそぎ剝奪している現実を、われらは直視する。

今や、最後の自由の戦場に火がつき始めた。当然、われらが持つべき権利を奪還するための自由の闘争は、燎原の火のように燃えさかりつつある。

民衆の公僕であるはずの官僚と警察は、民主主義を偽装した家父長的専制権力の下手人になってしまった。民主主義理念の最低の公理である選挙権さえ、権力の魔手によって壟断されてしまった。言論、出版、集会、結社および思想の自由は、専制権力の悪らつな行為によって、かすかな光さえ消されてしまった。長い漆黒の暗夜のみ連続のみである。

年幼い学生・金朱烈の死をみよ！　それは、仮借なき専制主義専横の赤裸々な裸像以外の何ものでもないのだ。専制権力者は、卑屈にも威嚇と暴力をもって、われらに対処しようとしている。

われらは、百歩譲るにしても、人間として訴えなければならない学窓の良心を感ずるものである。

みよ！　われらは自由の烽火を高くかかげる。暗夜に自由の鐘を鳴らす打手であることを誇りとする。日本帝国主義の鉄槌下で自由を叫びつづけた、われらの父や兄たちと同じように！　進もう！　われらの隊列は、理性と良心と平和、そして自由への熱烈な愛の隊列である。」

午前九時、ソウル文理大の校内を、「ワァ」という喚声とともに大光(テクワン)高校生がすぎさるや、ソウル大生が校門をとびだした。それと同じころ東星(トンソン)高校生一千余名が校舎を後にしてデモにうって出る。九時三十分には、ソウル大師大生一千余名とソウル大商大生二千名が申し合せたように同時に校門を出た。

午前十時、高麗大生四千名が、前日にひきつづきデモに突入。その際前日のデモで負傷した学生三十名がデモの最先頭に立った。

さらに十時二十分、建国(ユングク)大生二千名も楽園洞（ナグオンドン）分校に集結し、デモ敢行を決意、シュプレヒコールとともに鍾路(ジョンノ)方面へ向かった。

十時三十分、ソウル大文理大、法大、美大生たちが国会議事堂前に到着、十時五十分、ソウル大師大、商大、建国大生も到着した。

学生達は一大マラソン競争を展開するかのごとく、すさまじい勢いで警察隊の阻止線をつぎつぎと突破、さらには襲撃してきた警察のトラックを投石で撃退するなどして、続々と議事堂前に集結していったのである。

そしてさらに十一時には東国(トンゴク)大生二千名、成均館（ソンギュンガン）大生三千名がおのおの校門を後にし、十二時、延世(ヨンセ)大生五千名と弘益(ホンイカ)大生千名が新村(シンチョン)ロータリーで合流した。また十二時五十分には中央(チョンアン)大生四千名が阻止せんとする警察を駆足でけちらし、進撃をはじめた。

京畿(キョンギ)大生千名、外国語(ウェグッゴ)大、壇国(ダングク)大、国学(クッハク)大、国民(クンミン)大、徐羅伐(ソラボル)芸大もデモに参加した。ソウル大医大、延世大医大、カトリック医大生は白衣を着てデモに入った。淑明女子大と梨花女子大の一部もデモにとび入りした。

国会議事堂前では、先に到着したソウル大生をはじめ数万の学生が議事堂を包囲して集会を貫徹していた。この時(十一時四十分)ソウル市庁から東国大生が駆け込んできた。議事堂前をしめる学生からドッと拍手がわきおこる。すると東国大生の先頭から、「東国大生は景武台(キョンムデ＝大統領官廷)へいこう」という叫びが上った。「景武台へいこう！」「景武台へいこう！」学生達は続々と東国大生の後につづいた。この時までに学生の隊列に多数の市民が合流し、デモ隊は十万をはるかに上回った。

この事態にあわてふためいた李承晩は韓国全土に非常戒厳令を発布し、さらに全警察力を景武台へと集結させた。また東国大生を最先頭に景武台へ、景武台へと進撃してくるデモ隊に対して武装憲兵二〇〇を投入、無差別の銃撃を開始してついに一名の学生を虐殺した。

「警察がまた人殺しをした！」という叫び声があがり、デモ隊の怒りは頂点に達した。学生達は石ころや棍棒をもって警察隊に突入し、すさまじい実力闘争の火ぶたを切った。これに対し、武装憲兵一〇〇名を乗せたトラック四台がデモ隊の中へと突入し、おびただしい死傷者が出た。ソウル市内はすでに流血の巷と化していた。

デモ隊の学生達は、戦車や電車、消防車を占拠してこれを先頭に進撃を続行した。警察隊の阻止線やバリケードを次々と突破し、いよいよ最後の阻止線へと肉迫する。デモ隊と警察隊の間はわずか十メートルとなった。その時無差別銃撃がはじまり、学生がバタバタと道に倒れては血を流した。一瞬にして学生達の悲鳴と流血にソウルの街は埋められていった。

これに憤激したデモ隊は、警察　をはじめ各官庁を襲撃したが、これに対しても血の弾圧が行われた。李承晩政権はこの日約一八〇名の学生・市民を虐殺し、六二〇〇余名に重軽傷を負わせ、七〇四名を検挙、投獄したのである。

このようにして四・一九の流血闘争は、学生を中心とした全人民的な蜂起として闘いぬかれた。ここに示された学生のパワーこそ抗日学生運動の歴史的伝統と、米帝占領下の反帝・反封建民主化運動の蓄積によって培われた不屈の革命精神であったことはいうまでもない。

しかし、四・二〇以降、闘いの熱は一挙に静まり、その革命的熱風は哀しみと涙に包まれていくかの様相を呈した。四・一九蜂起に肝をつぶした李承晩一派は、これで自己の延命ができるとして胸をなでおろし、一週間がすぎるうちには非常戒厳令も緩和されていった。だがしかし、学生達の流した尊い血は、決して事態をこのままでおわらせはしなかった。

四月二十五日、教師の立場として学生達の犠牲をみかねた各大学の教授たちが、「学生達が血を流して闘っているのに、教授達がこれを座視することはできない」としてついに起ち上ったのである。教授達は、「我々も血を流してでもデモをしよう！」と叫び、プラカードには「学生の血に応えよ！」と書き込んで、夕暮れのソウルの街へと飛びだしたのである。このデモ隊に学生・市民が加わった。「学生を殺した殺人鬼を処断せよ！」と教授達が叫ぶごとに後から続く学生達がこれを復唱する。「先生ありがとうございます」、涙を流しながら学生達は口々にこう叫びデモに加わっていった。六時五十分、デモ隊は国会議事堂前に到着し、愛国歌を唱って解散を宣した。

ちょうどその時、二台の戦車を先頭に戒厳軍の部隊が暗やみの中の群衆に向かって突入してきた。しかし群衆は一歩もひるまず、戦

車・銃剣に迫り、これを撃退したのである。

闘いはさらに発展する。弾圧が群衆の怒りを呼びおこし、各地で実力闘争が展開された。さらに翌日には五十万の民衆が決起し、ついに李承晩の独裁にとどめをさしたのである。二十七日李承晩は大統領を辞任した。また李起鵬一家はピストル自殺をとげ、李承晩は永世執権の夢破れ海外へと逃亡していったのである。

これによって十二年にも及ぶ李承晩の独裁政治は人民の怒りの鉄槌のもとに消え去った。それは蜂起の過程でたたきこわされたマッカーサー像に象徴されるように、米帝へたたきつけられた鉄槌でもあったのだ。

ここでおさえておかねばならないのは、この闘いの中心を担った学生達は、何らの指導的団体の援助もなく、孤立無援で闘い抜いたということである。何故なら当時の韓国では前衛党が弾圧をうけて潰滅状態であり、蜂起を支持しえる団体が存在しなかったからである。しかし学生達は「大学の厳然たる良心」「人間として訴えねばならない学窓の良心」にもとづき「青年学徒のみが真正な民主主義歴史を創造する担い手になれることを肝に銘じて」総決起していったのだ。

まさにこうした精神こそ、韓国の学生運動を一貫してつらぬいているあの革命性の根源に他ならない。

Ⅲ　南北分断の中で

(1)　南北統一運動の中で

四・一九蜂起は、李承晩打倒という大勝利を獲得したが、前衛なき闘いであったため、多くの限界を有していた。即ち打倒されたのは李承晩一派にとどまり、韓国の反動陣地をつき崩すには至らなかったのである。したがって、多くの犠牲者の上に築かれた革命の果実は、反革命どもの手に奪われることになったのであった。

四月二十七日に発足した許政(ホジョン)政権は革命の圧殺攻撃にうってで、さらにこれを退けた民主党の張勉(チャンミョン)が韓国民衆の上に君臨することとなった。張勉は李承晩政権下においては野党人として人民の支持を一定集めていたが、自らが政権につくや米帝への追従を強め、李政権を踏襲して反米民主化闘争の圧殺にのり出した。

これに対し、再び学生の熾烈な闘いが展開されていく。学生の闘いは四・一九によって一定獲得された自由の中で高まった南北統一熱の中で高揚し、民族自決主義を基軸として、反帝・反体制闘争を組むようになった。とりわけ張勉のうち出した「反共特別法」と「デモ規制法」を二大悪法としてとらえこれの粉砕闘争を行なうとともに、米帝に対する怒りを燃やしていったのである。これらの闘いは民族解放―南北統一熱をさらに拡大、南北の交流促進をはかり、「南北学生は板門店で会おう!」をスローガンとして運動は進展する。一九六一年四月十九日、ソウルで学生・市民十万余の決起のもとに四・一九一周年集会がひらかれた。そこにおいて学生達は、南北統一を強く訴えた。

この学生達の前進を張勉はもはやおさえられなかった。南北学生二〇万の板門店での歴史的会談は、誰にも阻止できないものと思われた。しかしながら、かかる解放闘争の進展に恐怖した米帝は、五月十六日、朴正熙一味をつかって軍事クーデターをおこさせ、かかる闘いの圧殺をはかるとともに、韓国のファッショ的支配を生みだしていったのである。韓国学生運動はここにおいてさらなる苦行へと突入し、数々の感動的な闘いをくりひろげていくのである。

(2)　反革命朴カイライの登場と学生

一九六年一五月十六日、二十日にひかえた南北学生会談に肝を潰した米帝は、CIA所属の朴正熙(パクチョンヒ)一派をつかって軍事クーデターをおこさせた。これによって、かつてヒロヒトに忠誠を尽す血書をしたためて日帝軍に加わり、岡本中尉の名で「朝鮮人討伐」に幾度も参加した民族反逆者が韓国民衆の上に君臨することとなった。朴は五月二十日、「国家再建非常法」を発令して、学生・言論人等の一斉検挙を開始し、さらに六月十日、KCIA発足、七月三日には「反共法」を公布してそのファッショ的体制を固めた。そうしながら反民族・非民主主義の独裁政治を合法化すべく「民族的民主主義」なるものをとなえ、一方で米帝のみならず、日帝との提携をますます深め、そのカイライ色を強めていったのである。これに対する学生の闘いは、当然ながら反朴のカテゴリーにとどまらず反米・反日の闘いとして貫徹されていく。一九六四年五月二十日、ソウル大をはじめとする五千名の学生が決起し「民族民主主義葬儀式」を挙行した。

屍(しかばね)よ!　きみは、遠い昔に死に、そして腐りかけているのだ。魂のぬけがらよ!　反民族的・非民主主義的「民族民主主義」よ!　腐りかけたきみの屍の悪臭は「サクラ」(日本帝国主義)の香り(侵略臭)となって、ついにわが学園のかぐわしい常緑の林のなかにまでただよい、きみと日本(天皇)との二代雑種、いわば(サクラ)を植えつけようとしている。

生前にも罪多くして非難ばかり受けた屍よ!　今もにおってくる、きみのその強烈な臭いが、今この瞬間にも充血した猟犬のようなその眼から、われわれを強襲する。屍よ!　死んでまでも、改悪と造語、金言と翻意、乱動と不安そして弾圧の名手となったのか。

反民族的・非民主主義的「民族的民主主義」よ!　村夫(子)の情感をもってしても、碩学の頭脳をもってしても、難解きわまりない「主義」よ!　いったい、きみの正体は何であるのか。うじ虫と悪臭、そのうえにだけ咲く「サクラ」の落しダネたるきみよ!　朴議長のいわゆる民族的民主主義よ!　きみの本質は、すなわち霧である。

ある春の日、朝霧のなかから生まれ、霧のなかで死んだきみよ!　優柔不断と正体不明、詐欺詐称と支離滅裂であるきみは、その混合物である。数限りない躊躇と翻意、茫漠とした政治理念、果てしない混乱と無秩序、そして屈辱的な事大主義根性、方向感覚と主体意識と指導力の喪失、これらがまさしくきみの全貌である。

このような荒唐無稽ないわゆる革命精神と曖昧模糊とした理念なるものをそのままかかげ、公約だ、再建だ、紐帯の強化だ、高利債だ、五ヵ年計画だ、と吹聴し、おまけに思想論争までひき起こす。そのふてぶてしい心臓はいったいどこから借りてきたのか。それは、おそらく「テンノーヘイカ」から借りてきたにちがいない。かつての日本軍のあの戦慄すべき伝統のカリスマ的性格が、今日の韓国軍隊の根底に横たわっていて、虚妄な権力への野望とともに問題の胎児を育て上げるいるのだ。「五・一六」(軍事クーデター)の民族的民主主義よ!　白衣の民がきみに与える真っ白な襲衣(死人に着せる衣服)をまとって、きみの故郷――霧のなかへ静か(無言)に帰れ!　屍よ!　やがて霧は晴れ、太陽はまぶしく輝き、　澄みきった朝が訪れよう。そのとき、きみも天上からこみ上げてくる喜びに号泣するであろう。早く死んで倖せであったきみの運命に、きみは感謝するがよい。

しかし、屍よ!　今この瞬間、きみは何をしているのか、何を

企んでいるのか。今しがたきみの隣人〔日本政府〕ととりかわした口許のうすら笑いは、いったい何を意味するのか。大量検挙の軍令か、催涙弾発射の信号なのか。いや、屍よ！　それは、胸張りさけんばかりの熱い祖国ときみとの最後の握手であると、われわれは信じたい。われわれは知っているのだ。それが死人の口許にただよう倖せな微笑であることを!!　屍よ！

弔辞を朗読したあと学生達はデモに移り、これを弾圧せんとする武装警官隊に対して石ころと、ゲバ棒で応戦、約五時間にわたる実力闘争を展開した。この闘争で学生二七九名が負傷し、六八名が検挙された。また、この闘いを支援した市民も弾圧され、四九名が検挙された。だがかかる弾圧にもめげず、学生達は朴一派との対決姿勢を強めていった。

(3)　日韓会談粉砕をめぐって

日帝とのゆ着を強める朴は、日帝との国交正常化を早期になすべく、日「韓」会談の調印へとひた走った。これに対し日帝は、朝鮮人民の当然の主張たる賠償問題に一切目をつぶり、過去の植民地統治を合法化する態度をもってのぞんだが、カイライたる朴はこれに迎合し、日帝の侵略反革命を許すかたちでの調印をなさんとしたのである。これに対し学生達は、朴一派を売国奴として糾弾し、あらゆる闘争を展開したが、とりわけ一九六四年の六・三闘争は熾烈をきわめた。この闘いは、四・一九後最大の蜂起であり、二万の決起によって闘われたが、朴は即座に非常戒厳令をひいて、さらに五万以上の軍をソウル市内に導入し苛酷な弾圧を行なったのであった。しかもこの闘いは労働者・市民との団結を断ち切られ、学生独自の孤立した闘いであったため学生は再び苦敗をなめねばならなかったのである。ここでこの闘いの思想性を知るため、前日「高麗大学救国闘争委員会」が発表した宣言をみてみよう。

高麗大宣言（一九六四年　六月一日）

宣言文

今日、われわれは、祖国の歴史の呼びかけに応じて決意と行動による対政府闘争を宣言する。

われわれの祖先たちは、民族の生活進路が一歩進めば指標すら見当らず、それ以上無残な人間生活をしいられることにたいして、深く悲しむであろう。われわれは今、民族の臨終を告げる痛哭を聞かされようとしている。独裁と前代未聞の恐るべき不正腐敗・不信・悪徳財閥のくびき。これらすべての奸悪な政治的退廃が、行動の前衛に立つわれわれと全国民の課題として要求される朴政権打倒の理由である。

わが国の民主政治とその将来のため、もう二度と憲政に逆行する軍の不法クーデターを許してはならない。われわれは、民族主義という指導イデオロギーを仮飾的に標傍した五・一六軍事クーデターの末路を直視した。結局、彼らの無知と無能は、高度の資本主義段階に達した日本の悪らつな新植民地主義経済侵略の商品市場としてこの国土を売り渡そうとしている。祖国の主体性を守ろうとする民族主義も、米国の徹底した干渉によって重ねて挫折せざるをえなくなった。

今や、われわれは、真の民族主義をこの廃墟と焦土の上に再生させうる政権を期待する。ファッショ化に向わざるをえない軍事クーデターの社会を、われわれは受け入れることができない。また、われわれは、主体性を喪失したまま、ある特定の宗主国〔アメリカ〕に依存し、そのときどきの様子で変転きわまりない旧政治人の非民族的な政府〔樹立〕にたいしても決死的に反対するであ

ろう。

われわれは、合憲的な民主主義が強靱に主体性を堅持しながら現実的に民族の餓死状態を打開しうる遠大なビジョンをもつ民族的な政府を渇望する。

親進歩・反保守の語句が反共法に抵触するという窒息しそうな言語のタブーを打ち破ろう。

そして、そのような状況で現実的で実利的な民主主義を培養しよう。

「俺でないと駄目だ」という李承晩の政治哲学を、朴政権は花束として貰い受けているのか。われわれは再び、真の民主主義の正しい進路を探るために朴政権を打倒することを全国民とともに決議するものである。

檄　文

わが友、わが下宿の後輩であるY・T・K〔青年思想研究会――学園内のスパイ・テロ団〕よ、今日の歴史的要請に叛逆せず、温かい自由の懐ろに戻って、この闘いの隊列に参加せよ。

きょう、われわれは、この行動を民族の広場で決意し、独裁・情報・腐敗政治と対決するために街頭に再び飛び出さざるをえなくなった。自由民の後裔たちは、全民族の念願を痛感して、この隊列に参加せよ。

朴政権の似而非民族的民主主義は葬り去られ、朴山君〔朴正熙を李朝時代の暴君・燕山君にもじったもの〕と金完用〔李完用を金鍾泌にもじったもの〕もその埋葬式を終えた。それゆえ、今まさに、実利ある、そして融通性ある現実的民主主義の豊かなタネを撒く新しいときが到来した。

われわれは、われわれの目的が達成されるときまで飢餓の街に出て裸足で闘争を続けるであろう。

一、主観的な愛国と忠誠は客観的には亡国的行為であることを直視して朴政権は下野せよ！

一、民族分裂を事とする独裁政権は退きさがれ！

一、空腹で死にそうだ！　悪徳財閥を殺せ！

一、米国は仮面を脱ぎ捨てて真の友好国であることを示せ！

一九六五年二月二十日、『日「韓」基本条約』の仮調印が行なわれ、同年六月二十二日、本調印が行なわれた。これをめぐって幾度となく壮絶な闘いがくまれ、そしてまたその度ごとに苛酷な弾圧が行なわれた。しかしながら、光州学生運動の英雄的伝統を受け継いだ学生達は、再度自らの前に登場してきた怨敵日帝と真正面から対決し朴カイライの弾圧をはねのけ、文字通り死をも辞さず闘い抜いたのである。その原動力となったものが、闘いの正義性とそしてまた、日帝に対する心底からの憎しみであったことは疑う余地もない。

日「韓」基本条約後、日帝は飛躍的に侵略反革命政策を激化させ、そして今日に至っている。とりわけその間において「高度経済成長」のピークをむかえ、われわれ日本人の物質的「豊かさ」が保障されていったことをみすごすことはできない。韓国学生は、われわれが日帝足下においてぬくぬくと育っていくこの時期に、さらにさらに苦しく辛い闘いへと突入していったのである。その延長上に現在の韓国学生と、日本学生があるのであり、現象的には独裁との対決ではあっても、本質的には日帝の新植民地支配―侵略反革命との闘いとして現在の学生運動があるのだということをわれわれはふまえておくのでなければならない。

(4)　学園自由守護闘争と三選改憲

一九六五年九月十八日、学生の闘いに恐怖し、なんとかこれを鎮

静化せんとする朴は、学園御用化をもくろむ「大学教育正常化法案」を発表した。その中には、全面的軍事教育の実施、団体活動の校外発展阻止、デモ指導学生の公職からのしめだしなどがもり込まれ、学生運動の文字通り露骨な破壊攻撃がなされてきなのである。これに対し学生達は、「学園自由守護闘争委員会」等々を組織し、闘うことを誓いあった。ここにおいて注目すべきことは、四・一九蜂起、六・三闘争を通しての教訓により学生運動が自然発生的なものから組織的なものへと発展したことである。

だがしかし、朴は一層弾圧を強化することをもってこの闘いに応えた。これ迄韓国の支配者達は、一様に南北分断を固定化する反共軍事体制の確立に力を注いできたが、とりわけ朴は、反共政策を徹底させ、その中で一九六六年一月十八日、「学徒軍事訓練団」実施計画を発してきたのである。さらに七月十一日から六ヵ月間「大学実態調査」を行ない、学園の管理支配体制を飛躍的に強化させた。ここにおいて学生達は、学園の自由を守護し、あらゆる管理支配との対決を行なっていったが、それは学園を単に防衛するためにではなく、かかる弾圧をうち破って街頭へおどりだし、朴との全面闘争を克ちとるために闘われていったのである。具体的には、当時続々と明らかになった朴一味の汚職事件、あるいは不正選挙に対する糾弾闘争と密着して、数々の学生決起が克ちとられた。しかし一方ではまた学生達の闘いは、前衛党がなかったが故に労働者・農民を組織的に立ち上がらせることができず、常に満身創痍で「孤独な闘い」として続けられねばならなかった。ひたすら民族的良心と歴史的使命感に燃えて起ち上がった学生達は、その都度権力者の銃剣とテロルで尊い血を流さざるをえなかった。しかし学生こそは荆の朝鮮民族史を守ってきた叡智であり、「番兵」であった。学生達の壮厳な気概や、汚れのない愛国心や、燃えさかる正義感こそは、韓国の暗黒と荒涼そのものの歴史に常に明るい光を投げ続けているのである。

一九六九年九月四日、朴は圧倒的な反対を力によっておし潰し、白色テロルが吹きあれる中で大統領の三選をねらう憲法改正案を成立させてしまった。さらに一九七〇年に入って、弾圧があまりの苛酷さをしめしたため政治的スローガンを掲げた学生運動は停滞せざるをえなかった。しかしながら学生達は、不当処分の撤回など学園内の要求をかかげた闘争をキャンパスで執拗に続け、七〇年代の闘いに向けて陣形構築をなしていったのである。

Ⅳ　軍事独裁下の学生運動

(1)「非常事態宣言」下の闘い

学生達は、七〇年代に入りそれ迄の「孤独な闘い」から労働者・農民との団結を求めて模索をはじめた。丁度そのころ(十一月三日)、資本家の苛酷な搾取に対して闘っていた青年労働者・全泰壱（二十二歳）が「私の死を無駄にするな」と遺言して焼身自殺を遂げた。かかる労働者達の壮絶な闘いを見た学生達は労働者達の基本権利擁護に起ちあがり、それから連日各大学で労働条件改善を要求する集会がひらかれた。

一九七一年四月二十七日「三選改憲」による大統領選挙が実施された。この選挙に際し朴一味はありとあらゆる手を駆使して選挙干渉を行ない、また、巨額の資金をはたいて票あつめに躍起となった。（朴の選挙が総額三〇〇億ウォンであったのに対し、金大中氏は四億ウォンしか調達できなかったといわれる）その結果朴は六三四万対五四〇万という僅差をもって金大中に「辛勝」したが、与党民主共

和党の議席数は大きく後退したのである。この事実は、学生・労働者の闘いに勇気を与え朴政権を脅かした。

この時、米帝ニクソンの訪中という「歴史的事件」がまきおこった。これによって、かたくなな反共政策を固執してきた朴は、青天の霹靂ともいえるショックを受けた。動揺した朴は同年一二月六日、「国家の安全保障上の危機」を理由に韓国全土に「非常事態宣言」を宣布した。即ち「中国の国連加盟、米中接近等々、韓国にとって不利な条件がそろいつつあり、かかる情勢を背景に北が侵略せんとしている」というデッチ挙げをなすことによって破綻に追い込まれた反共政策を護持せんとしたのである。さらに十四日「非常事態下で行うべき教育六個条・実践方案」なるものをうちだし、「安保教育」＝反共教育の強化をもって、学生達のキバをそごうとせんとした。また二十七日には「非常事態宣言」を合法化する「国家保衛法」を成立させた。これによって事実上憲法は停止され、朴が「非常大権」を握ることによって、その政権の「親政体制」を確立してしまったのだ。そしてこの権限をもって朴は各学園を徹底的に痛めつけ一切の自由を奪ってしまったのである。キャンパスはテロルで埋め尽され、「非常事態宣言」下において学生達はかつて経験したことのない苦難の時代をむかえたのである。

一九七二年七月四日、唐突に「南北共同声明」がソウル・ピョンヤンで発表された。それは韓国社会に大きな反響をよびおこしたが、韓国学生達はこれを支持しようとはしなかった。即ちかかる声明をなしつつも、反共体制を一層強め、「反共法」違反者を死刑にしていく朴の姿から学生達は、米ソ・米中関係に示される冷戦、緊張緩和を何よりも恐れ、自政権の延命のためにのみ、この声明を利用せんとする朴の欺瞞的意図を見抜いたのである。だがしかし無論学生達にとって南北統一のへ熱情がなかろうはずがなかった。ただ学生達は南北統一をなしとげるにあたって、まず第一に何よりも朴を打倒せねばならないということを強く自覚していたのである。

(2)　一〇月維新体制と民青学連事件

一九七二年十月十七日、朴は韓国全土に非常戒厳令をしき、憲法停止、「国会」解散、政党活動禁止、各大学休校の、マス・メディアの事前検閲を実施、さらにソウル市街に戦車を出動させて民衆を威嚇し沈黙させた。これがいわゆる「10月維新体制」の出発であり、朴による「第二の軍事クーデター」と呼ばれているものである。さらに十月二十七日は、大統領権をさらに拡大する憲法改「正」案が発表され、形式だけの国民投票を十一月二十一日行なってこれを成立させてしまった。新憲法によれば大統領選挙は朴の翼賛組織たる「統一主体国民会議」で行なわれ、また四選禁止条項も廃されてしまったのである。

かかる十月維新体制確立後朴は、それ迄は官製記念集会まで催していた「四・一九革命」を一転して敵視しはじめ、翌七三年の四月十九日は、それ迄毎年各キャンパスであらゆる集会が行なわれていたにもかかわらず、重い沈黙のみにおおわれ過ぎ去ってしまった。ここにきて学生達の怒りは爆発した。おりしも八月八日、ＫＣＩＡの特務による金大中氏の強制拉致という蛮行が行なわれ、これによって明らかにされた日「韓」関係は、長い間学生達に蓄積されてきた反日感情にも火をつけたのである。

十月二日、ソウル文理大生三〇〇余名が決起し、二〇〇名の検挙者を出した。しかしながら、この報はまたたく間にソウルの各大学にひろまり、学生達は相次いで反朴、反日の決議をあげて、校内デモ・ハンストを貫徹する。その参加学生は十一月十九日現在で十万を突破し、維新体制は大きな打撃をうけた。

これに呼応して、各界の人士が起ち上がり、張俊河（チャンジュ

ハ）らを先頭として、民主主義回復・憲法改正をかかげた一〇〇万人署名が開始された。署名は、初日（十二月三十日）に三十万を集め、翌年一月四日には四十万突破というすさまじい進展をみせた。これによって、朴政権崩壊は既に時間の問題であるとさえいわれたが、朴は最後のあがきとして、ついに極限的弾圧を開始したのである。

一九七四年一月八日、朴政権は「大統領緊急措置」第一号、二号を発動、張俊河ら三十六名を逮捕し、非常軍法会議に回付した。これによって署名運動は破壊され、学生運動も暗い沈黙におち入らねばならなくなったが（張俊河はその後変死体で発見）、しかし学生達は怯まず各地で反朴デモを貫徹していったのである。なかでも四月三日、民青学連によって発せられた「民衆・民族・民主宣言」は、朴をして心底恐怖におとし入れた。

一九七四年四月三日　民青学連宣言

まさに民権勝利の夜明けが迫りつつある。恐怖と搾取、欠乏と貧困に喘いできた民衆が、いまや絶望と圧制の鎖を断ち切り再び起ち上がりつつあるのだ。

昨年の歴史的な十月闘争にたいする彼ら権力を握る徒輩の応答は、ただ欺瞞的会議と暴圧政治の増大のみであった。彼らは、今まで肥やしてきた腐敗特権体制を少しも放棄する意志のないことを明らかにし、搾取、蓄財、差別、放蕩など拭うことのできない罪悪を悔い改める意志が少しもないことを露骨に表明している。

〔彼らは〕飢餓輸出立国、ＧＮＰ信仰を教理としてかかげ、民族資本の圧殺と買弁化を慫慂して数十億ドルの外債を国民に転嫁させ、血税をしぼり取って絶対権力と独裁政治の資金にしている。主要経済部門の族閥私有化をたくらんできた彼ら買弁集団こそ、今日のとり返しのつかない惨状をもたらした張本人である。ごく少数の特権族閥たちは、国民経済が全面的な破綻状態におちいるや、まるでその原因がすべて国際的原材料の暴騰にあるかのように、その責任を転嫁して真実をおおいかくすのに汲々としているのみである。このような国民経済の全面的破綻は、資源と労働力を安値で〔外国人に〕売り渡し、外国独占資本をこの地の経済宗主として根を下ろすようにした買弁特権体制と、不正腐敗の余波が拡大再生産される娼婦的経済構造の産物であることは明白な事実である。今日の物価高と経済破綻をもたらした不正特権族閥たちは、こうした庶民生活の危機に際しても巨大な利益を貪りながら民衆の不満をなだめようとしている。だが、これは、終局に至った彼らの余命を保とうとしての最後の悪あがきにすぎない。

民衆の惨状のなかで、かえって豪遊放蕩している彼らの背後には、数多くの民衆の血と汗が凝結しているのを知らないのか？飢餓賃金で酷使されている勤労大衆と封建的搾取下でうめいている農民、そしてまた一つの隔離された世界で拡大されていく板子村〔バラック部落〕――これが十三年間にわたる祖国近代化の業績であるのか？

このような労働者・農民収奪体制の守護神は、まさに一人独裁体制と情報暴圧政治である。五年前の三選改憲のときから露骨になった永久執権の野望は、国民の基本的権利を蹂躙する一方、これに抗議する学生、知識人、宗教家等数多くの愛国者を逮捕・拘禁・拷問・投獄する蛮行をほしいままにはたらいている。

いわゆる維新という奇怪なクーデター、国家非常事態と一・八〔大統領緊急〕措置によって暴圧体制を完備して言論を弾圧し、学園と教会にたいする抑圧を一層加重させることによって批判を根こそぎ封鎖している。批判を許さない政治、これがはたして韓国民主主義であるのか？

祖国の平和的統一をかかげて始められた南北対話によって、これまでにわれわれは統一の門の前に近よるどころか、かえって民族の永久分裂に向って走っており、南北対話は永久執権のための装飾物以外の何ものでもなくなった。澎湃として起こっている軍国主義を再びこの地の歴史のうえに植えつけようとする野望を露骨にしている日本支配層の韓民族分裂を永久化しようとする言動にたいして、抗議一つできないのが彼らの主体性であるのか？

南北統一がただ彼らの専有物であるかのように騒ぎたて、暴力政治と民衆収奪体制をますます強固にするとき、統一への道は一層遠のくのみである。

自由と平等が保障される真の民主主義の勝利のみが統一への捷経ではないのか？

みよ！　自由を剝奪して奴隷状態を強要する彼らギャング集団を。

みよ！　豪遊放蕩を事とし、民衆の肉と骨を呑みこんで肥えたあの売国奴たちを。

われわれは、腐敗特権族閥たちがしでかした、このような破滅状態をこれ以上座視することができないのだ。彼らの足もとで死に、奪われ、苦しむもろもろの民主勢力が民主・民権・民族の旗じるしのもとに続々と集まり来つつある。いかなる強圧、いかなる暴圧をもってしても、怒濤のように渦巻きながら滔々と流れるこの波を決してとどめることはできないだろう。

われわれは、反民主的・反民衆的・反民族的集団を粉砕するために、崇高な民族民主戦列の先頭に立ってわれわれの肉体を燃やし捧げようとしているのである。

今日のわれわれの決起は、学生と民衆と民族の意思を代弁し、この地に真の自由と平等を実現するための民衆的・民族的・民主的運動であることを明らかにするとともに、次のように決議する。

(1)、腐敗特権族閥の蓄財のための経済政策を是正し、不正腐敗特権の元兇をただちに処断せよ。

(2)、市民の税金を大幅に減免して国民経済の基盤である勤労大衆の最低生活を保障せよ。

(3)、すべての労働悪法を撤廃して労働運動の自由を保障せよ。

(4)、国家非常事態宣言、一・八措置等により拘束されたすべての愛国者をただちに釈放し、維新体制を廃棄して真の民主主義体制を確立せよ。

(5)、すべての情報暴圧の源泉であるＫＣＩＡをただちに解体せよ。

(6)、反民族的対外依存経済を清算して自立経済体制を確立せよ。

以上のわれわれの主張を貫徹させるため、最後の一人まで、最後の一瞬まで闘うことを歴史と民族の前におごそかに宣言する。

行動事項

ソウル市内の全学生と市民は、本日午後二時に市庁前広場と清渓川（チョンケチョン）五街の四つ辻に集合すること。

一九七四年四月三日　　全国民主青年学生総連盟

朴はついに同日午後十時、「大統領緊急措置」第一号を極限化した第四号を発令、翌日より検挙旋風をまきおこし、五日までに二百数十名を検挙した。さらに「民青学連事件」で人民革命党をでっちあげ、五月二十七日、五六名起訴、内八名は翌年四月八日死刑が宣告され、九日には処刑されてしまったのである。だがしかし、人民革命党事件の戦士達は「反ファッショ・反独裁万才！」、「祖国の統一を願う！」と叫んで、絞首台に登っていったという。彼らは、七四年四月二十七日、被逮捕以後何の事実審理もないまま拷問を受け続けた。そして、あたかも闇から闇へと葬るかのごとく虐殺されてしまったわけだが、八名中三名の遺体は刑務所内で火葬にふされ、また遺族のもとに帰った遺体も、くっきりと拷問の後を残しており、内一名の遺

体は両手の指が全て切断されていたということである。

(3) 朴打倒に向けて ―民主・民族・統一の旗を高く掲げよ！―

一九七四年四月八日、「大統領緊急措置」第七号が発令された。これによって、前日まで熾烈な闘いを展開していた高麗大は、閉鎖され、あまつさえ軍隊が常駐することとなったのである。とりわけ、ベトナムでの闘いの気運が韓国にもちこまれる中、学生はそれまで投石戦等々をもって再三再四実力闘争を展開していたが、この第七号によって闘いは一時後退せざるをえなくなった。かかる時（四月十一日）、朴独裁政権に抗議してソウル農大生・金相真が割腹自殺を行なった。彼は次のような遺言をしたためていた。

一九七五年四月十一日　金相真遺書

われわれは、これ以上、どのようにして耐えしのぶことができようか。これ以上、われわれは彼らから何を望むことがあろうか。深い暗闇がおおう社会の陰うつな空気を払いのけ、死の伝令使が徐々に迫りくるのを、われわれは直視している。今更、何を躊躇し、何を考える余裕があるというのか。

大学は休講の奴隷となり、教授は政府の代弁者となってしまい、親鶏を失ったヒヨコのように、われわれは反応のない慟哭をするのみである。われわれの主張は決して間違っていないのに……。われわれの主張が決して非良心的ではないのに、われわれはどのようにして、これ以上、自己の生存を蹂躙された不名誉な生活を継続するというのか。

われわれを代弁する同志たちは、冷酷な刑務所のなかで呻吟しており、何の罪もない一般大衆は、刑場の露となって消え去っている。民主主義という木は、血を惜しみなく流す犠牲によって育っていくという。

聞け、同志たちよ！　われわれの崇高な犠牲はこの地に永遠なる民主主義の青い葉を一つ一つ繁茂させるのだ。この勇気をふるうのを、なぜきみたちは躊躇しているのか。われわれは、維新憲法の自己中心・利己性を告発しよう。

学友たちよ！　知っているのか。民主主義は知識の産物ではなく闘争の結果であるということを。われわれは、過去を痛嘆する前に、未来を諦める前に、緻密な理性と信念をもって、今日の凄惨な一党独裁の牙城に向って不退転の決意で進撃しよう。

今や、民族史の新しい夜明けが迫り来つつある。この地が恐怖と混乱におちいり掠奪されるのを、誰が望んでいようか。われわれ大学学徒は、民族と歴史の前に奮然と宣言しよう。この政権がいつまでも民族を虐げるならば、自由と平等と正義を熱烈に叫ぶこの地の全市民の峻烈な血の審判を免れぬ、と。歴史はこのような事態を願ってはいないのだが……。

われわれは、一人が斃れ、また一人が斃れても、膝を屈して生きるよりは、むしろ立って死ぬであろうと宣言するものである。

これが民族と歴史のための道であり、これが永遠の社会正義を具現する道であるなら、この取るに足らぬ生命を捧げても惜しくはない。かの地下で私の魂が目をさまし満足げな微笑を浮かべながら諸君の進撃を見守るであろう。

その偉大な勝利が到来する日！　私は声なき熱烈な喝采を満天下に響くように送るであろう。

この金相真の死は学生達に衝撃を与えた。これによって学友は、誰もが胸をかきむしるかの如き悲憤におそわれ、それは朴打倒に向けた決死闘争に油を注がずにはおかなかった。学生達はさらなる闘いへと突入する。

一九七五年五月十四日、「大統領緊急措置」第九号が発令され、学生に対する包囲網は二重、三重に形成された。しかし学生は、一歩も怯まず、いくら検挙されようと、いくら拷問されようと闘い続ける。デモに参加する時は、文字通り死を賭して遺言までしたためて決起がなされているのである。その闘いの内容は、次の宣言に要約されている。

一九七五年十一月十九日

忍びがたきすべての蔑みを忍び、耐えがたきすべての屈辱に耐えてきたわれわれは、きょう、これ以上遅らせることのできない切迫した民族史の呼びかけに応え、強要された長い沈黙を打ち破り、すべての懐疑と躊躇と安逸をはねのけて、自由・正義・自主・平和統一の道を切り拓くための輝かしい抗争の街に躍り出た。

みよ！　安保を口実とした独裁のどす黒い嵐が、消えゆく自由と民主主義のほのかな灯びに最後の打撃を加え、三千里〔朝鮮半島の呼称〕を永遠に搾取と虐待、屈辱と沈黙のどす黒い屍でおおいつくしている。また、政権欲に狂ったひと握りの腐敗・買弁・特権の輩たちが五千万民族の運命を思いのままに切り裂き、破滅と死の谷へ追いやろうとしている。

みよ！　チュー、ロンノルのあまりにも当然な敗亡を目撃しても朴独裁は、あの厳正な歴史の審判になんらの教訓を学ぼうとしないばかりか、かえってこれを歪曲し、断末魔のように狂い始めた。彼らは、またもや緊急措置を連発し、全国民の口にさるぐつわをはめた。彼らは、平和への展望が満ち満ち、おもちゃのピストルの音一つ聞こえないこの地に、いわゆる戦時状態なるものを宣言し、全国民を恐怖と弾圧のなかに追い込んでいる。

彼らは、社会安全法という時代錯誤的な人権剝奪法をつくって、わが国の政治的自由の息の根をとめ、数多くの民主人士・愛国学生と不遇な市民をナチス・ヒトラー治下のユダヤ人のような逆境のなかに追い込んでいる。

彼らは、民〔間〕防衛隊を編成して全国を兵営化し、そのうえに統・班組織を強化し、さらに五戸を一組として互いに監視・密告させる組織をつくることなどによって、前代未聞の監視・査察・統制の窒息するような網を張りめぐらした。

彼らは、再び愛国学生たちを投獄し、金大中、金芝河、朴恫圭（パクヒョンキュ）氏らの民主人士を謀略的な裁判に回附し、張俊河氏を疑問の死のままで暗葬し、言論・宗教・法曹・知識人たちにたいする弾圧を強化し、自由党〔李承晩政権時代の与党〕政権時代の遺物・学徒護国団という名の学生御用団体を急造して学園の自由を抹殺した。

彼らは、防衛税という名の二重課税と住民税という前近代的な人頭税を新設し、そのうえに各種の税金と公課金を大幅に引き上げ、はなはだしくは、どこに使うのか知るよしもないいわゆる防衛誠金なるものを強制徴集することによって企業家と中小商人を破産させ、庶民大衆を塗炭の苦しみのなかに追い込んでいる。

彼らは、外国資本と買弁資本の利益に奉仕するために、暴騰する物価高の状況下において労働運動と農民運動を弾圧しながら、絶えない低穀価・低賃金政策で農民、労働者、俸給生活者ら多数の民衆に日ごとにひどくなる生活苦を強要している。（中略）

彼らは、今日のような安保危機のもとでは大きな自由のために小さな自由は制約されなければならない、という。だが、彼らのいう大きな自由とは、まさに彼らひと握りの圧制者たちが心ゆくまで搾取し、心ゆくまで特権にひたり、心ゆくまで腐敗し、心ゆくまで享楽に耽ける自由であり、小さな自由とは、大多数の民衆がみずからの存在を維持し最小限度の人間らしい生活を闘いとるための言論・集会・批判・結社の自由ではないのか。

今日の事態がまことに危機というならば、危機打開のために制約されなければならない自由とは、特権層の自由であるのか、民衆の自由であるのか。（中略）われわれは、はっきりと宣言する。朴独裁が抑圧をやめ腐敗と特権を放棄するならば、その場で国民総和は達成されるであろう、と。しかし、そうでない限り、国民総和は達成されないだろうし、いかなる暴圧をもってしても民衆の不平と抗議は変わることはないだろうし、朴独裁は日々深化する政権危機に落ち込んでいくであろう。

われわれは、悲痛な心情で朴独裁に問う。すべての民衆生存の権利と政治的自由が剝奪され民主主義が絞殺された今日の事態がつづくならば、われわれ若者たちは、守るべき価値を失った愚かな前線に立って誰を守り、何を防衛しろというのか、と。汚なく腐った政権を守るために、このはてしのない屈辱と侮辱、抑圧と搾取、飢餓と疾病と重労働のくびきを守るために、誰も生命をかけはしないということを、朴独裁ははっきりと知らなければならないだろう。（中略）

戦争の炎がサイゴンとプノンペンに立ちのぼる前に、祖国に背を向けて金・銀・宝貨を積み込んで逃げ出したのは、独裁者が逆賊よばわりした民主人士ではなく、まさに愛国を独占し安保を口実として民主人士たちを弾圧した独裁層の者ではなかったのか。われわれが真にベトナム、カンボジアの事態から学ばねばならない教訓は、これなのだ。朴独裁は、この歴史の教訓から眼をそらし、チュー、ロンノルの恥ずべき前轍を踏みながら敗亡への道を突っ走っている。

みよ！　国際社会で孤立した彼らの醜悪なざまを！　彼らは民族の尊厳と矜持を、履き捨てた草履のように投げ捨てて、キーセン〔妓生〕外交、もの乞い外交で国民の血税を浪費する国際乞食へと転落した。彼らは、米国であれ日本であれ、見さかいもなく、外国軍隊の力を韓半島〔朝鮮半島〕にひき入れ、彼らの腐った政権を守ってもらうため、民族経済の中枢的利益を根こそぎ売り渡しさえして外国の大資本を誘致している。

彼らは、そうすることによって、わが国を現代の新生国世界の大潮流をなしている非同盟運動の門前で追い払われる、国際孤児の運命へと没落させた。彼らは、自主的平和統一、民族的大団結の原則を是認した七・四共同声明の精神に忠実な、そして誠意ある統一政策を推進してみる前に、軽卒にも戦時状態を宣言し、全民族を絶滅させる核戦争の惨禍を韓半島に引きこもうとするシュレジンジャー〔米国防長官〕の核使用保障を何の条件も前提もなしに歓迎した。

今や、わが民族は、世界史の大潮流から眼を外らし、平和と祖国統一への悲願を踏みにじり、自主政治・自立経済への道を封鎖し、世界的な緊張緩和の趨勢のなかで、かえってもう一つの同族相戟の核戦争の恐怖に慄かなければならない呪われた運命の前に置かれている。これらのすべてが、腐敗・特権層の政権の長期維持のためとあれば、それは何ごとをも辞さないという朴独裁のせいである。朴独裁の血走った危機意識は、五千万民族に災難をもたらす以外の何ものでもない。（中略）

われわれは全身で叫ぶ。ただ民主化・均等社会・自主政治・自立経済の道のみが、そしてその基礎のうえで南北共同声明にしたがって民族大平和時代を定着させる道のみが、真の安保・民主安保の道であり、われわれが生命を投げうって闘い、求める唯一の道である、と。

全国の各級男女学友たちよ！

今や、われわれは、生か死か、自由か奴隷か、平和か戦争か、統一か分断か、を断ずる厳粛な民族史の決戦場に立とう。何を躊躇するのか、何を恐れるのか。何をこれ以上待たねばならないと

いうのか。いつまであの政権欲に狂ったひと握りの腐敗特権分子たちに、われわれの民族的運命が切り裂かれるのを傍観しえようか。（中略）

搾取を受け、抑圧を受けるすべての民衆よ、あらゆる悲しみにくれ忍びがたきを忍んできた人びとよ、来たれ！　そして、われわれの隊列に加わり、われわれとともに肩を組んで心の限り一緒となって血の炎を燃やし、あの傲慢な十五年独裁の牙城に向って不退転の決意で進撃しよう！

人間としての存在と民族の尊厳をとり戻そうとするわれわれのこの正義の隊列を、誰がさえぎることができようか、何ものが止めることができようか。〔われわれは〕跪いて奴隷として生きるよりは、むしろ立って闘い自由人として死ぬことを願う。

進もう、闘おう、死のう、そして勝とう！

民主・民族・統一の旗を高く掲げよ！

自主政治・自立経済・民族平和を成し遂げよ！

腐敗・買弁・特権を根こそぎ取り除こう！

維新憲法、緊急措置を撤廃させ、自由民権を死守しよう！

物価高に抗議し、殺人税金を拒否しよう！

学徒護国団を解体させ、学園の自由を奪還しよう！

投獄された民主人士と愛国学生を救出しよう！

一九七五年十一月十九日　　ソウル大学学生会

(4)　ついに崩壊した朴体制

「大統領緊急措置」九号下におかれた韓国学生達は、一九七六～九年にわたってねばり強い闘いを展開していった。この間の闘いはすでに多くの同志の知るところとなっているので詳しくはふれないが、KCIAの監視下で、七八年六月予告決起を始め幾度とない決起が闘われてきたことをおさえておきたい。

またその闘いは、李小仙女史をはじめとする平和市場労働者をはじめ多くの労働者と結合して闘いぬかれていった。学生達は、朴政権下でも、ギリギリのところまで搾取されている労働者と自己の関係をとらえかえし、積極的に労働者と手をつないでいったのである。たとえば一九七九年九月二十六日、梨花女子大でくばられた宣言の中には次のような言葉がある。

「われわれはツツー・パパのようなアイスバーをおいしいと楽しんでいるかもしれない。そのヘテエ会社が私達と同じような年若い女性たちに一日十二時間も労働させ、それに抗議した女子労働者たちを追放しようとしている。われわれはこの社会に立派に寄生している両親のおかげでこの大学で学んでいる。しかし、このわれわれが着ているものが同じ女性の血と涙の産物であるのにだ……」

朴体制下の韓国は、確かに「驚異的」な経済成長をなしていった。しかしそれを支えたものは、日帝からの借款と、弾圧の中で労組すらつくれずにギリギリのところまで搾取されてきた労働者であった。

こうしたことを見抜いていた学生は、労働者の犠牲の上になりたつ社会にあって、「学生」であることの意味を自己に問い続け、「この社会に寄生」しているが故にこそ、労働者のために闘わねばならないという価値観を身につけていったのである。こうした思想性こそ、遠く「二・八独立宣言」を発した留学生達の闘いから一貫してつらぬかれてきた、韓国学生運動の魂であることは言うまでもない。

一九七九年に入るや、韓国経済は一転して大不況に突入した。それは直接には第二次石油値上げの影響によるものであるが、本質的には、一九六五年の日韓条約以来、日帝経済の下に隷属化してきた韓国経済の必然的帰結であった。

これにより韓国では、八月YH貿易労働者らの闘いをはじめ、労働者によるもう一歩もひけないところからの闘いがわき起こってい

く。

こうした中で、十月十三日、釜山大生のデモをきっかけに、釜山で大規模な蜂起がおこり、それはすぐさま、「自由貿易地域」のある馬山へと波及した。ここ数年来なかった学生と労働者がガッチリと結合したこの蜂起は、支配層を恐怖のドン底にたたきおとし、絶望的な動揺がひきおこされた。それは朴の「維新体制」が、すでにニッチもサッチもいかないところまできていることを示していた。

そして十月二十六日、悪虐の限りをつくした朴は、ついに腹心金載圭によって射殺され、　みじめに死んでいったのである。まさに朴は、釜山・馬山の蜂起によって打倒されていったのだ。

(5)　朴なき朴体制の粉砕にむけて

釜山・馬山での徹底した闘いによって、ついに朴を打倒した韓国民衆は、維新残党の追放にむけ、さらなる闘いを展開しはじめた。とりわけ、数年にわたって苦しめられてきた悪法・大統領緊急措置九号解除の声が日ましにたかまり、ついに十二月八日、これがかちとられる。

だが、こうした人民の進撃に恐れをなし、「弾圧をしても、しなくても闘いがひろがってしまう」というジレンマにたたき込まれた支配層の中から、十二月十二日、全斗煥が粛軍クーデターによって登場した。これとともに「維新体制」の申し子全斗煥に対するすさまじい激突が開始される。

一九八〇年四月、東原炭鉱で暴動がおこった。この闘いは各々の学園で維新残党教授を追放し、闘争陣形をつくりあげていた学生にすぐさま波及する、そしてついに五月の闘いが大爆発する。

五月一日、「戒厳令解除」をかかげ、忠南大生三千名、成均館大生千五百名、ソウル大生千五百名が火ぶたを切った。さらに二日、ソウル大で一万名以上の学友が集会に参加、全斗煥のワラ人形を焼くなどし、また成均館大生千五百名、全北大生千名は街頭デモを貫徹、警察隊との投石戦を展開し、ジープを転覆させて放火した。三日にはソウル大生五千名、高麗大生二千名、全北大生二千名、全南大生二千名が学内集会をかちとる。

この三日間の闘いで四十五名が逮捕されたが、闘いはより一層拡大していく。

五月四日、ソウル大生二千名、高麗大生千名が校庭にすわりこみ、五日には数大学が闘争に参加する。さらに六日延世大八千名、梨花女子大三千名、韓国外語大生千五百名、全北大生三千名が決起。七日にはソウル大をはじめ七大学一万五千名が起ち上がり、なかでも街頭デモに飛び出した韓国外語大生七百名は、一四九名の逮捕者をだした。闘いは日を追って、大きく大きく拡がっていく。

八日ソウル国民大生五百名は、警察隊の阻止線を突破して学外にとびだしたが、ほぼ全員の四八五名が逮捕された。さらに九日、檀国大生三千名、ソウル大生千五百名、延世大生千名、梨花女子大生三千名、釜山大生千名が学内集会を貫徹した。

これに対し全斗煥は休校令を発し、十二日には戒厳軍を公共機関に配置したが、学生の怒りはさらに、燃えあがっていく。

五月十三日、延世大二千名、ソウル大四千名、梨花女子大五千名、西江大八百名、高麗大千名が休校令をうち破って決起。

さらに五月十四日には韓国の過半数の大学生六万名が、そして翌十五日には十万名が一斉に決起し、各地で投石、火炎ビンをはじめ大規模な闘いが展開された。

(6)　そして光州で

学生達のこの大決起に恐怖しきった全斗煥は、クーデターを敢行

し、梨花女子大に集まっていた学生代表や、金大中氏をはじめ多くの抵抗人士を逮捕、また戦時閣議を開いて㊀戒厳令の全土拡大、㊁政治活動禁止、㊂全大学休校、㊃前現国家元首(朴・崔)への非難禁止を決定するとともに「国家保衛委」の設置を内定した。

しかし、全斗煥の武力のみをもってする、こうした弾圧こそ一層韓国民衆の怒りをかきたて、ついにあの光州蜂起が開始されるのだ。

五月十八日、光州全南大生らが全斗煥の発した布告に、まっこうから挑戦するごとく街頭にうって出た。これに市民が合流、投石戦をもって警察隊を撃破する。

しかしこの時、あの全斗煥の急派した空輸特戦団が、帯剣で光州の学生、市民におそいかかり、多数に惨殺暴虐の限りを尽したのだ。この許すことのできない暴挙、人間とは思えない特戦団の姿、そしてそれと闘い死んでいった学生達の叫びが、光州市民を、決戦へと突入させていく。

十九日、怒れる光州市民二万が街頭にとびだした。文化放送局などを占拠した市民達は、特戦団の虐殺行為に糾弾の叫びをあげる。

だが特戦団は翌二十日に、より一層のテロルをもって襲いかかった。デモ隊がそしてそれを見守る市民が、次々と銃剣で刺し殺されていく。逃げおくれて頭を打ち砕かれた老人、孫の死体にかけ寄ったところを刺し殺された老婆、裸にされて乳房を切り取られた女学生、銃剣で腹をきりさかれ胎児を取り出された妊婦ら、多くの市民の無惨な死骸が町を埋め尽していく。

この時、誰かの口から「市民たちよ、みんな立ち上がりましょう。私達の息子たちがみんな死んで行きます。工具であろうが、鍬であろうが手当り次第持ってきて戦いましょう。」という叫び声があがった。ワーァとあう喊声とともに、手に手に武器をもった市民が結集をはじめる。今まで見物をして追い散らされていた市民が、一転して闘う兵士へとかわっていく。

午後七時、バスやタクシーを先頭にした数千の市民が次々と軍に突撃をはじめた。さらに十万市民がたちあがって、放送局・新聞社・道警などを占拠する。――光州はまさに武装蜂起に突入したのだ。

翌二十一日、武器庫を襲って装甲車・M16小銃などを奪取した、光州二十万市民は、特戦団とすさまじい銃撃戦を展開したのち、ついに全市を制圧した。蜂起はさらに木浦・羅州をはじめ、全羅南土全域に拡大する。

この闘いに参加し闘う、ある市民は次のようなメッセージを送っている。

「木浦市民のかなりの数が武装した。務安、一孝等から人々が農具などを持ってこちらに集まってくる。われわれは、ここで自由と民主を死守して死ぬであろう。出合う人々に伝えてほしい。われわれ全南の人々は戦って死ぬのだと。……」それが光州市民三十万の叫びであることは言うまでもない。

二十二日、軍と全く対等の関係で交渉に入った光州市民は、軍のどう喝に一切屈することなく、二十三日、徹底抗戦を決意して交渉をうち切った。

そしてついに忘れることのできない、あの二十七日をむかえるのである。

午前三時半、ブラックベレーを中心とする戒厳軍は、空陸から市内へ侵入を開始した。市民軍は、圧倒的な武力を誇る戒厳軍に、何らひるむことなく真正面から立ち向った。たちまちすさまじい銃撃戦がわきおこる。重戦車や対戦車ミサイルを中心に侵攻する戒厳軍に、小銃を手にした市民軍が次々と突撃してゆく。殺されても殺されてもふつふつと湧きおこるがごとく、突撃をつづける市民軍の戦士たち。

しかし強悪きわまりない戒厳軍の前に、二時間にも及ぶ大戦闘を敢行した光州市民は、ついに制圧されてしまった。戒厳軍はさらに

多数の市民を虐殺し、あるいは逮捕していった。
そしてその後の展開は、すでに同志諸君のよく知るところとなっているとおりである。

V　韓国学生決起から学ぶものは何か

(1)　果てしなき自己葛藤の中で

さて今迄見てきたごとく、韓国学生運動は、日帝支配下の三・一蜂起、光州学生決起の伝統を根強く受けつぎ、常に反帝(反日)反独裁闘争として壮絶に闘い抜かれてきた。
しかもここに挙げたのはそのガイストに他ならず、どれひとつとってみても、われわれを深く感動させずにはおかない闘いが展開されてきている。
それでは一体われわれはここから何を学びとっていかねばならないのだろうか。
その前に指摘しておきたいのは、韓国学生一人ひとりがどのような気持ちで闘い抜いているのか、まさに自己の問題としてとらえていかなければならないということである。というのは、ともすればわれわれ日帝足下にある学生は韓国の学生決起に口先きでは「連帯」を叫びながらも、それを彼岸化させてとらえたり、あるいは感動をおぼえながらもなお「あれ程の弾圧にあるから、あれだけの闘いができるのだ」などとまったく没主体的で、日和見主義的な考えをもってしまいやすいからに他ならない。
無論のこと、弾圧というものはさらなる闘いの糧でしかないし、事実あの光州蜂起も、ブラック・ベレー部隊の虐殺行為が引き金になっている。そうであるが故に、光州市民を大虐殺した全斗煥はかならずや韓国民衆の鉄槌によって、李承晩や朴正熙のごとく打倒されるだろうが、ここでは問題は別である。
たとえば、中央大生・宋基元(ソキウォン)君はその手記の中に次のようにしるしている。

「若い世代」という言葉ほど眩しいものはない。私は本からそのように学んだ。そこにはただ若い世代であるというだけで、あらゆる誤った既存の秩序に反抗する権利があり、そして新しい秩序をうちたてる権利があり、詩人のように激烈な社会的情熱があり、何よりも行動へのめくるめく約束がある。

私は新ためて自らに質問する。「お前は若い世代なのか?」私はその質問に「そうだ」と答えることができない。私の「若い世代」を踏みにじってしまう第一義的な責任は何と言っても自分自身にある。そして私はこの韓国で若い世代という言葉の意味がどのように転注されるかを、あまりにもはっきりと知りすぎているのである。この暗い暗黒の状況では若い世代とは、むしろ自らを殺害する一つの兇器にしかすぎないのだ。「若い世代」という眩しい言葉は、私に自己犠牲を強要する。私は私の若さも、私の愛も、私の母も棄てなければならない。私の全てを棄てなければならない。ここに私の葛藤がある。このような葛藤の中で、私は自分自身に絶望するしかない。そして唯この韓国で生きているというそれだけの理由によって、私はくり返していうが利口で狡猾だ。私は今にいたるも刑務所暮らしをしたことがない。

私が若い世代だと言えば当然乍ら私は行動しなければならないのだが、このような政治状況下では、行動というものはなぜか死を決意する最後の勇気のように思われて、なおのこと私を若い世代でありえなくさせる。詩人のように激烈な社会的情熱で行動に出てゆく……なんと怖ろしいことか!

私はどうすればいいのか、これ以上弁明の必要もないほど、私は結局若い世代でありえないが、しかし私はただ一つだけは断言できる。
それが最後の道だとはっきり自覚できる時、私はただ一度だけは若い世代であることができるだろう。どうせ命なんかたいしたものではないから、未練なしにささげる覚悟が私にもあるということだ。私はただ一度だけでも「若い世代」であることができるならば、この汚れた命をただ一度は見事に使うだろう。そして心はずむ思いで「光栄です」といおう。……こんな国なんかすててしまいたい。この国が私たち若い世代にそむくように、私もこの国にそむきたい。
しかしそれでも自分は、祖国をすてることができないのだと、宋君はむすんでいる。

「若い世代」とは一体何であるか、われわれはその言葉の意味が、決してこの手記にかかれたものだけではないことを知っている。
「若い世代」とは人生の中でも一段とかがやく、もっとも素晴らしい時を生きる人々のことであり、ある時は恋愛に心をときめかし、またあるときは何らかの冒険をし、またある時は文学や芸術など、人民のつくりだしたあらゆる英知を満喫して感嘆にふけるときでもある。
しかしこのような時代を韓国の学生達は、弾圧によって一色にぬりつぶされ、闘いと死の間に立たされて、果てしない葛藤の日々を送っているのである。
彼らにあっては、闘わないことは恥であり、監獄に入ったことがないことは卑怯者を意味する。全てを投げうち、自らの命を捨てさることができるか否かということが、「若い世代」足りうるか否かの尺度となっているのである。

そうであるが故に、彼らは「民族のために生きかつ死んでいく」という崇高な思想性と、「生きたい、人を愛し続けたい」という人間としてごくあたり前の心情の中で、果てしなき自己葛藤をくり返し、それをのりこえて決起していくのだ。
だからこそ「青年大衆よ、死をのりこえて闘おう」(一九二九年光州決起)、「進もう、闘おう、死のう!しかるのちに勝利しよう」(一九七五年民青学連宣言)、「死のう、殺してくれ」(一九八〇年光州)というスローガンは、まさに彼らの胸の中からとびちった血叫びなのだ。

(2)　韓国学生のように闘おう!

同志諸君、われわれは、この間TVや新聞で武装し闘う幾多の学生、市民の姿をみてきた。銃を手に顔をタオルでかくしたもの、機動隊のヘルメットをかぶり、光州市内のパトロールにでるもの、そして戒厳軍に虐殺され無惨に死体をひきづられていったものをだ。
彼らひとりひとりこそ、まさに宋基元君であり、果てしない葛藤をのりこえて闘いかつ死んでいった「若き世代」なのだ。もっと生きたかっただろう、もっと生きてわれわれが今そうしているように、友人と人生を語りあかしたり、あらゆるものに感動したり、恋をしたり、もっともっと人を愛したかっただろう。しかし彼らは自ら死を選んでいった。「出会う人々につたえてくれ、われわれは闘って死ぬのだと」と言い残し、戒厳軍に対して、小銃一丁かかえて突撃していったのだ。そこには民族のために自己を犠牲にしていく崇高な、何ものにもかえがたい思想性がながれている。たとえ自らの肉体が、どのように切りきざまれようと、かならずや民族が解放されることを信じて、無言のまま、それこそ誉められることも讃えられることものぞまず突撃していく、すさまじいまでの革命精神がそこ

にはある。

われわれが学びとらねばならないものこそ、こうした革命精神であることは言をまたない。

同志諸君、われわれは確かにいまだ韓国民衆の足下にもおよばない存在であり、ともすればちっぽけなことで動揺してしまうような存在にすぎない。

だがしかし、だからこそわれわれは心底韓国民衆に学び、韓国民衆のごとく生きかつ死んで闘うことをめざそうではないか。ひとたび党と革命と人民のためにささげんと決意したこのわが身であるならば、自己へのこだわりやプライドを一切かなぐり捨てて、ただひたすら人民のためにこの肉体をついやし、いついかなる時にも自己の全てを喜んで闘いのためにさしだすことのできる主体への飛躍を悪無限的に追求していこうではないか。

たとえどれほどの弾圧をうけようが、「光栄です」と胸をはって叫び、死刑を宣告されようとも「祖国統一を願う」といいのこして平然と絞首台をのぼっていった、あの韓国民衆の戦闘精神で全身全霊を武装し、闘って闘って闘い抜いていこうではないか。

そしてそのためには、われわれは、自己自身にきびしくあるのでなければならない。常に自己との内在的対決をかちとり、小ブル的自我を一歩ずつ克服していくために、すさまじいまでの決意をして闘いにのぞまねばならない。こうした内在的な決起のバネは、光州市民が生きかつ死んで闘うことで、われわれに与えてくれたではないか。一センチでもいい、一ミリでもいい、前へ進もう。そしてかならずや韓国学生たちのごとく闘い抜けるようになろう。そのためにも自ら進んで苦闘に身を投じていこうではないか、同志諸君！

(3) 日本学生が侵略反革命阻止の旗手となろう！

韓国民衆のすさまじい決起を前にして、いま日帝は恐怖のドン底におとしこめられている。そうであるからこそ彼らは、飛躍的に朝鮮侵略反革命戦争の準備を進めている。七月にうち出された「中期業務見積り」のくりあげ達成こそは、まさに韓国民衆の決起によって自らの「死期」が一層近づいていることを見てとった日帝の、それこそ生死をかけた侵略反革命戦争遂行への決意に他ならないのだ。

韓国の学生達は、闘いの中で、常に労働者人民との関係から自己をとらえ返し、自己の闘いを責務としてとらえていった。

ましてやわれわれは、彼ら学生をはじめ、全朝鮮人民に、日本人民としての歴史的血債を負っているのだ。そうであるからこそ、われわれは韓国民衆に教えさとされたことをバネに、何が何でも侵略反革命戦争を阻止せねばならない。

そしてその闘いの旗手をこそ、わが日本学生が演じようではないか。日本学生の死をも恐れぬ隊列をもって、日帝の侵略反革命戦争を、武装蜂起—内戦へと転化していこうではないか。まさに光州市民のごとく武装蜂起して闘いぬくことがわれわれの歴史的使命なのであり、そのように闘いぬいてこそ、われわれは、真に韓国民衆とともに歩んでいくことができるのである。

同志諸君、世界史はまさに「戦争と革命の時代」に突入した。この闘いをわれわれは、あの気高き韓国民衆とともに闘っていくことができるのだ。これにまさる喜びがあるだろうか。この闘いにわれわれも参加するのだという誇りを胸に闘いぬいていこうではないか。韓国民衆蜂起に、自らの一切を投げうって闘うことで応え、侵略反革命を蜂起—内戦に転化しうる社学同の強固な隊列を創出しよう！生きかつ死んで闘いぬく韓国民衆の精神で武装し闘いぬこう！ 最後の最後までともに闘わん！

本論文の最後に、四・一九革命に決起し、李承晩に虐殺されていった、わずか十四才の少女・陳英淑(チンヨンスク)さんの遺書をしるしておく。

『時間がないのでお母さんにおあいできないので、でかけます。最後まで不正選挙糾弾のデモに加わって闘います。いま私の友だちはみな、そして大韓民国のすべての学友たちは、みな、わが国の民主主義のために血を流しています。

お母さん、デモにでかける私を叱らないでください。私たちでなかったら、だれがデモをするでしょうか？ 私はまだ世間知らずだと思っています。しかし国家と民族のための道がどのようなものであるのかはわかっています。あの喊声がいまも聞こえてきます。

いま私の心はあまりにもせわしいのです。私の学友たちはみな、死を覚悟してでかけたのです。

私は生命をささげてたたかうつもりです。

デモの途中に死んでも悔いはありません。お母さん、私を愛するお気持ちからずいぶんかなしくお思いでしょうが、すべての同胞の将来と民族の解放のために喜んでください。私の心はすでに街にとんでいっています。

あまりにもあわただしいので、手が思うように動きません。どうかお体を大事にしてください。重ねて申しあげますが、私の生命はすでにささげようと決心しました。時間がないのでこれでおわりにします。』

編集後記

八月一日、金大中氏は軍事法廷に起訴された。私たちは全斗煥一味の暴挙を絶対に許してはならない。そして韓国民衆の光州での闘いを防衛するためにも金大中氏を殺させてはならない。現在日本でも、多くの労働者、学生が金大中氏をはじめとする政治犯救援運動を展開している。その中で私たちは、原稿を書き、ここに新たな「若きボリシェヴィキ」を発刊するにいたった。新たな、というのは、この「若ボリ」は二次ブント当時、社学同早大支部の機関誌として発刊されたものだからである。かつての「若ボリ」は、二次ブントの組織的脆弱性を克服し、革命党への飛躍をめざしたものであった。私たちは、新たな「若ボリ」を、再建社学同が被抑圧民族人民と連帯し、日本階級闘争に真に貢献する、確固不抜の組織へと自らを高めあげる決意表明としたい。

「再建集会基調報告」においては、戦後学生運動、とりわけブント社学同の歴史的対象化と総括をおこない、再建社学同の闘いの方向性を示すものとしてある。そして「韓国学生運動史」は、私たちが規範とすべき韓国学生の革命的な闘いの歴史を対象化し、死をも恐れず闘う彼らの戦闘性と、闘いの質を日本学生運動史にうちたてんとするものである。

各支部の闘いの総括と展望には、まだまだ不充分ではあるが、韓国学生運動の闘いに、にじりよらんとする各支部の苦闘が、行間ににじみ出ていると思う。

「ドイツイデオロギーノート」は私たち闘う主体が、獲得すべき世界観を提示したものとしてある。マルクス主義者への自己形成に向けた糧としてほしい。

金大中氏をはじめとする政治犯は、年内にも軍事法廷で裁かれんとしている。私たち社学同はこのような全斗煥を許さず、今秋、安保—日「韓」体制打倒、三里塚空港粉砕の闘いを光州蜂起と真に連帯するものとして闘いぬくことを決意している。

すべての学友は社学同の真紅の旗の下に結集し、共に闘わん。